e-FICTIONS

SEIKAISHA

本作品は、縦書き表示での閲覧を推奨いたします。横書き表示にした際には、表示が一部くずれる恐れがあります。

ご利用になるブラウザまたはビューワにより、表示が異なることがあります。

星海社
FICTIONS

ダンガンロンパ霧切 7

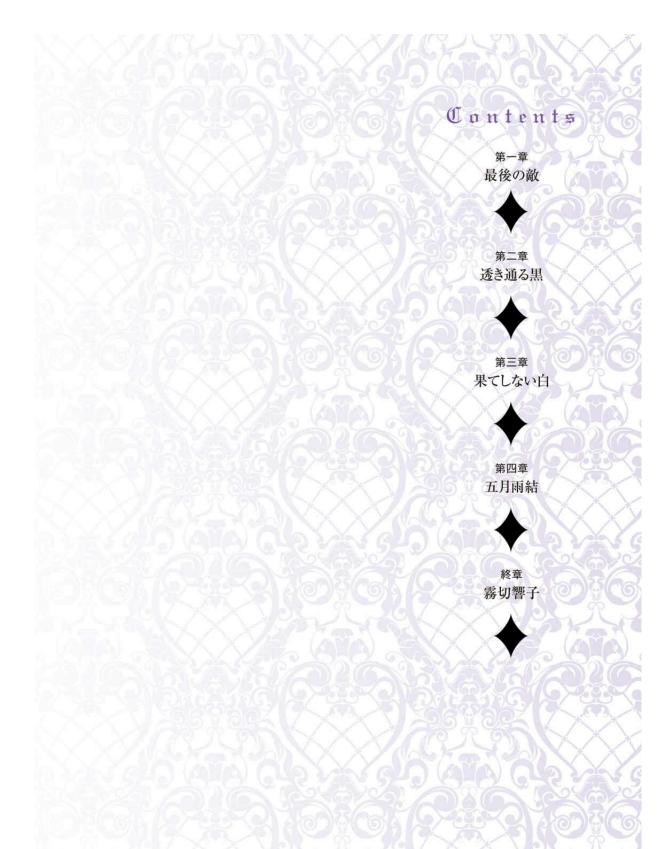
北山猛邦
Illustration／小松崎類

星海社

7
ダンガンロンパ
DANGANRONPA
霧切
KIRIGIRI

Contents

第一章
最後の敵

1

　降り出した雪がバス停の屋根を白く縁取(ふちど)る。わたしと霧切(きりぎり)は屋根の下で雪をやり過ごし、遠い町の灯が灰色の帳(とばり)に滲むのを眺めていた。

　帰りのバスはまだこない。

　バス停の名前は『探偵図書館前』——

　二月の終わり、わたしと霧切響子(きょうこ)は探偵図書館を訪れた。

　探偵図書館とは、およそ六万五千五百人の探偵の情報が収められている場所だ。探偵はそれぞれDSC（ディテクティブ・シェルフ・クラシフィケーション＝探偵図書館分類）という独自の分類法で書棚に振り分けられ、彼らに救いを求める人々が、目的の探偵を探し出しやすいようになっている。

　DSCは三桁の数字で表され、上の二桁の数字が探偵の得意分野を示す。そして下一桁の数字が、今までどれくらい事件解決に貢献してきたかなどを示すランクになっている。

　わたしが霧切と初めて出会った頃、わたしのDSCナンバーは『888』——ランクは『8』だった。数字は『9』から始まって、ランクが上がるたびに減っていく。

　あれから二か月半。登録カードの更新を頼むと、数字は『885』になっていた。

「み、見て、霧切ちゃん！　またランクが一つ上がったよ！」

「しーっ、館内ではお静かに」

　いつものように職員にたしなめられる。ひっそりとした館内にはわたしたちの他には誰もいなかった。

「よかったわね、結(ゆい)お姉さま」

　霧切響子は冷めた顔で云(い)う。

　ちなみにこの時、彼女のDSCナンバーは『912』になっていた。中学一年生で『2』というのは、もはや世界を代表するレベルといっていいだろう。そんな才能を持った少女と、わたしはこの二か月半の間、一緒に事件を解決したり、同じ部屋で生活したりしてきた。わたしのランクが上がったのも、ほとんど彼女のおかげだ。彼女と出会った事で、わたしの運命は大きく変わっていったのだ。

　けれど……はたして彼女との出会いは偶然だったのか？　それとも最初から仕組まれていたものだったのか？

　今となってはもう、わからない。

　どちらにしても、わたしにとって彼女の存在が、かけがえのないものであることに変わりはない。きっと運命というものは、どんな道筋をたどっても、あるべきところへ収まるようになっているのだ。

　わたしはあらためて、『885』が刻印されたカードを眺める。

数字が減るたび、わたしは憧れの存在へ近づいていく。真実を追い求め、人々を救う探偵。何よりこの数字がわたしだけのものではなく、霧切と一緒に歩んできた記録であるということに貴さがある。
　帰りのバスを待つ間、しきりにカードを眺めるわたしを横目に見て、霧切は「嬉しそうね」と云った。横顔を向けたまま、白い息をそっと雪に紛らすように。
「そりゃあ、ランク『５』だもん。わたしが生涯かけてようやく達成できるのが、せいぜいそれくらいだろうと思ってたからね」
「自分を過小評価しすぎではないかしら。結お姉さまの実力があれば、もっと上に行けるはずよ」
「おや、どうしたの。そんなにほめてくれるなんて珍しい。今日は別にわたしの誕生日じゃないよ」
「私は事実しか云わないわ」
「だとしたら君はわたしのことをなんにも知らないんだよ。わたしはそこまで頭もよくないし、要領もよくない」
「探偵であり続けることに、頭のよさも要領のよさも必要ではないわ。でも……結お姉さまの云っていることは半分正しいわね」
「半分？」
「私は結お姉さまのことを知っているようで、何も知らない」
　彼女は遠くを見て、ここにはいない誰かに向かって喋っているみたいだった。
「でも君しか知らないこともたくさんあるよ。一緒にお風呂入ったことあるのは君だけだし……」
　取り繕うように喋るわたしに、霧切はほとんど関心を向けなかった。
　いつかわたしたちは、事件とか探偵であることとか関係なく、二人の女の子として付き合うことができるようになるのだろうか。わたしにはどうしてもそんな未来を思い描けなかった。
「霧切ちゃんは嬉しくないの？　だってもうランク『２』だよ。目標のゼロクラスまであと少しじゃない」
「ただの通過点よ」
「さすが」わたしは首を竦めて云う。「通過点ってことは、そのあとは？　ゼロを増やして、ダブルやトリプルになるつもり？」
『０』は最高ランクの証。それからさらに功績を重ねると三桁の数字すべてが『０』となり、トリプルゼロクラスと呼ばれるようになる。
　トリプルゼロクラスは過去に数人しか存在していない。いずれも常識をはるかに超える規格外の探偵たちだ。
『安楽椅子伯爵』──龍造寺月下。
『法執行官』──ジョニィ・アープ。

『正体不明』──御鏡霊。

彼らはみんな、わたしたちの前を通り過ぎ、恐るべき速さで遠くへ行ってしまった。彼らとの戦いはあまりにも現実離れしていて、今思い返しても夢だったのではないかと思えるほどだ。

……リコは今頃、アメリカで楽しくやっているだろうか。

「『0』は一つで充分だわ。それ以上は必要ない」

「どうして？　目立ちすぎるから？　そういえば霧切家の探偵は目立っちゃいけないんだっけ」

「ううん。探偵図書館に登録している時点で霧切家の探偵としてはふさわしくない。それでも私には、どうしてもやらなきゃいけないことがある」

「やらなきゃいけないこと？」

わたしが尋ねると、彼女は言葉を探すように少し沈黙してから、続けた。

「……決別」そう云って目を伏せる。「そのためには希望ヶ峰学園に行く必要がある。あの学校はスカウト制だから、実績がないと見向きもされない。そういう意味では、探偵図書館の数字がわかりやすい指標になるのよ」

「そうか、君……希望ヶ峰学園に行くつもりなんだ」

わたしはようやく彼女が見据えている未来を知ることができた気がした。そして彼女が抱えている問題も──

思い当たる節がないでもない。わたしは少し前に偶然、霧切響子の父親と会っている。彼は霧切家を出て、今は希望ヶ峰学園で教師をしているという。娘に対して『合わせる顔がない』と云った彼の寂しげな表情を今でも覚えている。

彼は家族も探偵の誇りもすべて投げ捨てて出ていった──少なくとも霧切響子はそう考えている。そんな父親を恨んだこともあったはずだ。けれど彼女があえて父親のいる希望ヶ峰学園を目指すのは、恨みや憎しみの感情だけでは説明がつかない。かといって歪んだ愛情とも違うだろう。

彼女は頭がいい。それもとびきり。だからきっと彼女自身、過去に囚われ続けている自分がいることを冷静に分析できているはずだ。そしていつもの謎解きと同じように、その呪縛を解く方法に思い至ったのだろう。それが父親への決別宣言。彼に会って別れを告げる、そうすればこの問題は終わると彼女は考えているのだ。

けれどそう簡単に割り切れるだろうか。これは心の問題だ。密室や暗号の謎解きとは違う。

そもそも彼女の父親は、けっして彼女を見捨てた訳ではない。けれどわたしがそれを伝えたところで彼女は信じないだろう。第一、わたしが彼と会ったことは彼に口止めされている。軽率に口に出すことはできない。

いつか二人が和解できる日が来ればいいのだけれど……

　わたしは霧切の横顔を見つめる。まだ幼さが残る頬（ほお）に雪のひとひらが落ちて溶けた。それは彼女がそこにいて、生きているという証拠。その事実が愛おしい。

　彼女のために、わたしにできることが少しでもあればいいのに。

　ふと、霧切が顔を上げて、道の先を見つめた。

　雪降りのヴェールの向こうから、バスがやってくる。

　やがてバスはわたしたちの目の前で止まった。わたしと霧切はバスに乗り、並んで座席に着いた。

　それから停留所をいくつか過ぎたところで、フェルト帽を目深に被ったスーツ姿の老人がバスに乗り込んできた。彼はわたしたちの横を通り抜ける際に「目由良（めゆら）駅に行くにはこのバスでよろしいのですかな？」と尋ねてきた。わたしは肯（うなず）いて「そうですよ」と返した。

「ありがとう」

　そう云って彼はわたしたちの後ろの座席に着いた。唇の右端に大きな傷があるのが印象的だった。

2

　三月から期末試験が始まった。

　事件の解決に追われる日々だったので、ろくに勉強もできていない。案の定、結果は散々なものだった。

「この点数では、そろそろお仕事の方も考え直すべきではないかしら？」

　クラス担任の女性教師は嫌味っぽくそう云った。わたしが探偵の仕事で学校を休むことを、担任はあまりこころよく思っていない。

「自業自得よ」

　霧切には、そう一蹴（いっしゅう）された。

　彼女のテストはというと、やはりほとんど満点だった。世界を相手に事件解決の手伝いをしてきた彼女にとって、中学生の問題など取るに足らないものだろう。

　霧切は先月から、わたしと同じ寮に部屋を借りて住んでいる。それまでは狭い部屋でわたしと一緒に住んでいたのだけれど、寮長が見かねて、空いている部屋を貸してくれたのだ。本来は高校生用の寮なので、あくまで特例だ。彼女の複雑な事情を察してくれたらしい。

　部屋は別々でも、大体はどちらかがどちらかの部屋にお邪魔していて、以前と変わらず一緒にいる事が多かった。

いつまた、事件が舞い込んでくるかわからないからだ。
けれど今のところ、犯罪被害者救済委員会は沈黙を続けている。
元トリプルゼロクラスの探偵、新仙帝(しんせんみかど)が率いる犯罪被害者救済委員会は、一般の犯罪被害者に復讐(ふくしゅう)をそそのかし、『黒の挑戦』と呼ばれるゲーム仕立ての凶悪犯罪へと駆り立てる。その組織にはブレーンとして龍造寺月下やジョニィ・アープも参加していた。
けれど今は龍造寺もジョニィもいない。組織は龍造寺を失うことで、彼自身が云っていたように『片腕をなくすのと同じくらい』の痛手を負ったはずだ。またゲームのルール違反者を処理していたジョニィがいなくなったことで、ゲームそのものが成り立たない状態になっているとも考えられる。
残るは組織のラスボス、新仙帝のみ――
現状、組織がどの程度弱体化しているかはわからない。もしかしたらなんの影響も受けていない可能性もある。組織は新仙の魂をそのまま形にしたものだ、というようなことをジョニィが云っていた。もしその通りだとしたら、どれだけ外堀を埋めたところで、新仙帝本人を叩(たた)かなければ、組織は死なない。
偽装と変装を得意とする神出鬼没の『変奏探偵(ヴァリエーショニスト)』――新仙帝。彼は今、どこで何をしているのだろうか。次に何を企(たくら)んでいるのだろうか。
学校は試験を終えてから、卒業式まで一週間ほど、試験休みに入る。三年生はこの期間に卒業式のリハーサルをすることになるけれど、一年生のわたしには関係ない。
試験休みの間、わたしと霧切は一緒に勉強したり、新しい料理に挑戦したり、束(つか)の間の平穏を楽しんだ。多くの人にとって、ごく当たり前の日常――それがわたしたちにとっては特別で、きらきらとしていて、まるで硝子(ガラス)のようで……薄く、脆(もろ)く、儚(はかな)いものだった。
この平穏があっさりと崩れ去る日がくる。そんなことはわかりきっていた。何故(なぜ)なら、まるでわたしたちの未来に横たわる影のように、黒々とした一枚の紙きれが、教室にあるわたしのロッカーの中で、今も眠っているからだ。
それは真っ黒な名刺だった。
ジョニィがわたしのために残してくれたものだ。おそらく悪意はない。けれど善意とも云い切れない。彼は『Life is what you make it!(人生はお前次第)』というメッセージを添えて、その名刺をくれた。

罪被害者救済委員会
12地区代表
藤(んどう)　藤吉郎(とうきちろう)　TEL ××-××××-××××』

額面通り受け取れば、この名刺は犯罪被害者救済委員会に所属する者の名刺ということになる。

けれど犯罪組織が名刺など使うのだろうか。堂々と組織名まで掲げて？　なんのために？

もしこれがその辺に落ちていたものなら、気には留めても、真に受けることはなかっただろう。けれど他でもない、組織の幹部であるジョニィが、命がけの戦いのあとでくれたものだ。きっと冗談の類ではない。

これはおそらく、新仙帝へ近づくための片道チケットだ。

そう考えると、一枚の紙きれがとても禍々(まがまが)しいものに見えてくる。まるで呪いの札だ。

この名刺のことは未だに霧切には隠したまま、云い出せずにいる。直感的に、彼女に見せてはいけないと思ったのだ。

もし見せたら何かが終わる予感がした。

それはこの戦いの終わりかもしれない。

あるいはわたしと霧切の関係の終わりかもしれない。

それとも——世界の終わりだろうか。

少なくともまた彼女を危険に晒(さら)すことになるのは間違いない。そう考えると、そのカードを切ることはできなかった。わたしにだって……もちろん霧切響子にだって、日常を楽しむ権利がある。それなのに、自らの手で、束の間の平穏を壊すことなんてできない。一体、そんなこと、誰にできる？

そのせいで、わたしはずっと後ろめたさを抱えていた。

一緒に勉強していても、一緒に料理をしていても、頭の片隅にあの黒い長方形がちらついていた。

これでは本当に呪いの札だ。

このまま放置するわけにもいかない。もしかしたら組織が弱体化している今こそ、叩くチャンスなのかもしれない。そう考えるとすぐにでも何かすべきではないかと気ばかり焦(あせ)る。

そこでわたしは試験休みの最終日に、いよいよ行動に移すことにした。

といっても、電話をかけてみるだけだ。

相手の反応を窺(うかが)うだけ。それだけだ。イタズラ電話みたいなもの。その程度なら、波風を立たせることもないだろう。わざわざ霧切を呼び出すほどのことでもない。

わたしはその日、一人で寮を出て、近くの繁華街へ向かった。三月も半ばになってなお、冷え込みは続き、道行く人たちはマフラーや手袋をして、厚手のコートを着込んでいた。

ひと気の多いファストフード店に入り、ハンバーガーとアイスティを注文する。トレイを受け取って、テーブルに着いたところで、記憶していた名刺の電話番号をケータイに打ち込んだ。

大丈夫。ケータイはもちろん非通知にしている。相手はこちらが誰なのかわかるはずもない。そもそも

イタズラ電話に誰が注意を払うものか。
　わたしは震える指先で、通信ボタンを押す。
　かかった。
　スピーカーから例の通信音が聞こえてくる。
　一回……
　二回……
　その時、ファストフード店内で、誰かのケータイが着信音を鳴らし始めた。
　はっとして店内を見回す。
　物憂げなカップルや、ポテトの山に目を輝かせる子供たち。平和そうな家族連れ。ヘッドホンをしてノートパソコンを操作している外国人……
　そんなありきたりな光景の中、一際黒い闇をたたえた人物が、テーブル席に腰かけていた。
　フェルト帽を目深に被った老人――
　鳴っているのは彼のケータイだった。
　テーブルの上で着信を知らせるライトが点滅している。
　老人はおもむろにケータイを手に取った。
　そして通話ボタンを押す。
　すると同時に、わたしのケータイが誰かと繋(つな)がった。
　店内で笑い合う子供たちの声が、少し遅れてスピーカーから聞こえてくる。
　もはや疑う余地はない。
　あの老人だ。
　わたしは恐怖のあまり、身動きすらできず、ケータイを耳から離すこともできなかった。
「……あなたは？」
　恐る恐る尋ねる。
　すると老人は傷のある口元を歪めて、にやりと笑った。
『善意の第三者です』
　彼はそう云った。
　あの印象的な口元の傷――数日前にバスの中で行き先を尋ねてきた老人だ。思い返すと同時に寒気を覚える。いつもお前たちを見ているぞ。柔和(にゅうわ)な笑顔の端で、いびつな傷口がそう囁(ささや)いているように見えた。
『警戒する必要はありません。もしあなたに危害を加えるつもりなら、もっと前にそうしていました。それは

おわかりでしょう』
　わたしは返事はせず、ただじっと老人の姿を見つめていた。もし彼が少しでも不審な動きをすれば、いつでも逃げ出せるように。
『あの不良アメリカ人が、あなたにどんな余計な置き土産(みやげ)をしたかと思えば、まさかこれとは。おかげで時計の針を進めざるを得なくなってしまいましたな……』
「あなたの目的は？」
　わたしは老人の言葉を遮(さえぎ)るように質問を投げかける。
『我々の目的はいつも一つです。理不尽に人生を奪われた人々の救済──我々はあなたの人生を取り戻すお手伝いをさせていただく者です』
「ええ、それはよく知ってる。犯罪被害者救済委員会。優しい顔して近づく悪魔」
『否定はしません。世間が悪魔と呼ぶだけの力を、我々は有しております』
「先月まではね。でも今はどうなの？」
『さすが、我々の事情にお詳しい様子だ。けれどご安心を。事情がどうあれ、あなたの救済をおざなりにするつもりはありません。我々はあなたの味方です』
「わたしの味方？　さっきから何を……」
『復讐したくはありませんか？』
　老人の囁くような声が耳に届く。
「もしかして……」わたしはようやく老人の素性に気づく。「わたしに『黒の挑戦』の犯人をやれっていうの？」
『おや、すでにご承知かと』
　黒い名刺。救済を囁く声。そして復讐へのいざない──老人は犯罪被害者救済委員会のただの構成員ではない。窓口なのだ。『黒の挑戦』の犯人たちはみんな、彼のようなリクルーターを通してゲームに参加する。以前、捕まえた犯人からそういう話を聞いたことがある。
「そっちこそ、わたしの立場を知らない訳ではないでしょ？　わたしはあなたたちがこの世から消えていなくなればいいと思ってる。人選ミスじゃないの？　わたしが誘いに乗ると思ってる？」
『それを判断するのは我々ではありません。あなた自身です』
　──人生はお前次第。
　ジョニィの言葉が頭をよぎる。
　老人はけっしてこちらを向くこともなく、帽子に視線を隠したまま、正面を見据えている。あの老人がケータイ越しに話している相手は、本当にわたしなのだろうか？　奇妙な距離感がわたしの現実感を

狂わせる。
『今さら詳しいルールの説明は必要ありますまい。これまで同様、復讐に必要な凶器やトリック、舞台などはこちらでご用意させていただきます。もちろん揃えた手札のコストに従って、探偵を一人、召喚させていただくことになります。そして見事、探偵の妨害をかわし、標的を一人残らず殺害することができれば、その時あなたは新しい人生を獲得するのです。血にまみれた悲惨な過去とついに決別できるのです』
「いい加減にして」
　わたしは突き放すように言って、席を立とうとした。
　けれどふと思い直す。
　わたしはなんのためにここに来た？
　せっかくの片道チケットは有効に使うべきだ。
　このまま話に乗ったふりをして、組織についての情報を引き出せないだろうか。
　ジョニィとの一件以来、犯罪被害者救済委員会は鳴りを潜めている。わたしと霧切にとっては願ってもない平穏だけど、新仙帝を野放しにしたままでは気が休まるはずもない。
　それにもし、このまま新仙を見失うようなことになれば、組織を再建させる猶予を与えてしまう。
　わたしは席に座り直し、アイスティを一口飲んでから、再びケータイを耳に当てる。
「……復讐って？　別にわたし、復讐したい相手なんていないけど」
　わたしが言うと、老人がにやりと笑う。
『嘘はいけません。あなたには殺さなければならない相手がいる』
「誰？」
『妹さんを誘拐し、殺害した真犯人ですよ』
　その言葉に、一瞬、頭が真っ白になる。心臓に杭を打たれたように、胸に痛みが走る。口の中に血の味が広がる。ケータイを持つ手が震える。
「妹を殺した真犯人を……知っているの？」
『我々の事前調査が完璧であることは、よくご存じのはずです』
　その通りだ。今まで出会った『黒の挑戦』の犯人たちは、組織から真犯人の情報を得て、復讐に臨んでいる。それが理不尽なゲームに臨む彼らのモチベーションになっていた。
　組織のボスは元トリプルゼロクラスの探偵だ。過去の未解決事件の真相を暴き、真犯人にたどり着くことはたやすい。そうして復讐の相手となる真犯人を見繕うことが『黒の挑戦』の根幹である以上、その情報に嘘や偽りはない。そしてもちろん、間違いもない。

彼らは妹を殺した犯人を知っている。

　その事実に、わたしは云いようのない感情にさいなまれた。怒りや哀しみとは違う。それは嫉妬に近い感情だった。わたしでさえ知らない彼女の最期を、組織の連中は知っている……

　何故、わたしではなく、彼らが？

　その真相を知るのは、他の誰でもなく、わたしでなければならなかったのに。

「ゲームに参加表明しなければ、真犯人の名前は教えてくれないの？」

『ええ。そういうルールになっています』

「そう……」

『我々は多くの犯罪被害者を『黒の挑戦』へといざなってきましたが、あなたほどの経験者を犯人役に選ぶのは初めてです。今までの犯人役はいわば素人。優れたトリックを数多く揃えても、犯罪の初心者が、プロの探偵に勝つのはなかなか難しい。しかしあなたは探偵であり、なおかつあらゆる『黒の挑戦』に挑んできた猛者だ。観客もさぞ盛り上がることでしょう』

「その観客さんたちに会うことはできる？」

『通常、そのような要求は無視することになっていますが、他ならぬあなたの願いであれば、承りましょう。むしろあなたに会いたいと願う顧客も少なくないでしょうな。無論、ゲームに参加していただくのが条件ですが』

「じゃあ新仙帝は？　会えるの？」

『……掛け合ってみましょう。我々はあなたが納得のいく形で、救済を享受するのを、支援させていただきます』

　救済……か。

　妹を殺した犯人を見つけ出すのは、わたしの長年の望みだ。今、わたしという人間がここにいる理由といってもいい。

　もし彼らの話に乗れば、その望みが簡単に叶う。しかも同時に、新仙帝との因縁にも決着をつけられる。彼を二度と表に出てこられないようにしなければ、わたしにも、霧切響子にも未来はない。

　これはチャンスだ。

　そういう意味では、彼らがもたらすのは、紛れもない救済なのだ。

　けれどそれで……わたしたちは救われるのか？

『さて、答えは決まりましたかな』

　無言で考え込むわたしに、老人が言葉をかける。

　その声に、はっと我に返る。

ファストフード店の喧騒が周囲に蘇る。
『結論を急ぐ必要はありません。我々は一晩待ちます。自分にとって最善の答えを見つけてください。他の誰でもない、あなたにとっての救済とは何か。人生をかけて、答えを探し当てるのです』
　老人はゆっくりと椅子から立ち上がった。スーツの内側から小さな紙切れを取り出して、さりげなくテーブルの上に置く。
『明日午後三時、指定の場所に来てください。ここに書いてあります。もちろんおわかりかと思いますが、このことは他言無用です。警察だけではなく、知人などに話した場合、我々は二度とあなたの前に姿を現しません』
　老人はそう云って、初めてこちらを向いた。
　軽く帽子を持ち上げ、小さくお辞儀をする。けれど最後まで目元は窺えなかった。
『ではまた、お会いしましょう』
　ケータイの通話が切れた。
　気づくと、老人は店内から姿を消していた。
　わたしは老人の座っていた席に近づき、テーブルに置かれた紙切れを拾った。上質な和紙に地図が描かれている。わたしはそれを素早くポケットに押し込み、店をあとにした。

３

　翌日、冷たい夜が明けると、学校は厳かな雰囲気に包まれた。
　卒業式。
　雪交じりの風に吹かれ、上級生たちは頬を赤らめながら、緊張した面持ちで教会へ入っていく。わたしたち下級生は彼女たちを見送ってから、教室へ戻り、明日の終業式についての連絡を受けて、すぐに下校となった。
　寮まで歩いて帰る途中、ケヤキの木に背を預けて寄りかかる少女を見つけた。
　霧切響子だ。
　彼女は教会の方を眺めていた。両手をコートのポケットに突っ込んで、白い吐息を零している。雲の切れ間から、にわかに陽の射す木陰で、彼女の横顔は泡雪に紛れ、儚く消えていくかのように見えた。
　ふと、彼女はわたしに気づいて、こちらを向いた。わたしが手を振ると、彼女はばつが悪そうに視線を逸らして、逃げるように木の傍から離れた。
「こんなところで何してるの」わたしは小走りに駆け寄る。「中等部の卒業式は全員参加でしょ？　まさ

かサボり？」
　すると彼女は首を横に振った。
「私には関係ないから」
「また他人事みたいに。あと二年もすれば、君も卒業するんだよ」
「どうかしら。少なくともその頃には、ここにはいないと思う」
「……仕事？」
　彼女は遠くを見つめたまま、肯く。
「そっか。卒業するまで一緒にいられると思ったのに」
　沈黙の中、教会の鐘が鳴る。
「……私もよ」
「もういいや、サボろ！」わたしは霧切の腕を摑んで云う。「ちょっと来てほしいところがあるんだ。いいでしょ？」
「な、何？」
　霧切は珍しく動揺した様子で、目を丸くする。わたしは有無を云わせず、彼女の腕を引いて、学校の敷地を出た。
　そのまま近くの繁華街を目指す。流行りの服も、かわいらしい文房具も、ここで一通り揃えられる。寮住まいの生徒たちにとっては唯一の遊び場だ。
　わたしは霧切を雑貨店に連れ込んだ。しばらく前から目をつけていた店だ。奥の棚へ移動する。そこにはヘアゴムやバレッタなど、ヘアアクセサリが並んでいた。
「この前の事件で、リボンだめにしちゃったじゃない。それで代わりが必要だろうと思って、探してたんだ。こういうのはどう？」
　棚に並んだ色とりどりのリボンを指し示す。霧切はそれらを見て、かたくなに細めていた目元をやわらげた。
「好きなの買ってあげる」
「えっ、でも……」
「いいからいいから。むしろこんな安いものしか買ってあげられなくて申し訳ないくらいだよ。さ、どれにする？」
　わたしが云うと、霧切は遠慮がちに棚を眺めたあとで、わたしを見返した。
「結お姉さまが選んでくれたものにする」
「そう、それじゃ！」わたしはぱっと目についた赤いリボンを手に取って、彼女の髪に当ててみる。「これか

な……いや、やっぱりこっち……」

　それからしばらく、リボンを片っ端から手に取って、彼女に似合う色や大きさを吟味した。結局、あまり派手なのは嫌と彼女が云うので、薄く紫がかった黒のリボンにした。店員さんが紙袋にそれを入れている様子を、霧切は目を輝かせて見つめていた。

　紙袋はわたしが受け取り、店を出た。

「それじゃ、学校に戻ろうか」

「……学校？」

「卒業式、まだやってるでしょ」

「見に行くの？」

「そう、君と一緒にね」

　わたしは校門をくぐり、そのまま校舎へ足を向ける。

「教会はあっちよ」

「特等席はこっち」

　校舎には下校前の生徒がちらほらと見えるだけで、ひっそりとしていた。わたしと霧切は階段を上り、最上階のフロアからさらに上を目指した。

　行き止まりのドアを、特殊な方法で開錠する。開いたその先は、屋上だ。

　うっすらと積もった雪に足跡はなく、まっさらなノートのように一面、清らかだった。わたしたちは少し駆け足になって、教会の見える場所へ移動した。

　その時ちょうど、眼下に見える教会の扉が開いた。卒業式を終えた上級生たちが、鐘の音とともに送り出される。

「不思議だね。三年生みんな、入っていった時よりも、少し大人になって出てきたように見える」

「経過した時間分、大人になったのは事実だと思うけど？」

「……そういうことじゃないんだけどなぁ」わたしは苦笑して云う。「君も少しはロマンスのわかる大人にならないとね」

「どういう意味？」

　目を細めて云う霧切の胸元に、わたしはさっき買った紙袋を押しつける。

「はい」

「……あ、ありがとう」

　彼女は虚を突かれたように云う。

「今日はホワイトデーだからね。この前のお返し」

「そう……」
　卒業生たちの楽しげな声が下から聞こえてくる。教会の周りでは、仲のいい子同士が集まって、笑い合ったり、写真を撮ったりしている。少し離れたところで、一人泣いている子もいる。今日はそれまでの日々が終わり、新しい人生が始まる日だ。
「それじゃ早速、結んであげる」
　わたしは霧切からリボンを受け取り、彼女に後ろを向かせた。髪を見ると、右の三つ編みが緩くほどけかかっている。
「相変わらずこっち側を結うのが下手だね」
　わたしは三つ編みを一度ほどいて、結い直した。そしてあらためて両サイドにリボンを結ぶ。
　これでようやく『霧切響子に戻った』という印象だ。名探偵にトレードマークはつきものだけど、彼女の場合それが三つ編みとリボンと云えるかもしれない。
「何故だか結お姉さまに結ってもらうと、とてもしっくりくる」
　霧切は自分の三つ編みを撫でながら云う。
「そりゃもう、慣れたもんだからね」
「またお願いしていい？」
「もちろん」
　わたしが肯くと、霧切は嬉しそうに微笑んだ。
　その顔を見て、一瞬、妹の笑顔が脳裏をよぎる。
　永遠に失われた笑顔。
　それを奪った相手に、わたしは復讐を誓った。
　それなのにわたしはまだ——答えを出せずにいる。
「結お姉さま……」霧切の表情が冷たく陰る。「まさかまた『黒の挑戦』が届いたの？」
「えっ……？」きっと彼女はわたしの表情から何かを察したのだろう。「ううん、届いてないよ」
「そう、それならいいけど」
「そんな大事なこと、隠すわけがないでしょ。君ナシで事件を解決できるなんて思ってもないし。届いたら真っ先に君に見せるよ」
　霧切は特に何も云わなかった。
　わたしは嘘をついていない。むしろ本音しか云っていない。ただ、隠しごとが一つあるだけ——
　卒業生の声が次第に遠ざかり、聞こえなくなっていく。
　いつの間にか頭上の雲は晴れて、陽が射しているにもかかわらず、雪はやまずにわたしたちの周りに

降り続けていた。風は冷たく、霧切のリボンをもてあそぶ。わたしと霧切は、真っ白な世界に取り残された、たった二つの黒い点だった。
「犯罪被害者救済委員会が、あれからずっと沈黙を続けているのが気がかりだわ」霧切は視線を落として云う。「こうしている間にも、彼らは力を蓄えているはず。今もどこかで、何か新しい犯行計画を企てているのかもしれない。そう考えると……いてもたってもいられない気持ちになる」
霧切がそんなふうに焦りを隠さないのは珍しい。それだけ、新仙帝が彼女に落とした影は大きいのだろう。
無理もない。彼女は新仙に祖父を殺されているのだ。他にも彼女が目の前で失った命は少なくない。中学生が立ち向かう現実としては、あまりにも過酷だ。
「不安なのはわたしも一緒だよ」
わたしは霧切に身を寄せて云った。身体が触れることで、体温が伝わると同時に、心の中も見透かされそうな気がする。
「でも焦ったって何もいいことはないよ。あいつらはきっとそこにつけ込んでくる。今は死んだふりをしてるけど、実はわたしたちが針にかかるのを待っている最中（さいちゅう）かもしれない」
針にかかる——
わたしは帽子の老人を思い出す。
彼が垂らしていたのは釣り糸なのか、命綱なのか……
「結お姉さまのくせに冷静ね」
「何その口の利き方は」わたしは冗談めかすように笑って云う。「事件は委員会絡みだけじゃないんだし、探偵を求めている人は他にも一杯いる。そういう人たちのために、やらなきゃいけないこともあるんじゃない？」
「そうね。探偵として認められるには、どんな事件でも解決できるようにならないと……」
凛（りん）とした表情で彼女は云う。
どうかいつまでもその表情を忘れないでいてほしい。
そしてどうか……
その表情でわたしを見ないでほしい。
答えに迷うから。
ねえ、霧切ちゃん。
わたしはどうしたらいい？
声に出して、そう云えていたら。

何かが変わっただろうか。
風に遊ぶ真新しいリボンを、彼女の白い指先がなぞる。それを見つめる無邪気な瞳の中に、わたしは自分の選択すべき答えを探す。
いや、答えなんか最初からわかってる。
彼女は、わたしが救えなかったすべて。
そしてわたしが救わなければならないすべて。
ふとケータイで時計を確認すると、正午を過ぎて午後一時になろうとしているところだった。
「霧切ちゃん、お昼食べに行こう」
彼女は小さく肯き、わたしたちは屋上をあとにした。

4

わたしが九歳の冬、妹の繭(まゆ)は殺された。
いつもは妹と一緒に下校していたのに、その日はたまたま別々だった。図工の課題が遅れていたせいで、放課後に居残りしなければならなかったのだ。
妹はクラスメイトと一緒に帰ると云って、先に下校した。友だちと一緒なら大丈夫だろうと思い、引き止めることはしなかった。
今にして思えば、それがわたしの最初の過(あやま)ちだ。
両親は共働きで日中は家にいない。犯人は当然、そのことを把握していたのだろう。大胆にも家の前に車を停め、留守番中の妹を連れ出している。おそらく近親者のふりをするなどして、インターホン越しに誘い出したのだろう。
わたしが帰宅した時、家のすぐ前に黒いワゴン車が停められていた。わたしは不審に思いつつも、まさかその車内で妹が拘束されているなどとは考えず、いつものように玄関のドアを開けて中へ入った。
この時、玄関ドアの鍵は開いていた。けれどこの時点でもまだ、わたしはすぐ傍で起きている悲劇に気づいていなかった。むしろ妹の不用心さに、小言でもぶつけようかと考えていたくらいだ。
靴を脱いで家に上がろうとした時、背後で玄関ドアの開く音がした。
はっとして振り返った瞬間、視界の中で星が散った。気づくとわたしは床に両手をついていた。
後頭部が焼けるように熱い。
ぼろぼろと自然に涙が零れる。
何者かに殴られたのだ。

やがて巨大な柱のような影が、わたしのすぐ横にそびえ立つ。

殺される、と思った。

初めて感じた死の恐怖。

そのあとのことは少し記憶があいまいだ。わたしは犯人の両足にしがみつき、必死に抵抗した。それから犯人と揉(も)み合いになったことまでは覚えている。

結果的に犯人はわたしへの攻撃を諦(あきら)め、家から出ていった。わたしは朦朧(もうろう)となりながらも、母の職場へ電話をかけて、助けを求めた。

そして薄れゆく意識のなか、遠ざかっていく車の音を聞いた……

気づくとわたしは病院のベッドの上で、頭に包帯を巻かれていた。母や看護師がほっとした表情を見せるなか、少し離れたところで父が深刻そうな顔をしていたのをよく覚えている。

その時点では、事件のことは何も聞かされなかった。妹が誘拐(ゆうかい)されたと知ったのは、翌日の朝だ。

ベッドの上で朝食を終えた頃、母が数人の見知らぬ男たちを伴って、病室に現れた。彼らは警察の人間で、わたしを襲った犯人について聞きたいと云った。

けれどわたしは犯人のことが何もわからなかった。ほとんど顔を見ていないし、声すら聞いていない。漠然と、身体の大きさや、力の強さから考えて、大人の男だろうということくらいしか、証言できなかった。

母はひどくがっかりした様子だった。警察の人間たちもみんな、父と同じように深刻そうな顔をしていた。

「結、よく聞いてね」母が優しく話しかける。「結を襲った悪い人が、繭をどこかに連れていっちゃったみたいなの。何か他に思い出せることはない？」

この時点で、自宅には犯人から身代金を要求する電話が二度かかってきており、警察による捜査も始まっていた。『警察に知らせたら人質を殺す』という犯人からの決まり文句はなかったらしい。目撃者であるわたしを家に残していった時点で、警察沙汰になるのは目に見えていたからだろう。

事件はこの二日後に収束する。

父が身代金を用意して、犯人に指定された場所へ向かった。近くの峠にある展望台近くの公衆トイレだ。父が指定通り、男性用トイレの個室ドアを開けると、繭がそこにいた。

すでに冷たくなった状態で――

その後、犯人からの連絡は途絶え、捜査も停滞することになった。事件の唯一の目撃者であるわたしの証言に期待が寄せられたが、残念ながらそれに応えることはできなかった。どうしても犯人の顔が思い出せない。わたしはそれが悔しくて仕方なかった。

もともと犯人は妹だけを連れ去るつもりだったのか、それともわたしも標的に含まれていたのか、それは

わからない。もし妹ではなく、わたしが先に一人で帰宅していたら、わたしが誘拐されていた可能性もある。

　警察によると、妹は誘拐後すぐに殺害されていたようだ。犯人は早々に人質を殺しておきながら、身代金を要求してきたらしい。それが当初の計画通りなのか、それとも行き当たりばったりの犯行なのかはわからない。

　わからないことだらけだ。

　もちろん、今もなお犯人は捕まっていない。

　わたしが探偵を目指したのは、この事件がきっかけだ。妹を救えなかった自分が不甲斐なくて、目撃情報を証言できない自分が情けなくて、少しでも過ちを償(つぐな)いたくて、探偵になった。

　そして本音を云えば――犯人に復讐したかった。

　妹を失ったことで、わたしの人生はめちゃくちゃになった。家族も壊された。両親は精神的に病み、変わり果ててしまった。妹の死の責任を巡って激しくケンカすることもあった。そういう時、わたしはまるで自分が責められているようで居心地が悪かった。いっそわたしが死ねばよかったのに。そう考える時間も増えていった。

　わたしにとって唯一の救いは、事件の捜査に当たってくれた探偵たちの存在だった。警察が捜査の規模を縮小させていくなか、彼らは根気強く犯人捜しを続けてくれた。

　わたしはやがて彼らに憧れるようになった。妹の死に報いるには、自分が探偵となって事件を解決するしかない。そう考えるようになるまで時間はかからなかった。

　わたしは高校進学を機に家を出た。両親からは反対されたけれど、結果的によかったと思っている。少なくとも人生に目標ができた。

　探偵になって、危機に直面している人たちを助けるヒーローになる。

　そしていつか、妹を殺した犯人に罪を償わせてやる――

　もし探偵を目指していなかったら、霧切響子に出会うこともなかっただろう。彼女と出会えたことで、わたしは探偵になって初めて報われた気がした。

　だから自分の運命に後悔はしていない。

　わたしは何も間違えていないはずだ。

　そうでしょう？　霧切ちゃん。

　けれど――今でもふと気を抜いた瞬間、どこからかあの音が聞こえてくる。

　それは遠ざかる車の音。

　薄れゆく意識の中で聞いたその音は、本当に車の音だったのか？　そこに妹の声は混じっていなかっ

たのか？　あるいはそれは……妹の悲鳴そのものではなかったのか？
　妹を殺した犯人に復讐を果たさない限り、悲鳴がやむことはないだろう。
　だから決断しなければならない。
　時刻は午後二時――
　老人との約束の時間まであと一時間だ。
　わたしと霧切は喫茶店でランチのパスタを食べたあと、寮に帰って、それぞれの部屋へと別れた。途中、何度も彼女に秘密を打ち明けてしまいそうになるのを堪えるのに必死だった。
　それからすぐに寮を出た。
　指定された公園へ向かう。
　まだ答えは出ていない。
　出せるはずがない。
　かといって、みすみす貴重な情報源を逃す訳にもいかない。けれど刻限は近づいてくる。
　そこでわたしは、老人よりも早く指定の場所を訪れて、まずは物陰から様子見することにした。
　そもそも彼らの云いなりになる必要があるだろうか。遠目から老人を見張ることで、彼らがどこから来て、どこへ行くのか、わかるかもしれない。
　雪の積もった公園には、子供たちが踏み荒らした跡があちこちに見受けられた。午後の日差しを受けて、雪面が目に眩しいほど輝いて見える。小さな子供が一人、滑り台で遊んでいて、母親がそれをにこやかに見守っていた。とても平和な光景だ。あの老人はいない。
　わたしは公園近くのマンションを見つけ、非常階段を上った。高い場所からなら、彼らに見つかることなく、張り込みができるだろう。
　コンクリートにひび割れの目立つ、古びた建物だ。人が住んでいるのか疑わしいほど、ひっそりとしている。
　二階から三階へ上がる踊り場を曲がると、そこに先客がいた。
　スーツを着た細身の男性が、一番上の段に腰掛けている。
　わたしは一瞬どきりとしたものの、おそらくマンションの住人が煙草でも吸っているのだろうと考え、軽く会釈して通り過ぎようとした。
　すると男は口を開いた。
「まだ迷っているようだね」
　その言葉に、心臓が震える。
　全身に鳥肌が立つ。

足が竦み、まともに男の方を見ることもできなかった。

知らない男だ。

けれどわたしはこの男をよく知っている。

「約束の時間まで、少し私と話をしないか？」

男はゆっくりと立ち上がり、スーツの汚れを払うような仕草をした。

「あなたは……」

「お久しぶり。そして――はじめまして。私は新仙帝だ」

5

その男に連れられて、わたしは近くの公園に移動した。

逃げ出すチャンスはいくらでもあった。移動している間、彼は一度もわたしの方を振り返らなかったし、気にかける素振りも見せなかった。わたしが何もしないと確信していたのだろうか。

事実、わたしは何もできなかった。彼の無防備な背中を前にして、ただあとをついていくことしかできなかった。

どうせ見透かされているに違いない。予期せぬラスボスの登場に、一体どんなリアクションができるというのか。取り乱さないように気を張るので精一杯だ。

わたしたちは東屋（あずまや）の屋根の下にあるベンチに並んで腰掛けた。正面に見える滑り台では、さっきの親子がまだ遊んでいる。

「あらためて……君と会うのはノーマンズ・ホテル以来だな」男は笑顔で云った。「探偵オークションか。あれはなかなか気に入っている趣向の一つでね。トリックはかなりの力業（ちからわざ）だが、ゲームの設定と有機的に噛（か）み合っているのがチャームポイントだ」

そう楽しげに話す彼の顔は、これといって特徴のない、どこにでもいそうな、三十代半ばの男性の顔だった。身体つきにも目立った特徴は見出せない。まるで空気のような物腰に、柔らかい木々のざわめきのような声。

これも変装の一つなのか。

それともこれが新仙帝の本当の姿なのか。

そしてこれこそが――わたしたちの敵、犯罪被害者救済委員会のトップなのか。

「わたしになんの用ですか」

冷静を努めて切り返す。

わたしは今、新仙帝と並んでベンチに座っている。
この奇妙で最悪な、薄い氷の上に立つような状況に、はたしてどんな真意が隠されているというのだろう。
しかし彼はそんな張り詰めた空気を、穏やかな笑みで和らげる。
「その口ぶり、まるで霧切響子のようだな。長く一緒に過ごすうちに似てきたんじゃないか？」
「狙いは彼女ですか」
「――そうだな、間違ってはいない。だが君はおそらく誤解している」
「誤解……？　彼女にこれだけの仕打ちをしておいて、今さら誤解だって云うんですか」
「云い訳をするつもりはない。確かに霧切響子に対して、過度の要求を突きつけているのは事実だ。しかしそれは、彼女が世界を変える力を持っているからこそだ。その点に関しては、君も否定はしないだろう？」
世界を変える力――
そこまで云い切れるかどうかはわからないけれど、確かに彼女の才能は特別だ。彼女は不可能犯罪によって捻(ね)じ曲げられた真実を正す力を持っている。それは世界を変える力と云ってもいいかもしれない。
「彼女がそうだとして……あなたは何故、そこまで彼女に執着するんですか」
「それが君の誤解している部分だ。私は霧切響子に執着してはいない」
「えっ……」
「意外そうな顔をしているな。やはり君は私を見誤っているようだ」
「見誤るって……今さら正義を主張するつもりですか？　それとも悲しい過去を語り始めますか？　あなたの素性がどうであれ、あなたが彼女にしたことは許されるものじゃない！」
わたしは感情を抑えきれず、声を荒らげていた。
「ようやく君らしくなってきたな。探偵たる者、自分の気持ちには素直であるべきだ」
「……あなたに探偵論を教わるつもりはありません」
「そう云うな」新仙はポケットに両手を突っ込んで、足を組み直した。「さしずめ『霧切』の看板を私が奪おうとしている、とでも考えているんだろう？」
「違うんですか？」
「残念ながら。的外れも甚(はなは)だしい。大方、不比等(ふひと)さんの息子に吹聴されたか。いかにも四角四面な考え方だ」
「あなたの目的は、霧切の名を継ぐことではない……？」

「その程度と思われていたのだとしたら心外だ」新仙はわざとらしくため息を零した。「その程度のことは、私が全身全霊を傾けるまでもなく、たやすい」

「だったら……あなたは一体何がしたいんですか？　探偵の頂点に立っていたあなたが、堕天してまで成し遂げたいことって、なんなんですか」

「君と同じだよ」新仙は正面を見据えたまま、呟くように云った。「運命に虐げられたすべての人々を救いたい」

「一緒にしないでください」

「いや、一緒だ。君はまだ決断していないだけだ」

　その言葉に、はっとする。

　それはかつて、龍造寺月下がわたしに云った言葉だ。龍造寺はわたしを組織にスカウトしようとした。もちろんわたしは断ったけれど――

『君は本質的にこちら側の人間なのだ。救いを求める者のために、手を汚すことさえ厭わない者なのだ』

「わたしは違います」

　はっきりと今、口に出して云う。

　新仙は口元に笑みを浮かべて、ゆるゆると首を横に振った。

「裏の裏は、表とは限らない――人の心においては特に」

「……どういう意味ですか」

「本題に入ろう」そう云って彼はポケットから両手を出し、指先を組んで膝の上に置いた。「私は君を説得しに来たんだ」

「説得――？」

　ああ、そういうことか。

　白か、黒か。

　探偵か、犯人か。

「次の『黒の挑戦』に、ぜひ犯人役として参加してもらいたい」

「それは脅しですか？」

　できる限りの虚勢を張って尋ねる。

　けれど恐怖で膝が震えていた。

「とんでもない」新仙は無表情で答える。「経験上、犯人役を強制的にやらせようとしても、うまくいかないことは承知している。犯人には、完璧に閉ざされた密室のごとき固い決意──すなわち動機が必要なのだ」
　そのために復讐者をそそのかすのが、彼らのやり口だ。
「妹の復讐のために、あなたのゲームの駒になれって云うんですか？　そんなの……わたしが肯くと思っているんですか？　だとしたら計画は失敗ですね」わたしは気持ちを奮い立たせるように捲し立てる。
「確かに妹を殺した犯人が目の前にいたら殺してやりたいと思うでしょうね。ちょっと前なら、実際にその行動を選んでいたかもしれない。でも今は、はっきりと違うと云えます。わたしは犯人にはならない。皮肉ですね。わたしはあなたたちの『黒の挑戦』を通して成長したんです」
「なるほど、君はもう、以前の君とは違うという訳か」
「ええ」
　わたしは心を決めて、肯く。
　彼らの要求を拒否すれば、たちまちその場で殺されてしまうかもしれない。
　それでも『黒の挑戦』の犯人役をやらされるのはごめんだ。
　わたしは絶対に犯人になんかならない。
「しかし君は何も変わってなどいない」
「何が云いたいんですか？」
　尋ねると、新仙はわたしの瞳の奥を覗き込むように、真っ直ぐこちらを見つめた。
「君にとって、かけがえのない存在が、妹から霧切響子にすり替わったというだけの事だ」
　まるで聞き分けのない子供を優しく諭すような囁きだった。
　一瞬、頭が真っ白になる。
　透明なナイフで胸を突かれたような痛み。
「仮に、霧切響子の身に何かが起きた場合、君は──」
　新仙のその言葉に、わたしは反射的に立ち上がり、彼を睨みつけていた。彼はそれ以上、何も云う必要はなかった。愚かにもわたしが行動で示してしまっていたから。
「そう慌てるな。時間はまだある」
　新仙がにこやかに笑う。
　悪魔の笑みだ。
　わたしは今になって、ここに来たことを後悔し始めていた。完全に勇み足だった。少しでも彼らを出し抜けると思ったのは間違いだったのだ。

「彼女を……霧切響子を誘拐でもするつもりですか？」
「そんな回りくどいことはしないよ。君はまだ何もわかっていないな」新仙は自分の隣を指差し、わたしに座り直すように促した。「もう少しわかりやすく話そう」
　わたしは様々な言葉を呑(の)み込んで、促されるままベンチに座った。
「ノーマンズ・ホテルで君にした話を覚えているかな？　私には人の死が見える。それはけっして超常的な力ではなく、観察と推理によるものだ」
「あれは……本当の話だったんですか」
「そう、私は子供の頃からそうだった。他人を見れば、その人の死に様(ざま)が予測できた。街を歩けば、そこで起きる事件を思い描けた。君には奇異に聞こえるかもしれないが……たとえるなら天気予報みたいなものだよ。現代の天気予報は、過去のデータの蓄積と、観測技術の向上によって、かなり正確に未来の天気がわかるようになっている。しかし一昔前は、そもそも観測に限界があった。だから未来も見えない。すなわちそれが、君と私の違いだ」
「ええ、わたしとあなたがまったく違う人間だということくらいは、わたしにもわかります」
「それなら想像してみるといい。死ぬとわかっていて救えない人が、目の前にいる状況を」彼はそう云って、わたしにその想像を促すように、十秒ほど沈黙した。「そして、そういう人々が、町に溢(あふ)れている状況を」
「……同情してほしいんですか？　あなたは救うべき人たちを救えなかった。だからなんだって云うんですか？　それを理由に、犯罪被害者救済委員会を立ち上げて、ふざけたゲームを始めたんですか？」
「フフ……辛辣(しんらつ)だね。端的に云えばその通りだ」
「そうですか。少しは理解できたと思います。犯罪組織のリーダーが、何を考えているのか」
「では次に、霧切響子について話そう」
　彼はそう云って、わたしの反応を窺うように、こちらをちらりと見た。わたしは気づかないふりをして、滑り台の方を眺めていた。そこにいたはずの親子の姿は、もうなかった。
「私が霧切響子から何かを奪おうと考えているのだとしたら、それは大きな間違いだ。逆だよ。私は霧切響子にすべてを与えたいと思っている」
「……は？」
　わけがわからず、思わず声に出して首を傾(かし)げる。
「それは──探偵のすべてだ。彼女こそ、究極の探偵にふさわしい器だ」
「究極の探偵……？」
「残念ながら私には、究極の探偵になるだけの才能はなかった。だが彼女は違う。彼女こそ、世界を

変える力を持つ探偵になれる」
　新仙は淡々と言葉を紡ぐ。
　それはわたしと彼の間に、かろうじて架かっていた『理解』という名の橋が、完全に外れた瞬間だった。
　やはり彼こそが、犯罪被害者救済委員会のボス、新仙帝だ。
「私には世界を救えない――そう悟った時から、私は私を超える探偵、究極の探偵を探すために、すべての時間を費やしてきた。霧切響子は、無数にいる候補の一人にすぎなかった。しかし因縁とは奇妙なものだ。彼女は私の師匠の孫であり、少なからず運命が交錯していたのだからな。だからといって贔屓したつもりはないが」
「今までのすべてが、究極の探偵を見出すための試験のようなものだった……ということですか？」
「もう少し的確に云い表す単語があるとすれば――『通過儀礼』だな」
　結局のところ、カルトの儀式みたいなものじゃないか。その儀式のために、はたして何人が犠牲になったのだろう。
「彼女が……その究極の探偵だったとしたら、あなたにとってなんの意味があるんですか？」
「私にできなかった事が、彼女にはできる」新仙の言葉に熱が帯び始めている。「それがこの世界の救済だ」
「救済って、なんなんですか？」
「文字通り、人々を救うことだよ。未来を見通せない君にはわからないだろう。おそらく私のことが異常にさえ見えているはずだ。客観的にみても、確かに私は人を殺しすぎた。しかしいずれ、私の行ないが正しかったことが証明される」
　当然、わたしには彼の云っていることがまったくわからない。いずれ世界に終末が訪れて、霧切響子が人々を救うことになるのだろうか。
　もしそうだとして……彼女がそれを望むだろうか？
「いまや霧切響子は救世主にふさわしい探偵になろうとしている。だが――まだ足りない。彼女は論理に徹しきれないところがある」
「そんなの当たり前じゃないですか！　彼女はまだ十三歳の子供なんですよ？」
「才能に年齢など関係ない。このままでは、彼女はいざという時、決断し損ねる。事件を解決するためには、あらゆる情を切り捨てられるようにならなければならない」
　新仙が云ったその言葉は、わたしに霧切家の家訓を思い出させた。
『家族の死に目に会うことよりも、探偵活動を優先させよ』
　結局、探偵として生きていくためには、人間であることをやめなければならないというのだろうか。

だったら――探偵は誰の味方なんだ？
なんのための探偵だ？
「さて、君にもそろそろ事情が呑み込めてきただろう。霧切響子にとって、欠けている最後のピース――それが君だ。殺人犯となった君を、霧切響子が告発する。その時、究極の探偵が完成するのだ」
わたしが、最後のピース。
あらゆる情を切り捨てて、論理に従い、わたしを告発できるかどうか……
「これは私からのお願いだ。どうか彼女を完璧にしてやってくれ。このままだと彼女は、未来を救う前に、自らの身を滅ぼすことになる。そうならないためにも、君の協力が必要なんだ」
「そんなデタラメな話に、わたしが乗ると思ってるんですか？」
「ああ、君は乗るよ。彼女のためにね」
「――彼女のため？」
「もし君が『黒の挑戦』を拒否すれば、霧切響子は我々の組織によって消される」
「そんなっ……」
「すでに手配も済んでいる。彼女を消して、計画のやり直しだ。もっとも、時間はさほど残されてはいないだろう……結果的に世界は滅ぶかもしれない」
世界のことはどうでもいい。
わたしの選択次第で、霧切響子が殺される――
考えが甘かった。彼らは別に誘拐なんてしなくても、霧切響子を人質に取ることができるのだ。
そう、彼女はもはや人質。
だからわたしが選ばれたのか？
かつて人質（いもうと）を救い損ねたわたしが……
頭の奥で助けを求める声がする。
わたしは誰もいない公園を眺め渡し、そこにいるはずのない彼女の姿を探した。
「まだ迷っているようだね」
新仙は穏やかな表情をこちらに向けて云った。
「当然です」
わたしはうつむいて、答えを探した。
いくら霧切のためでも、彼らの犯罪に加担するわけにはいかない。
けれど彼らに従わなければ霧切が殺されてしまう。
復讐は確かにわたしの生きる目的でもあった。妹を殺した犯人を、絶対に許すことはできない。いつ

か必ず、この手で——そう願ってきた。
　お膳立ては彼らがしてくれる。殺したいほど憎い仇（かたき）を目の前に用意してくれるのだ。そして復讐を果たせば、同時に霧切響子を救うことができる。わたしにとってそれは、かつて救えなかった妹を救い出すのと同じこと。
　非の打ちどころのない計画だ。
　こうしてここに至るすべての道筋を、わたしの隣で穏やかに笑っている男が考えたのかと思うと、ぞっとする。いつか誰かが、彼のことをブラックホールにたとえたけれど、まさにその通りかもしれない。彼は人というより、底知れない暗黒だ。
　彼らの計画に乗るのか、それとも拒否すべきか。
　わたしが迷っているのは、そこじゃない。
　第三の選択肢。
　今ここで、新仙帝を殺してしまえば、何もかも終わるのではないか？
　届かなかった暗黒星が、今はわたしの手の届くところにある。この瞬間を迎えるために、わたしたちは彼らの組織と戦ってきたのだ。ジョニィが残した手掛かりをあえて辿（たど）ったのも、このためではなかったのか？
　最後の敵を仕留める。
　でも……わたしにできるだろうか？
　どうやって？
「目つきが変わったな」
　新仙の言葉に、わたしはどきりとする。
　同時に、新仙の顔つきにも暗い影が差していた。
「残念ながら私を排除したところで計画は止まらない。さっき云っただろう？　すでに手配は済んでいるんだ」彼はわたしの心を見透かしたように云う。「ちなみに手の内を明かすと、確かに我々の組織は君たちのおかげで縮小化している。今、残っている連中は、命令に従うだけの駒だ。しかしそれは一方で、組織が合理的な装置となりつつあることを意味している。それは復讐をゲームとして提供するプログラムが組み込まれた装置だ。もちろん、私がいなくなったとしても、組織はプログラム通りに動き続ける。『黒の挑戦』もこれまで通り行なわれるだろう」
「そんな……」
「だからここで、君が私を殺すことには意味がない」
「そうでしょうか？　少なくとも、霧切ちゃんに手出しする者はいなくなるんじゃないですか？」

「――試してみるかね？」
　新仙は両手を広げて云った。
　張り詰めた空気が、冷たい風に凍りつく。
　止まった時が結晶になって、棘（とげ）のようにわたしを取り囲み、少しも動けない。わたしは言葉を失ったまま、新仙と静謐（せいひつ）なにらみ合いを続けた。
　すると新仙は、ふっと笑みを零した。
「君は侮（あなど）れないな。本気で私を殺すことを考えている」
　わたしに残された選択肢は、それしかないから。
　むしろそれで敵を滅ぼせるなら。
　進んでやってやる。
「やはりこうするしかないか」
　新仙はそう云うと、スーツの内側からハンカチを取り出して、膝の上で広げ始めた。
　ハンカチの中には奇妙な物体が隠されていた。最初は小さな箱のように見えたそれは、折り畳まれた状態から開かれていくと、いつの間にかナイフになっていた。
　それはとても奇妙な形をしたナイフだった。刃が異様に細長く、ナイフというよりも大きめなアイスピック――あるいは指揮棒のようにも見えた。
　わたしは不意に訪れた生々しい殺意に、すぐにでも逃げ出したかった。けれど身体は動かなかった。その雪のように白い刃から、目を離すことができなかった。
「これは硬いものを貫くのに適したナイフだ」
　新仙は刃の先端を指先でつまみながら云った。
　そのナイフで、わたしをどうするつもりなのか――
「もちろん銃の用意もできたが、君を血で汚すのが忍びなくてね」
　彼はそう云うと、刃の先端を自分自身のこめかみに当てた。
「えっ……？」
「そう、これこそ私がいつか見た風景だ」新仙の表情は安らぎに満ちていた。「大いなる物語において、私もまた脇役の一人にすぎない」
「な、何を――」
「最後の敵、それは私などではない。霧切響子にとって最後の敵は――五月雨結、君だ」
　新仙はそう云うと、ナイフの柄の底に手のひらを当てて、力を込め始めた。すると白い刃が、なんの抵抗もなく、彼のこめかみに押し込まれていった。

わたしは声を上げることもできずに、彼の穏やかな表情が、やがてそのまま凍りつく瞬間を、じっと見つめていた。刃を三分の一ほど残したところで、ナイフを押し込む手が、だらりと下がった。
「やめろ！　新仙！」
　どこからともなく響き渡る声に、わたしは我に返った。
　見知らぬ老人がわたしたちの座るベンチに駆け寄ってくる。
「遅かったか……」
　老人はベンチの上に横たわる新仙の首筋に手を当てて云った。
「あ、あなたは……」
　わたしはからからに乾いた声で尋ねる。
「霧切不比等——響子の祖父だ」

６

　わたしはベンチから離れて、棒立ちになったまま、突然現れた老人を呆然（ぼうぜん）と見つめた。
　霧切家の当主にして、現役の探偵でもある霧切不比等——彼は世界中の要人を相手に仕事をしている関係で、長い間この国を離れていた。つい最近、帰国したと聞いていたけれど……
「君は五月雨（さみだれ）くんだね。以前、電話で話したことがある」
　霧切不比等は白い顎髭（あごひげ）を神経質そうに撫でながら云った。わたしは声にならない声で、はい、と答えた。
「帰国してからずっと、こやつの動向を見張っていたんだが……」彼は新仙を見下ろして云った。「あっさり私を出し抜いて、あっさり逝（い）ってしまった」
　霧切不比等と新仙帝は、かつて探偵として師弟関係にあったという。彼らが何を理由に道を違（たが）えることになったのかはわからないけれど、もし今も師弟関係が続いていたら、こんな結末にはならなかったかもしれない。
　新仙の死を確認する霧切不比等の表情は、皺（しわ）の数だけ悲哀に満ちていた。
「そ、その人……急に自分で自分の頭を、ナイフで……」
「安心しなさい。君がやったとは思ってない」
「はい……」わたしは震える膝をどうにか動かして、なるべく新仙から離れる。「その人……新仙は……死んでるんですか？」
「もう息はしていない。助かる見込みもないだろう」

「なんで……意味がわかりません。どうして彼は急に……」

　わたしがうろたえていると、背後でどさりと何かが落ちる音がした。振り向くと、血相を変えたおばさんが公園の入り口から、こちらを見て震えていた。足元にビニールの買い物袋が落ちている。

「きゃーっ！」

　おばさんは悲鳴を上げて、ビニール袋をその場に残し、走り去っていった。

「厄介な事になったな」霧切不比等は腕時計を確認する。「警察は十分以内に駆けつけるだろう。五月雨くん、君はすぐにここを離れた方がいい。あとは私が処理しておく」

「で、でも……」わたしは混乱する頭で必死に考える。「このままだと霧切ちゃんが……」

「響子のことなら心配はいらない。こやつが何を企んでいようが、響子が後(おく)れを取るようなことはない。二人をよく知る私だからこそ自信を持って云える」

「わたしも……そう思います」

　──それは、わたしが敵役でも？

　その言葉は呑み込んだ。『他言無用』という言葉が脳裏をよぎったからだ。

　はたして霧切不比等はどこまで知っているのだろう。孫が組織に狙われていることはすでに知っているはずだけど、霧切家の探偵にとっては、それさえ日常的な些事(さじ)でしかないのかもしれない。

「一つだけ確認させてください。その男は……新仙帝で間違いないんですよね？」

「ああ、間違いない。この顔は、私の知っている新仙帝だ。こやつは今朝、私に居場所を知らせる暗号を送ってきた。いつものゲームのつもりかと思ったが……どうやら私は、こうして君に『新仙帝の死』を証明する役回りで、呼び出されたようだな」

　新仙帝の死は紛れもない事実。

　新仙帝は死んだ──

　つまりわたしは、第三の選択肢を失ったのだ。

　彼はわたしの逃げ道を塞(ふさ)ぐため、自らの命さえ軽々と投げ出した。

　もはや道は二つしかない。

　乗るか、降りるか。

「五月雨くん、探偵とは生き様だ。君は君の『探偵』を生きろ」

　それならせめて、後悔しないように──

　わたしは肯く。

「できればすぐにでも手助けしてやりたいところだが、こやつの置き土産が少々、難儀(なんぎ)な代物でね」霧切不比等は新仙の頭部に突き刺さったままのナイフを示した。「これは私が以前、彼に贈ったものだ。おそ

らく私の指紋も、そのままだろうな」
「警察に疑われてしまうかも……」
「そうして私を足止めする算段なのだろう。だが心配は無用だ。無実を証明する方法は百通りある。それより問題なのは、君がここにいることだ。君の存在が警察に知られると、話がこじれる。早く行きなさい」
「はい……」
　わたしは急ぎ足で東屋を離れる。公園を出たところで振り返ると、霧切不比等は哀しげな顔で、弟子の亡骸を見下ろしていた。
　遠くからサイレンの音が聞こえてくる。
　わたしは何処へともなく走り出す。
　息が苦しい。
　自然と涙が頬を伝っていた。

7

　しばらくさまよい歩いた挙句、わたしは駅にたどり着いていた。
　帰宅を急ぐ乗客たちに背中を押されるようにして、電車に乗り込む。疲れ切っていたわたしは、たまたま空いている座席を見つけて、座った。
　すると老人が目の前に立ったので、わたしは反射的に席を譲ろうと腰を浮かせた。
「いやいや、結構。次の駅で降りますので」
　押し留められるように、わたしは座り直す。
　その老人の声には聞き覚えがあった。
　にやりと歪む、口元の傷――
「さて、答えは出ましたかな？」

探偵に告ぐ
黒の叫び声を聞け

場所	シリウス天文台	15億
凶器	ナイフ	5〇〇〇万
凶器	カリブドトキシン	3〇〇〇万
凶器	気絶薬	1〇〇〇万
トリック	密室	4億
その他	現金	1億
その他	鎖	5〇〇〇万
	総コスト	21億4〇〇〇万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

霧切響子

第 二 章
透き通る黒

翌朝、鏡を見ると、目が真っ赤に腫れていた。

洗面所で顔を洗う。冷たい水が心地いい。ついでに寝癖を直して、制服に着替えたところで、部屋のドアがノックされた。

ドアを開けると、すでに身支度を終えた霧切響子が立っていた。

「おはよう。どうしたの？　学校行くにはまだ早くない？」

なんの気なしに尋ねる。けれどすぐに彼女の深刻そうな表情に気づき、息を呑んだ。嫌な予感が冷気のようにわたしの全身を包む。

「郵便受けに、これが入っていたわ」

彼女は鞄から真っ黒な封筒を取り出した。真っ赤な封蠟が血糊のようについている。

「うそ……」

嘘であってほしい。

けれどそれは紛れもなく『黒の挑戦』の始まりを告げる挑戦状だった。

わたしは目を逸らすように、時計を見る。

登校するにはまだ少し早い時間だ。

「封筒を開けるのは、あとにする？」

「どうして？」

霧切は訝しむように尋ねる。

「だって、今日は終業式だよ。午前中には終わるから、封筒を開けるのはそのあとでも……」

「終業式なんかに出たいの？」

「そ、そういうわけじゃないけど」

「それならためらっている場合じゃないわ。一刻も早く中身を確認すべきだと思う」

差し迫った顔つきで彼女は云う。

「そんなに急がなきゃいけない理由でもある？」

「むしろそんなに悠長にしていられる理由を聞きたいわね。結お姉さまは疑問に思わないの？　どうして今回の手紙が結お姉さまではなく、私のところに届けられたのか？　こんなこと初めてよ。今までとは何かが違う」

「確かに……」

彼女は異変を感じ取っている。

これ以上反論すれば、不用意に違和感を抱かせてしまうかもしれない。

「わかった。七時ジャストに封筒を開けよう。それまでに朝ごはんを済ませちゃおう」

　霧切はじれったそうに、眉間（みけん）に小さな皺を寄せたけれど、やがて納得した様子で肯いた。

　寮の食堂に移動して、棚から食パンを引っ張り出す。それをトースターで焼き、霧切と二人で黙々と齧（かじ）った。わたしはテレビのニュースを見ているふりをして、あえて何も喋らなかった。この張り詰めたような空気の中でも、何気ない朝食の時間を彼女と一緒に過ごせることに、わたしは泣きたくなるような幸せを感じていた。

『黒の挑戦』は、挑戦状が開封されてから、１６８時間以内に、犯人が標的を全員殺すと、ゲーム終了となる。開封するタイミングを七時ジャストにするのは、タイムリミットを計りやすくするためだ。

　そしてニュースの時報が、七時を知らせた。

　霧切はためらうことなく、黒い封筒を開けた。中から折り畳まれた便箋（びんせん）を取り出して、広げる。

『探偵に告ぐ

　黒の叫び声を聞け

場所　シリウス天文台　　15億

凶器　ナイフ　　　　　５０００万

凶器　カリブドトキシン　３０００万

凶器　気絶薬　　　　　１０００万

トリック　密室　　　　４億

その他　現金　　　　　１億

その他　鎖　　　　　　５０００万

総コスト　21億4000万

以上のコストから、次の探偵を召喚する

霧切響子』

「やっぱり今回の探偵役は私なのね」
「とうとう霧切ちゃんを狙い撃ちしてきたか」
　わたしはそこに記された彼女の名前を何度も読み返した。できれば間違いであってほしい。けれど何度読んでも『霧切響子』の文字に間違いはなかった。
「『シリウス天文台』といえば、前に私たちが行ったところね」霧切はあくまで冷静に受け止めている。「場所は同じでも、事件の様相は全然違うものになりそう。前回は密室なんて出てこなかったし」
「それにしても二十一億って……とんでもないコストだね。あ、この凶器の『カリブドトキシン』って、前に見たことがある」
「龍造寺月下の用意した事件の中で、凶器として使われていた毒物ね。それだけじゃないわ。他の項目も今までに見たことあるものばかり」
「まさかトリックの使い回し？」
「それなら解決は楽だけど……」霧切は考え込むようにして頬杖をつく。「もし今回の犯人が私たちの過去を参考にして、意図的に計画を立てたのだとしたら、少なからず裏に新仙帝の思惑が絡んでいると云えそうね。私が探偵役として狙い撃ちされていることからみても、その可能性は限りなく高い」
　さすが鋭い。たった一枚の犯行予告状からでも、事件の全貌（ぜんぼう）を見抜いてしまう。
「新仙は何を企んでいるのかしら……」
　彼女は考え込むようにして呟く。
「霧切ちゃんが探偵役に選ばれたのは、単純に総コストのせいってことはない？」
『黒の挑戦』では、トリックなどに使用されるコストが高ければ高いほど、DSCナンバーにおけるランクの高い探偵が召喚されることになる。
「そもそも召喚される探偵の基準は彼らが勝手に決めているだけ。彼らにとって都合のいい探偵を呼ぶに決まってる」

霧切は冷めた顔で云う。
「この挑戦状、受けるの？」
「もちろん」霧切は言葉とは裏腹に、物憂げに目を伏せた。「もう少しで新仙帝に手が届く。そんな感じがするのよ」
「危険だよ。引き返せないかもしれない」
「引き返すつもりはないわ。私には戻れる場所なんて最初からないのだから」
ここがあるじゃないか——
そう云えたら、どんなによかっただろう。
たった十三歳の女の子が口にするには、あまりにも哀しすぎるその言葉を、わたしは黙ったまま聞き流すしかなかった。
もうゲームは始まってしまったのだ。

そのあとわたしは職員室を訪ねて、終業式を欠席する旨を伝えた。担任の教師は何も訊かず二つ返事で許可を出した。どうせいつものことだと思ったのだろう。
寮に戻り、部屋に荷物を取りにいく。
以前霧切と一緒に過ごしたこともある、この狭い部屋。仮に親が突然訪ねてきても、恥ずかしくない程度には片付けてある。今ではむしろ、生活感のない寂しい印象すら受ける。日記や写真などはすべて捨てた。
戻る場所はない——それはわたしも同じだ。
たぶん、ここにはもう戻らない。
わたしはハンガーにかけてあったコートを羽織り、リュックを背負って、部屋を出た。
霧切は食堂でバッグにパンやペットボトルの飲料水を詰め込んでいた。起きてきた他の寮生の目を気にする様子もない。
「何してんの？　霧切ちゃん」
「犯人が食べ物や飲み物に薬物を仕込む可能性が高いわ。前回の教訓。だからその予防策」
「なるほどね……」
彼女に倣って、わたしも棚に置かれていたスナック菓子をリュックに入れた。もちろん、非常用のチョコレートやキャンディなんかはもう入っている。霧切に倣って紅茶を入れた水筒やミネラルウォーターも用意した。
少し膨らんだリュックを抱えて、わたしたちは寮を出た。

校舎へ向かう生徒たちとすれ違いながら、校門を抜ける。
これで日常は終わりだ。
わたしたちは振り返らずに前へ進む。
すると学校を出てすぐ、道路の向こうからジープがやってきて、わたしたちの目の前で急停車した。
何事かと見守っていると、運転席の窓が下がり、三十歳くらいの女性が窓枠に肘(ひじ)をかけながら身を乗り出してくる。
「現場、行くんでしょ？　乗ってく？」
彼女は気さくな調子で声をかけてきた。
わたしはとっさに身構える。
「誰……ですか？　あなたは」
「君たちと同じ、探偵よ」
彼女はどこからか探偵図書館の登録カードを引っ張り出して、わたしたちに見せた。

雪村白孤(ゆきむらしろこ)　DSCナンバー『８８０』

「雪村白孤っていうの。よろしく」
「ゼロナンバー……」
わたしは思わず声を漏らしていた。ゼロクラスは探偵として人並み外れた才能と実績がなければ、到達できない領域だ。しかもわたしと同じ、誘拐事件を専門とする『88』ナンバー。憧れの存在だ。
「ああ、ランクは気にしないで。ここ数年、仕事から離れていたからブランクもあるし――」
「知らない人の車に乗るつもりはないわ。行きましょう、結お姉さま」
霧切は相手の言葉を最後まで聞かずに、歩き出そうとする。
すると雪村が、霧切の背中に声を投げかけた。
「シリウス天文台に行くんでしょ？」
霧切の足が止まる。
「どうしてそれを？」
霧切に代わって、わたしが尋ねる。
「情報収集にかけては誰よりも得意なの。見ての通り小顔だけど、顔は広いのよ」雪村は冗談めかして笑う。「ええと、君が五月雨結ちゃんで、そっちが霧切響子ちゃんね。これでもう私たちは知らない仲じゃない。で、どうする？　私もちょうどシリウス天文台に向かうところなんだけど、よかったら一緒にどうか

しら」
「お断りよ」
　霧切はあくまでつれない。
　再び歩き出そうとする彼女を、わたしは慌てて引き留める。
「せっかくだから乗せてもらおうよ」
「正気なの？　危険よ」
「わたしもそう思うけど……」わたしは小声で云う。「今のうちに、あの人の手の内を探っておいた方がいいんじゃない？　目的地は一緒みたいだし、どうせ現地に着いたら顔を合わせることになるんだから。それにほら、君は今回探偵役だから、ルール上、危害を加えられる心配はないし」
「そのルールを監視していたジョニィ・アープがいない今、厳密に守られるとは限らないわ」
「それもそうだけど……」
「ん？　なんかもめてる？」
　雪村が首を伸ばしてわたしたちを覗く。
「いえ、なんでもありません。車、乗せてもらえるんですか？」
「余計なお世話だったかな？」
「とんでもない。それじゃ、お言葉に甘えて……ほら、乗って」わたしは霧切を車の方へ押しやる。「そもそも車がなきゃたどり着けないような場所なんだから、これが正解だよ」
「そうだといいけど」
　霧切はしぶしぶといった様子で後部座席に乗り込んだ。彼女の経験した過去を考えれば、他人の運転する車に乗るのを嫌がるのも無理はない。けれどわたしたちには現地までの移動手段がないのも事実だ。
　わたしが後部座席に乗り込むと、雪村はジープを発進させた。バックミラーに映る校舎がみるみる遠くなっていく。
「ご親切に、ありがとうございます。助かりました」
　わたしは運転席の雪村に背後から声をかける。
「気にしないで。私も話し相手が欲しかったし」彼女は笑いながら云った。「……と云っても、まあ百パーセント親切ってわけでもないんだけどね。あ、警戒しないで。別に君たちをどうこうしようってつもりはないから」
「どこまで事情を把握しているんですか？」
　率直に尋ねる。

「うーん……だいたい、ほとんど？　君たちが犯罪被害者救済委員会となんかやり合ってるってことは知ってる。今までどんな事件を解決してきたか、委員会の幹部たちがどうなったか……ま、それくらいかな」

　車が赤信号で停止する。ミラー越しに、雪村と目が合った。色白で目のぱっちりとした美人だ。長い髪をうなじの辺りでシュシュでまとめている。

　青信号で車を発進させると同時に、再び彼女の方から喋り始めた。

「新しい挑戦状が届いたんでしょ？」

「……はい」

　わたしは正直に肯く。

「その挑戦状は、本当に委員会からのもので間違いない？」

「え？」

　考えもしなかった問いに、わたしは言葉を失う。

「封筒も便箋もいつもと同じだったし、封蠟も彼ら特有のものだったわ」霧切が答える。「偽物には見えなかったけど、どうして疑うの？」

「本物なら別にいいんだけど」

「答えて。あなたは何を知っているの？」

　霧切が食い下がる。

「ふふ、さすが彼らを壊滅寸前まで追い込んだ探偵少女ね。噂(うわさ)通り手厳しいわ」

「いいから答えて」

「新仙帝が死んだ、って話……聞いてる？」

「新仙が——死んだ？」

　霧切は目を丸くする。

　同時にわたしも、彼女とそっくり同じ表情で凍りついていた。

　それは演技ではなく、本心からだった。もちろん新仙の死に驚いたのではない。その事実がすでに知れ渡っていることに驚いたのだ。

「あくまで人づてに聞いただけだから、確たる証拠はないわ。ただ、情報の出どころからみて、デマの可能性は低いんだけど……君たちが知らないんじゃ、確定的とは云えないわね。ひょっとしたら君たちがやったんじゃないかとも思ってたけど、どうやら違うみたいだし」

「死んだって……いつ？　どのように？」

　霧切が尋ねる。

「さあ？　少なくとも普通の死に方ではなかったみたい。警察がすでに動いているわよ。ま、ぶっちゃけるとネタ元はその筋なんだけど」

　警察関係者から情報が漏れたのか。どうやら詳細には伝わっていないみたいだけど……

「とても信じられないわ」

　霧切は青ざめた顔でシートに沈み込む。

　この件に関して、祖父から彼女のもとへ連絡はいってないようだ。あのあとすぐ警察が駆けつけたとすれば、とても連絡できる状況ではなかったのだろう。

「きっとまだ新仙は生きている。これがその証拠よ」

　霧切は黒い挑戦状を雪村に見せつける。

「たとえそれが本物だとしても、証拠にはならないわね。新仙帝ほど予見性のある人間なら、自分亡きあとも組織を動かすために、万全のシステムを構築しているはずだから」

「それじゃあ……犯罪被害者救済委員会はすでに新仙帝の亡霊と化しているというの……？」

　新仙帝の亡霊――

　その通りかもしれない。そもそも実体の見えない組織ではあったけれど、それがいまや新仙のシルエットを伴った亡霊となって、わたしたちの背後にうっそりと立っている。

　呆然と黙り込む霧切に代わって、わたしは雪村に問いを投げかける。

「雪村さんは何故、わたしたちが挑戦状を受け取ったことを知っているんですか？」

「ある筋から手に入れた情報よ。ネタ元は秘密。ついでに君たちのことも調べさせてもらった。まだ学生なのにすごいわね。犯罪組織相手に死闘を繰り広げてきたんでしょう？　私、あまり他人事に首を突っ込むのは好きじゃないんだけど、思わず君たちを助けたくなっちゃった」

「それでわざわざ、わたしたちを迎えに……？」

「そういうこと」

「それだけじゃないんでしょう？」霧切が鋭く口を挟(はさ)む。「あなた、何を企んでいるの？　何が目的？」

「やっぱり手厳しいわね」雪村は笑って云う。「もちろん慈善事業のつもりはないわ。君たちは興味がないだろうから、こっそり教えておくけど……私が狙っているのは犯罪被害者救済委員会の隠し財産――すなわち新仙帝の遺産よ」

「新仙帝の遺産？」

　思わず声が裏返る。

「彼らが莫大(ばくだい)な資金を得て活動しているのは知っているでしょう？　『クローズド・サーキット』だっけ？金持ちにチケット代を払わせて、ゲームの上映会をするっていう……そうして得た資金が次のゲームのコ

ストとして使われるらしいわね。その余剰金だけでも莫大な金額になるのに、さらに全体の何割かは、犯人がゲームオーバーすることによって手元に戻ってくる。結果的に新仙のもとには天文学的な数字の金が流れ込んでくるというわけ」
「新仙帝が死んだ今、その隠し財産が宙に浮いた状態になっている……ということですか？」
「ザッツ、ラーイト。そしてシリウス天文台に、その隠し財産の在り処（ありか）を示すヒント、あるいは遺産そのものが眠っているという情報を得たのよ」
　雪村が興奮気味に云う。
　彼女の気勢とは逆に、車外の風景はいつの間にか街の賑（にぎ）わいも失せて、雪の林道が続く寂しいものに変わっていた。道路の縁で粉雪が風に舞っている。
「あの……失礼な云い方になるかもしれませんけど……眉唾（まゆつば）ってやつじゃないですか？」
「空振り上等よ。ハズレても次を探すだけ。でもこうして彼と因縁のある君たちが、問題の館を目指しているという時点で、私は『アタリ』を確信しているわ。見てよ、私の耳、ぴくぴく動いてるでしょ。絶好調のサインよ」
「罠（わな）の可能性は考慮しないの？」
　霧切が云う。彼女の口調には、わずかに軽蔑（けいべつ）の色が窺えた。
「もちろん、宝物にトラップは付き物だものね。簡単に済む仕事だとは思ってないわ」
「シリウス天文台には以前入ったことがありますけど……特にそれらしいものは見当たりませんでしたよ」
「それは数か月前の話でしょ？　組織の状況は大きく変わった。新仙がこうなることを予測して、あらかじめ遺産を移しておいたとしても不思議ではないわ」
「うーん……」
　なんだか雲を摑むような話だ。
　新仙帝の隠し財産など、本当に存在するのだろうか。
「——ってことで、宝探しを手伝ってくれたら、君たちにも分け前をあげるけど、どう？」
「興味ないわね」
　霧切がすかさず答える。
「そう、それならいいわ。だからこそ君たちは助けがいがある。ちなみにお宝は全部私が独り占めってことになるけど、文句云わないでね。あ、くれぐれも邪魔はしないでよ」
　雪村はカーラジオをつけると、耳をぴくぴくさせながら、流れてくる曲に合わせて鼻歌を歌い始めた。これから戦地へ赴（おもむ）こうとする緊張感は、彼女からは感じられない。これもゼロクラスの余裕だろうか。
　それにしても——新仙の隠し財産だなんて。

思ってもみなかった要素が、今回の『黒の挑戦』に加わることになる。そんなものが本当にあるとしたら、それこそ莫大な金額になるだろう。罪を犯してでも奪ってやろうと考える人間が現れてもおかしくない。
　霧切はいつものように、深い泉のような瞳で、窓の外に流れる白い風景を眺めている。彼女が何を考えているのか、その横顔から推し量ることはできない。
　ラジオのニュースが、荒天を告げる。窓に当たる雪も次第に硬質なものに変わっていった。
「三月も半ばだっていうのに、この雪って……ま、私のジープちゃんの敵じゃないけどね」
　雪村の云う通り、車は力強い走りで、山奥へと分け入っていく。
　それから一時間ほどが過ぎた頃、突然、雪村が道の途中で車を止めた。
　何事かと正面を見ると、目の前に杉や白樺が乱立していて、道が見当たらない。
「ここから歩くしかないわね」
　雪村はため息交じりに云った。
　わたしたちは車を降りた。たちまち冷たい空気が頬を刺す。硝子の破片を宙に撒いたように、雪が空を薄い銀色で覆っていた。
「道案内を頼めるかしら？」
　雪村がマフラーに顔を埋めながら云う。
「えっ……無理ですよ、そんなの。ここが何処なのかもよくわかりませんし」
　わたしは云った。
「は？　嘘でしょ？　前に行ったことあるって云ってたじゃない」
「前は案内人がいましたから……その時もこんな風に途中で車から放り出されて、山道を歩かされましたけど……」
「この道で合ってる？」
「わかりません」わたしは霧切の方を振り返る。「どう？　霧切ちゃん、見覚えある？」
「そもそもここに来るまでの道のりが、以前とは違っているわ」
「ほ、本当？　おかしいなあ、ちゃんと調べてきたんだけど……」
　雪村がうろたえ始める。
　こんな調子で大丈夫だろうか。はたしてわたしはこの前途多難な冒険を、最後までやり遂げることができるのだろうか。
「ちょっと待って。落ち着くのよ、白孤。そう、地図よ、地図。まずは地図を確認しましょう」
　雪村が車へ戻り、運転席のシートに地図を広げる。わたしと霧切は、遠巻きに彼女の様子を眺め

る。

　その時、わたしたちの背後から奇妙な物音が聞こえてきた。

　それは時代劇でよく聞く、馬が大地を蹴って駆ける蹄の音のようで……

　振り返ると、実物の白い馬がこちらへ向かって走ってくる。

　一瞬、何かの見間違いかと思った。けれどそれは間違いなく馬だった。よく見ると、馬の上に誰かが跨っている。何処かの国旗のようなシンボルが刺繍されたコートの裾をはためかせながら、長身の男が白馬を乗りこなしている。雪で煙る風の中、馬の鼻息を白く、足跡のように宙に残しながら……

　彼はわたしたちのすぐ横に馬を止めて、わたしたちを見下ろした。西洋系の顔立ちに切れ長の目。赤みがかった長髪を、文字通りポニーテールのように後ろで結っている。そして何故か手に持っている額縁──キャンバスのない枠だけ──を目の前に掲げて、あらためてそのフレーム越しに、わたしたちを見下ろした。

「……『ない』な」

　彼はがっかりした顔で云う。

「何が『ない』っていうのよ、失礼ね」

　雪村が甲高い声を上げる。

　馬上の男はそれを無視して、額縁を霧切の方にかざす。そして絵画でも鑑賞するかのように吟味し始めた。

「君だけはかろうじて『あり』だな」

「ちょっと、あなたね……」雪村が割って入る。「上から目線で女の子を勝手に評価してんじゃないわよ」

「目線については失礼した。何しろ馬に乗っているのでね」

「そういうこと云ってんじゃないわよ」

「君たちも宝物を狙ってやってきたクチか？　それなら諦めてここで引き返した方がいい」

　男は目を細めて云う。

　その一言で、一瞬にして空気が張り詰める。

　この男もまた、新仙の遺産を狙っているのか？

「価値ある物は、格ある者こそ所有すべきだ。よって新仙帝の遺産はすべて、この私、ユーハインが引き受ける」

　彼はそう云い残すと、颯爽と馬を駆って、木々の間を通り抜けていってしまった。その西洋貴族のような出で立ちも相まって、まるで中世を舞台にした映画のワンシーンを見ているかのようだった。

「あいつ、嫌いだわ……」

雪村が苦み走った顔を森に向ける。
「もしかして知り合いですか？」
「冗談じゃない。何度か一緒に仕事したことがある程度よ」雪村は足元の雪を蹴るような仕草をした。「DSCナンバー『880』――夕覇院完二（ゆうはいんかんじ）。いけ好かないって言葉がいけ好かない服を着て歩いてるような男よ。精神の安定を保ちたいなら、あいつには近づかないことね」
「あの人もゼロクラス？　しかもわたしたちと同じ誘拐専門の探偵なんですか？」
「残念ながら」
「彼もシリウス天文台へ向かうみたいね」霧切はいつもと変わらない表情で、男が消えた方向を見つめていた。「馬の足跡をたどれば、きっと建物にたどり着くわ」
「あ、そうか」
　わたしは感心する。
「あんなやつの後塵（こうじん）を拝するなんてシャクだわ。急ぎましょ。追い越してやるわ」
　雪村は地図を無造作にポケットにしまうと、大きな音を立てて車のドアを閉めた。そして一人で先に森の中へと入っていってしまった。
　慌てて彼女を追いかけようとしたが、霧切はすぐにはその場から動こうとしなかった。
「どうしたの？」
　振り返って、尋ねる。
「結お姉さまはどう思う？　本当に新仙が死んだと思う？」
「半信半疑ってところかな」それが正直な気持ちだった。「あいつがそう簡単に死ぬとは思えないけど……ゼロクラスの探偵が二人も、その情報を得てここまで来たのだとしたら、信憑性（しんぴょうせい）は高いのかもしれない」
「同意見ね。実は――新仙の足取りを追っていたおじいさまからの連絡が、三日前から途絶えているの。そのことから考えても、新仙の身に何かトラブルがあったのは間違いないわ」
「そう……」
「もし新仙が死んだのだとしたら、私はなんのために、この先へ進めばいいのかしら。私は一体、誰と戦えばいいの？」
　霧切は戸惑うように視線をさまよわせる。
　それは生まれながらにして犯罪者たちと戦うことを宿命づけられた彼女の悲嘆だった。
「『黒の挑戦』が続いているのは事実だし、戦うべき相手はまだ、他にもたくさんいるんじゃない？」
「戦うべき相手――」

「犯人だよ。今回も犯人を捕まえるんでしょ？」
「ええ」
　霧切は顔を上げて、凛としたまなざしをわたしに向ける。
「それでこそ霧切ちゃんだね」
　わたしは彼女の前髪についた雪を払ってあげる。すると彼女は少しはにかんで、その表情を隠すように背を向けて歩き始めた。
　わたしは小走りで彼女に追いついて、並んで歩く。
「あの時と比べると、君もずいぶんと表情が豊かになったよね」
「あの時？」
　霧切は首を傾げる。
「わたしたちが初めて会った時。あの時もこうして、雪の中を一緒に歩いたじゃない。君、寒さで顔が凍っちゃってるんじゃないかと思うほど、まるで表情らしい表情がなかった」
「実際に凍っていたんじゃないかしら」霧切はそっけなく云う。「とても寒かったから」
「あの時君は、『探偵であるということは、生きているということと同じ』だって云ってたけど……今でもそう思う？」
「もちろん」霧切は即答する。「私にはそれ以外の生き方がわからない」
「探偵をやめたいと思ったことは？」
「探偵ではない自分を想像したことならあるわ。でも漠然として取り留めのない姿しか思い描けなかった。それは死後の世界を想像するのと一緒だと気づいて、考えるのをやめたわ」
「そう……君らしいね。でもよかったよ」
「よかった？」
「ああ、うん、いつか『探偵をやめる』なんて云い出す日が来るんじゃないかと思って……」
「余計な心配ね。私が探偵をやめるのは死ぬ時だけよ。それより自分の心配をしたらどう？　『正義の味方』になるんでしょう？」
「――どうかな」
　わたしはうつむいて答える。
「これでも期待してるのよ」
　霧切はさりげなくそう云って、早足で先へ進む。わたしは複雑な気持ちを抱えたまま、とぼとぼと彼女に続いた。
　雪上の足跡をたどって進むうちに、やがて雪村の背中が見えてきた。周囲は道もない針葉樹の森

だ。彼女は木々の間に立って、何処か一方を指差していた。

　そちらを見ると、大きな看板が立っていた。看板の表面は塗装が剝(は)がれて錆(さ)びつき、何が書かれているのか判別できない。かろうじて読めたのは、『ようこそ』という文字と、『絶望』という文字だけだった。元は『絶景』と書かれていたところを、赤いスプレーで『絶望』と書き換えられたものだ。

「これ、見覚えがある」

　わたしが呟くと、霧切は肯いた。

「以前、来た時にもあったわ。でもこんなに錆びてはいなかったし、看板が立っている場所自体、前とは違っているように見える」

「何者かの意図を感じるわね」雪村は腕組みして云う。「お宝が近づいてる予感がする」

　それから三人で、馬の足跡を追うように歩いていると、やがて正面にぼんやりと明かりが見えてきた。時刻はまだ昼を過ぎたばかりだけど、暖かな光が周囲の雪を赤く染めている。

　明かりに近づくにつれ、雪上に建つ硝子張りの小さな建物が、はっきりと見えてきた。

　同時に、建物の方から白い馬がこちらに駆けてくるのが見えた。馬上には誰もいない。馬は何事もなかったかのようにわたしたちとすれ違い、森へ消えていった。

「ご主人さまに愛想が尽きた、ってさ」

　雪村が馬の言葉を代弁する。当の夕覇院の姿は周囲に見当たらない。すでに建物の中へ入ったのだろう。

　わたしたちは小走りで建物へと向かう。

　そしてついに——シリウス天文台に到着した。

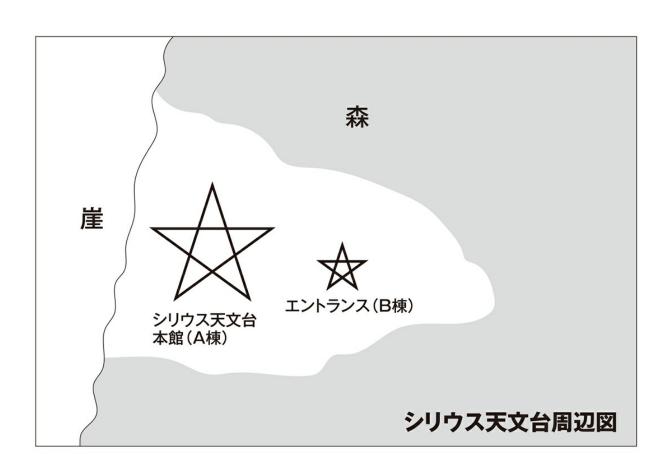
「まさかここに戻ってくるなんてね」

　わたしと霧切にとって、ここは始まりの場所でもある。新仙が死んだ今、物語が閉じようとしている時に、こうしてここに戻ってくることは、もはや運命としか思えない。それとも——それさえも仕組まれた筋書きなのか。

「さっさと入りましょ」

　雪村が硝子の自動ドアを開けて中へ入っていく。わたしと霧切も彼女に続いた。

　シリウス天文台は、冬の夜空に輝くシリウスになぞらえて、俯瞰(ふかん)で見ると五芒星(ごぼうせい)の形をした建物になっている。またシリウスが大小二つの連星(れんせい)であることから、建物も大小二つ、双子のように連なっている。

森
崖
シリウス天文台
本館（A棟）
エントランス（B棟）
シリウス天文台周辺図

わたしたちを迎えた全面硝子張りの建物が、小さい方のB棟だ。B棟は本館への入り口であり、エントランスとして独立した別棟となっている。本館であるA棟はすぐ隣にあるが、二つの棟を結ぶ廊下は地上には見当たらず、エントランスから地下通路を通ることでしか中に入れない。
「見たところ、ここには何もなさそうね」雪村がB棟内部をぐるりと見回して云う。「夕覇院の姿もないわね。外にはあいつの足跡があったけど」
「すでに本館の方へ移動しているんじゃないですか？」
「そうね、急ぎましょう。後れを取るわけにはいかないわ」
　雪村が地下への階段を下りていく。
　薄暗く急な階段だ。踏み外せば一気に闇の底に落ちてしまうだろう。わたしと霧切は手を繋いで、慎重に下りていく。
　階段を下りきると、地下通路に出る。通路は正面に真っ直ぐ延びていて、突き当たりに扉が見える。
　その扉に背を預けるようにして、見知らぬ男が座っていた。
　丸刈りに三日月形の古い傷痕。だらしなく羽織った軍用ジャンパーから覗いて見えるたくましい胸板。分厚いブーツを履(は)いた足を組み、あぐらをかいて、そこに頬杖をついている。
　いかにも粗野な見た目の一方で、まつげがやたらと長く、頬にはチークが入れられ、唇には真っ赤な口紅が塗られている——どうやら女ものの化粧をしているようだ。
「何見てんのよ」
　男はドスの利いた声で云った。
「い、いえっ、すみません」
　わたしは慌てて目を逸らす。
　一方、その男とは別に、扉の手前で夕覇院が所在なげにうろうろと歩き回っていた。彼はわたしたちに気づき、両手を広げて歓迎するような仕草をしてみせた。
「遅かったな。待ちわびたぞ」
「はぁ？　抜け駆けしようとしていたくせに」雪村は両手を腰に当てて、ため息を零す。「どうやらお困りのようね」
「見ての通りだ。入城を拒否されている」
「あのケバい門番のせい？」
　雪村は扉の前に座り込む丸刈りの男を指差す。
「いや、彼は同業者だ。DSCナンバー『920』の門美戦士(かどみせんし)。名前くらいは聞いたことあるだろう？」
「『920』？」わたしは思わず声を上げていた。「あ、あの人もゼロクラス？」

しかも頭の数字の『９』は殺人事件専門だ。『２』は確か強盗などの強行犯を得意とする数字だっただろうか。
「ごちゃごちゃとうるせーわよ」
　門美がおもむろに立ち上がった。足元の照明に照らし出された彼の顔は、モデル並みに完璧なメイクが施されていて、美意識の高い女子にしか見えない。一方で、めかしこんだ顔面に対して、精悍（せいかん）な身体つきのギャップが激しい。
「それにしても、どんな凄腕が来るかと思いきや、女とガキじゃない」
　門美は嘲（あざけ）るように云う。
「あら、私たちじゃ不満かしら」
　雪村が受けて立つ。
「不満どころか好都合よ。ライバルは少ない方がいいから」
「『ライバル』って……」わたしは霧切に耳打ちする。「もしかしてあの人も新仙の遺産を狙ってきたのかな」
「そうね。しかもあの人が一番乗りみたい」
　誰よりも早く新仙の死を察知し、遺産の隠し場所を特定する情報収集能力と、現場へ最速で駆けつける行動力。探偵としてこれらの能力がなければ、ここまで来ることはできないだろう。ＤＳＣのランクからみても、ただ者ではないことは間違いない。
「まるで『新仙帝の遺産』争奪戦ね」
　霧切は目を細めて云う。
「争奪戦って……そんな」
「新仙の遺産を狙って、野心的なゼロクラスの探偵三人が集まった。もちろんこれは偶然ではないわ。例によって『争奪戦』は表向きの動機。犯人にとって真の動機はまったく別のものである可能性が高い」
　霧切はすでに事件の核心について、そこまで読んでいた。数々の『黒の挑戦』を乗り越えてきたからこそ、組織のやり口がわかるのだろう。
「で？　こんな所に集まって、何してんの？」
　雪村が尋ねる。
「そこの装置を見な」
　門美が壁際に並んだ五つの装置を指差す。
　高さ一メートル程度の硝子板のようなものが、等間隔に五つ、まるで墓標のように立ち並んでいる。

装置というわりに、目盛りやスイッチなどは何処にも見当たらない。唯一特徴的なのは、上部に直径十五センチほどの丸い穴が開いていることくらいか。
「なるほど、これが『ひらけゴマ』ってわけね」
「どういうことですか？」
「おそらく本館に入るための認証装置でしょ。この穴に腕を通すと――」雪村は実際に装置の穴に右手を差し入れた。「ほら、登録できたわ。手首の静脈パターンで個人を識別するみたい」
　ピッと音が鳴ったあと、穴の上部の硝子パネルに『もう片方の腕の登録を行ないます』という文字が浮かび上がった。透過式の液晶文字盤になっているようだ。
　雪村が続けて左手を穴に通すと、『登録完了しました』の文字が浮かび上がった。どうやら両手首を登録しないといけないらしい。
「これでよし。それじゃ、お先に」
　雪村は満面の笑みを浮かべて、通路の先にある扉を開けようとする。
　けれどびくともしない。
「それで開くなら、とっくにアタシが開けてるし」
　門美がにやにやと笑いながら云う。
「五つの装置すべてを登録済みにしなければ扉は開かないようだ」夕覇院が云った。「つまり最低でも五人揃わなければ、本館には入れない」
　なるほど、それで彼らはわたしたちを待っていたというわけだ。
　門美、夕覇院、雪村、霧切、そしてわたし。
　これでちょうど五人。
「さあ、さっさと登録を済ませな、ガキども。ついでにお前もね、夕覇院」
　門美が急かす。文句の一つでも返してやりたかったけれど、ここで突っかかっていては先に進めないので、わたしは黙って装置の前に立った。
「おい、お前。それはすでにアタシが登録したやつだから。重複はできないのよ。隣の装置にしな」
　門美がわたしの背中に投げかける。わたしはすごすごと隣の装置に移った。
　夕覇院、わたし、霧切と並んで、装置の登録を始める。
「夕覇院さん、まだ登録してなかったんですね」
　わたしは隣の夕覇院に何気なく話しかける。
「この装置に毒針でも仕込まれていたらそれで終わりだからな。毒味なしに料理に手をつけるほど、私は愚かでも下賤でもない」

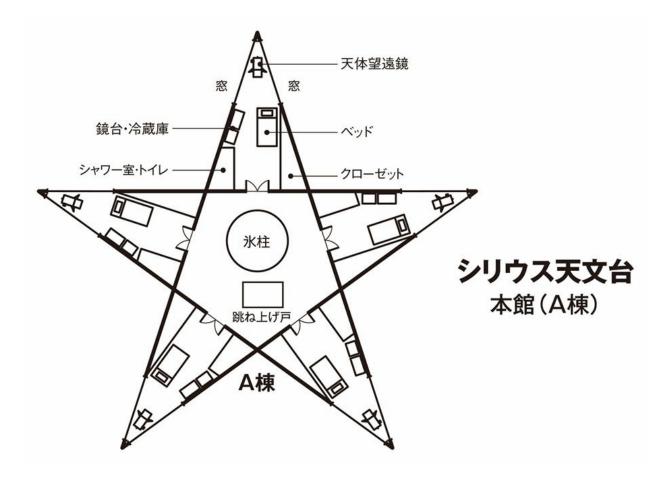
夕覇院は悪びれる様子もなく云う。つまり彼は装置の安全性を確かめるために、先に誰かが腕を通すのをその目で見るまで動かなかったのだろう。さすがゼロクラスの探偵ともなれば、嫌らしいほど慎重だ。
　五台の装置すべてが登録済みになると、扉のロックが外れる音が聞こえた。
　近くにいた雪村がドアノブを掴む。
　扉はあっさりと開いた。地下通路はそこからさらに二十メートルほど真っ直ぐ続いている。等間隔に配置された床の埋設灯が通路全体を橙色に染めていた。
「ゲームスタートね！　こういうのはスタートダッシュが肝心よ。さよなら！」
　雪村が小走りで先へ進む。それから門美と夕覇院が続き、わたしと霧切は最後に入り口をくぐった。
　ひんやりとする通路を歩きながら、わたしは小声で霧切に話しかける。
「前はあんな認証装置なかったよね？」
　霧切は黙ったまま肯く。
　もしもシリウス天文台が新仙の隠し金庫として改造されているのだとしたら、あの意味深な認証装置の存在も納得がいく。けれど物事はそう単純ではないだろう。その改造がトリックに関わってくるのは間違いない。
　通路はやがて、上へと続く階段となる。探偵たちが恐れも知らずに上がっていくなか、霧切は階段の下で立ち止まって、床を見つめていた。
「どうしたの？」
「ここの埋設灯だけ暗いわ」
　霧切が足元を指差す。床に円形の曇り硝子がはめ込まれていて、照明が柔らかく灯っている。見たところ、他とそれほど差はないけれど……
「結お姉さま、ドライバー持ってる？」
「ふふん、あるよ」
　わたしはリュックからプラスのドライバーを取り出す。
「なんでも入っているのね」
「昔から探偵は七つ道具を持ち歩いてるもんだよ。霧切ちゃんもそうしたら？」
「私には不要ね。結お姉さまがいれば、それで済む」
「わたしは君の荷物持ちか」
　話している間にも、霧切は埋設灯の枠を留めているネジをドライバーで外していく。この単なる照明の何が、彼女に違和感をもたらしたのか、わたしにはわからない。けれど事件解決の糸口はいつも、こ

ういう些細なところにある。
「ネジを全部外したのはいいけど……開かないわ」
　霧切は中の照明を確認したいらしい。けれど硝子の板がしっかりとはまっていて外れそうにない。
「これ……硝子じゃないわ」霧切が指先で硝子板を擦る。「分厚い氷よ」
「氷？　どうして硝子の代わりに氷なんか……」
「謎ね」
　霧切が立ち上がって腕組みした時、頭上からわたしたちを呼ぶ声が聞こえてきた。
「おーい。結ちゃん、響子ちゃん、聞こえる？」
　雪村の声だ。階段の上を見上げる。ところが真っ暗で何も見えない。そこにいるはずの雪村の姿は確認できなかった。
　わたしたちはひとまず床の照明をおいておいて、階段を上った。
「おーい」
「はい、聞こえてます」
　わたしは暗闇に向かって返事する。
「とりあえず一番上まで上ってきて」
　云われた通り、階段を上がる。いくら上っても光は差し込まない。どうなっているのだろう。
　やがてわたしたちは天井に到達してしまった。
「そこ、蓋されてるでしょ。跳ね上げ式の戸があって、一度閉まったらこちら側からは開けられないのよ。そっちから開けてみて」
　わたしは手探りで天井に手を当てて、押し開ける。
　するとあっさりと戸が開き、室内の光が差し込んできた。
　雪村がこちらを覗き込むようにして立っている。
「やっぱり階段側からは開くのね」
　わたしと霧切は階段を上って、室内に入った。
「寒っ」
　思わず声に出てしまうほど、室内が異様に寒い。それが最初の印象だった。自分の息が真っ白になって、しばらく残る。
「おい、戸を閉めるなよ。閉じ込められちまうからな。そのままにしときな」
　門美が声を上げる。
　わたしは慌てて戸から手を離し、開いたままの状態にしておく。

室内側に立ってみると、地下に続くその出入り口は、床に開いた四角い穴のように見えた。周囲に柵などないので、落っこちないように常に注意する必要があるだろう。
わたしは視線を床から周囲に向ける。
わたしが今いる中央ホールは五角形になっていて、五つの辺にそれぞれ扉がある。すべて客室だ。これは前回来た時と同じだ。
前とはっきり違う箇所もある。以前はホールの中心に大きな円卓が置かれていた。けれど今、中心にあるのは太い柱だった。
見るからに普通の柱ではない。半透明の硝子状の円柱で、柱の向こう側がぐにゃりと歪んだ状態で透けて見える。
これは氷の柱だ。
柱の直径は二メートルほど。大人が両手を広げても到底抱えきれる大きさではない。しかも何故か、柱の周囲をぐるりと鉄格子が取り囲んでいる。まるで鳥籠（とりかご）に囚われた氷柱だ。鉄格子と柱の間の距離は五十センチほど。格子の隙間から、うんと手を伸ばせば、かろうじて氷の表面に触れられそうだ。
柱は天井すれすれまで上に伸びているが、屋根を支えている様子はない。そもそもシリウス天文台はその名の通り、元は天文台であり、天井が開閉可能なドーム状になっている。本来なら、こんな所に柱などあるはずがない。
「この柱は……なんなんでしょうか」
わたしは誰ともなしに尋ねていた。けれどその問いに答えられる探偵はいなかった。事前調査でも、この柱の存在は誰にも確認できなかったのだろう。
わたしは誘い込まれるように、氷柱へ近づき、鉄格子に触れる。
するとその時、館内中にけたたましくブザーが鳴り響いた。
「な、何っ？　わたし何か——」
『扉が開いたままになっています！　扉が開いたままになっています！　扉が開いたままになっています！』
大音量のブザーとともに、機械音声が響き渡る。
思わず耳を塞ぎたくなるほどだ。
「うるさい、うるさい！　誰か止めて！」
雪村がブザー音に負けじと大声で騒ぎ出す。
『扉が開いたままになっています！　扉が開いたままになっています！　扉が開いたま

まになっています！』
「扉？　入り口の跳ね上げ戸のことか？」
　夕覇院が床の穴を指差して云う。
「クソうるせーわね！　このままじゃ頭がおかしくなる。おいガキ、戸を閉めな！」
　門美が云った。
「いいんですか？　閉じ込められてしまいますけど……」
　わたしは一応、確認する。けれどその声さえ、ブザー音に掻き消されてしまう。もう一度、尋ねようとすると、その前に門美が戸を蹴り飛ばして、閉めてしまった。
　すると途端にブザーが鳴りやんだ。
　わたしたちは一様に安堵する。
「退路を断たなきゃ先には進ませないってことね。ったく、性格悪いじゃない」
　門美は丸刈りの頭を撫でながら、顔をしかめる。
「さしずめ金庫の中に閉じ込められた銀行強盗といったところか」
　夕覇院は例の額縁をあちこちに向けながら、周囲を見回している。
「自分で云う？　そういうこと」
　門美が鼻で笑いながら云った。
「勘違いしないでもらおうか。強盗はもちろん君たちだけだ」
「だったらお前はなんなのよ」
「偉大な探偵の遺志を継ぐ者。次世代の探偵の代表にして、探偵の統一王だ」
「死ねば。ただのハイエナのくせに」
「ふふ……『ない』な」
　夕覇院が額縁越しに門美を覗く。門美は中指を立てて、それに応じた。
「さて、馬鹿な連中はほっといて……」雪村がわたしと霧切のそばにやってくる。「ここまではイントロダクションね。妙な認証装置といい、おかしな建物といい、私はますます『アタリ』を確信しているわ」
「でもどんな危険があるかわかりませんよ」
　わたしは小声で云う。
「確かにこの建物が新仙帝の遺したものだとすれば、危険な罠が張り巡らされていても不思議じゃない。そこで君たちの出番よ！　前にもここに来たことがあるんでしょ？　以前と違っている部分を指摘してちょうだい。それがお宝への鍵になっている可能性が高いわ」
「お宝ですか……」わたしはため息交じりに云う。「まず以前は認証装置なんてありませんでした。階段

の出入り口の戸もありません。それから——この柱もです」
「他には？」
「えーと……」
　わたしは周囲をぐるりと見回す。
　柱の他にもう一つ、気になっている箇所があった。

天体望遠鏡
窓
窓
鏡台・冷蔵庫
ベッド
シャワー室・トイレ
クローゼット
氷柱
跳ね上げ戸
A棟
シリウス天文台
本館（A棟）

各部屋の扉だ。

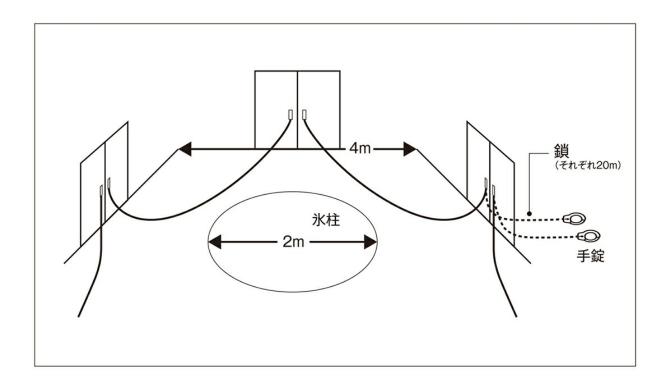
一見すると普通の両開きの扉だけど、よく見ると左右どちらにもドアノブがない。

本来ドアノブがあるべき場所に、小さな穴が開いている。そして奇妙なことに、その穴から鎖が垂れ下がっていた。

両開きの左右両方、それぞれの穴から一本ずつ、計二本の頑丈そうなチェーンが床へと伸びている。

そして二本の鎖は左右へ分かれ、それぞれ隣の部屋の扉へと伸びていく。最終的に鎖は、隣の部屋のドアノブに開いた穴へと繋がっていく。

そんな調子で五つの部屋の扉はすべて、鎖によって連結しているように見えた。

4m
鎖
（それぞれ20m）
氷柱
2m
手錠

「この鎖ね……私も気になっていたわ」
　雪村はそう云って、近くの部屋の扉を押し開けた。
　予想に反して、扉はあっさりと開く。わたしはホールから客室内を窺った。
　客室内は奥の方が極端に狭くなっている。俯瞰で見ると部屋は二等辺三角形になっていて、奥が頂点に当たる。部屋の中央にベッド。入って右手側にクローゼット。左手側にトイレとシャワールーム。左手奥には鏡台と小さな冷蔵庫もある。これらは以前と同じだ。
　三角形の二等辺は、奥側半分の壁が硝子張りの窓になっている。星を見るための展望窓だ。今はカーテンがかけられているので外は見えない。そして三角形の頂点辺りに、天体望遠鏡が設置されている。大口径のニュートン式反射望遠鏡だ。前回の事件ではこれがトリックのための重要なアイテムとなった。
「室内の構造はほとんど変わっていないように見えるわね」霧切が云った。「でも以前は扉が片側だけだった。こんなふうに両開きではなかったわ」
「そうだっけ……よく覚えてるね」
「なるほど、なるほど」雪村は相槌（あいづち）を打ちながら室内に踏み込む。「鎖の先はこうなっているわけか」
　鎖は扉の穴を通って、さらに室内へと伸びていた。
　雪村は鎖をたどるように、部屋の奥へと進んでいく。そしてベッドの脇で足を止めた。
「見てよこれ」
　雪村はベッドの上から、灰色の輪のようなものをつまみ上げた。
　それは手錠だった。
　手錠には鎖がついている。どうやら扉の穴から繋がる鎖の終端が、それらしい。
　数か月前の出来事がフラッシュバックする。
　霧切響子と出会ったあの日。わたしが目を覚ますと、手錠をかけられ、鎖でベッドに繋がれていた。犯罪被害者救済委員会との戦いが始まった瞬間だ。
「ゲームのルールが見えてきたわね」
　霧切が呟く。
「えっ、もう？」わたしは首を傾げる。「どういうことなの？　霧切ちゃん」
「五つの部屋に、五組の手錠……そして私たちは五人いる。ここまで云えばわかるでしょう？」
　霧切は小さく肩を竦める。
「いや……全然わかんないんだけど」
「さっき両手首の認証登録をしたでしょ。あれはこの手錠のためだったのよ。おそらく手錠にも静脈パ

ターンを読み取るセンサーが組み込まれている。つまり入り口で認証登録した五名が、それぞれの部屋で、両手に手錠をかけた時――何かが起きる」
「何かが起きるって、何が？」
「それはやってみなければわからないわ」
「そ、そんなの危険だよ。だって……手錠だよ？　それにあの鎖！　左右どちらも隣の部屋に繋がってるじゃないか。これってつまり……手錠の鎖は、隣の人の手錠と繋がってるってことだよね？」
「そうね。私たち五人が、それぞれの部屋で左右の手錠をかけると、ちょうど円環状に鎖が繋がる。つまり大きな輪ができるというわけね」
「なんなのそれ！　異常だよ。なんでそんなことしなきゃいけないの？」わたしは興奮気味に云って、霧切にだけ聞こえるように声を抑える。「挑戦状でも『鎖』にコストが支払われてる。つまり殺人トリックと何か関係してるってことでしょ！　わざわざそんなゲームに乗る必要ある？」
「結お姉さまが前に云っていたわ。『先に進むためには、危険を避けては通れない』――私はこれ以上、新仙帝の影に怯(おび)えて生きていきたくはない。前へ進みたいの。彼が本当に死んだとは思えないわ。私自身の手で、とどめを刺さない限り、ゲームは終わらないのよ」
「霧切ちゃん……」
　わたしはそんなつもりで云ったんじゃない。わたしの言葉なんて思い出さなくていいのに。それじゃまるで、わたしが君を死へと導いているみたいじゃないか――
「もう……引き返せないところまで来ちゃったんだね」
　わたしは独り言のように呟く。
　霧切はその言葉に肯いた。
「安心して、結お姉さま。私は探偵よ。死ぬ時は戦って死ぬわ」
「そんなの……子供の云うことじゃないよ」
「で、相談は終わった？」雪村が首を伸ばしてこちらを窺う。「どうする？　やる？　私としては、君たちに協力してもらわなきゃ困るんだけど」
「雪村さんは怖くないんですか？」
　わたしは尋ねる。純粋に疑問だった。ゼロクラスの探偵だろうと、死ぬのは怖いはずだ。
「もちろんリスクは承知のうえよ。でも得られるもののことを考えれば、自然と顔もにやけるってものよ」
「やっぱり……お金ですか」
「そうね。ま、それも結局のところ、息子たちのためだけど」
「息子……？　お子さんがいるんですか？」

「そうよ、まだ云ってなかったっけ？　五歳の男の子と、四歳の女の子。今日は母のところに預けてきた」
　びっくりだ。まさか子持ちだったとは。当然、探偵にだって家族はいる。けれど何故だろう、わたしの想像する探偵像に、家族という要素が入る余地はまったくなかった。
「子供ができた時に一度、探偵は引退したの。でも色々あってね、復帰することになった。今回がその復帰戦。負けられないのよ、私は」
　雪村はそう云って、あっさりと自分の左手に手錠をかけた。
「あっ」
　続けて右手にも手錠をかける。
　わたしは黙って見ているしかなかった。
「結お姉さま、隣の部屋へ行きましょう」
　わたしたちは一旦ホールへ出る。
　門美と夕覇院の姿はない。どこか別の客室を探索しているのだろうか。
　隣の部屋の前で、わたしたちは立ち止まった。
「結お姉さまはこの部屋にして。私はもう一つ隣にするわ」
「霧切ちゃん……本当にやるの？」
　霧切は黙って肯くと、一人で隣の部屋へ向かった。その背中は、やはり小さくて、十三歳の女の子の背中でしかなかった。
　わたしはまだ迷っていた。
　新仙は本当に死んだのか？
　それは間違いない。もしかしたら、あとからあの場所に来た霧切の祖父、不比等が実は偽者で、新仙の変装だったのではないかとも考えたけれど……おそらくそれはない。新仙の計画を滞りなく遂行するうえで、もっとも邪魔な存在が霧切不比等だ。彼を足止めするには、司直の手に委ねるのがもっとも効果的だろう。あのおぞましい自殺劇は、そのために実行されたといってもいいのかもしれない。
　だからあの場所に現れた霧切不比等は本物でなければならない。
　ではわたしの目の前で死んだあの男が、実は新仙によって偽装された名無しの誰かだったという可能性は——それこそあり得ない。あの死に様をやり遂げられる人間が他にいるだろうか。見た目は偽装できても、あの異常性を真似できる者はいない。それに彼が新仙本人であることは、霧切不比等が証明している。
　やはり新仙は死んだのだ。
　それなのに、まだ生きているかのように思えてならない。それどころか、首筋に吐息がかかるほど近くに

いるような気さえしてくる。
　この異様な館のせいだろうか……
　わたしはぐるぐると考えを巡らせながら、目の前の扉を開けた。
　ベッドの上に、手錠が置かれている。
　二つの鉄輪――通常、その二つは鎖によって互いに繋がれているものだ。けれど目の前に用意されたそれに限っては、鎖は互いを繋ぐことなく、それぞれの輪から別々に伸びていて、さらにドアノブの穴を経て、両隣の部屋へと続いている。つまりこれは『一組の手錠』ではなく、左右の隣室をまたいだ『二組の手錠の片方ずつ』ということになる。鉄輪を共有するのは自分の両腕ではなく、隣室にいる人の片腕だ。
　わたしは手錠を手に取る。片方の輪には『右』、もう片方には『左』と書かれていた。
　本当にやるのか？
　始まりも手錠だった。あの時からわたしはずっと何かに繋がれたままなのかもしれない。
『私はこれ以上、新仙帝の影に怯えて生きていきたくはない』
　霧切はそう云った。
　彼女は怯えていたんだ。
　当然だろう。何人もの屍体を目の当たりにし、家族までも……
　わたしは確信する。
　彼女を救えるのはわたしだけだ。
　わたしは自分の両手に手錠をかけた。
　これでいい。
　結果はどうあれ、胸を張って前へ進もう。
　わたしは両手からぶら下がる鎖を床に引きずりながら部屋を出る。するとちょうど隣の部屋から霧切が出てくるところだった。彼女の両手にも、もちろん手錠がかけられている。
　これでわたしの左手と、彼女の右手が長い鎖で繋がったことになる。
　もう一方、わたしの右手は、雪村白孤の左手と繋がっている。さらに雪村の隣は門美で、その一つ隣は夕覇院。夕覇院の隣が霧切で、これで鎖の輪が完成する。

雪村がホールに出てきたわたしに気づいて、正面を指差す。そこでようやくわたしはホールに起きていた変化に気づいた。
　中央の氷柱を取り囲んでいた鉄格子が消えていた。
　どうやら鉄格子だけが床下へとスライドして、格納されたようだ。その証拠に、絨毯（じゅうたん）に円形の隙間がうっすらと見える。
　わたしはその隙間をまたいで、恐る恐る氷柱へ近づく。
　すると氷柱の向こう側に見える客室の扉が勢いよく開き、門美が出てきた。
「ははん、全員が手錠をすると、ようやく氷柱に近づけるってわけね」
　彼の両手にも、すでに手錠がかけられている。
　それと同時に、左隣の部屋が開き、夕覇院が姿を現す。
「天然の金庫というわけか。美しい」
　夕覇院は手錠の鎖をジャラジャラさせながら、額縁越しに氷柱を眺めている。
　全員が手錠で繋がれた。
　これでもう引き返せない――
「結お姉さま、氷の中を見て」
　霧切が氷柱を指差す。
　目を凝らして、半透明な柱を透かして見ると、その中心に何か小さな黒い物体が見えた。四角い箱だろうか。せいぜいリングケース程度の大きさの物体が氷漬けになっている。
「氷の中に何かあるけど……なんだろう」
「誰か、ライター持ってない？」
　門美が誰にともなく尋ねる。
　誰も返事しない。

わたしのリュックの中には、ライターが入っている。もちろん探偵道具の一つとして、だ。けれどあえてわたしは名乗りでなかった。
「しょうがないわね……」
　門美はそう呟くと、その場にしゃがみ込んで、ズボンの裾をめくった。するとブーツに巻かれた小型のホルスターが露(あら)わになる。
　そしてホルスターから小さな銃を抜いた。
「あの箱はアタシがもらう」銃口でそれを指し示すようにして、無造作に銃を構える。「早い者勝ちってことでいいわね」
「物騒だな。そんな野蛮なものはしまいたまえ」
　夕覇院が制止しようとする。
「うるせーわよ」
　門美は氷の柱に向けて、引き金を引いた。
　銃声が耳をつんざく。
　そして氷柱の表面で、氷が白く弾け飛んだ。
　火薬の臭いが部屋中に漂い始める。慣れ親しむほど嗅いだあの臭い。あまり思い出したくない。
「やっぱり護身用の銃じゃ、びくともしないか」
　銃口から煙を上げている銃をもてあそびながら、門美は云った。
　氷柱の表面には、深さ二センチ程度のクレーターができただけだった。弾丸は氷柱の近くに、力尽きたように転がっている。
「仕方ない。別の方法を探すわ」
　門美は銃をホルスターにしまい直すと、自分の部屋に引き返していった。
　それに続くように、夕覇院も無言で部屋に戻っていく。
「まさか銃を持ってるなんて……」
　わたしは呟く。
「ここじゃ役に立たないみたいだけどね」雪村が氷柱に穿(うが)たれた弾痕を観察しながら云った。「銃弾でもこの有様だし、あの箱をここから取り出すのは簡単じゃなさそうね」
「あの箱が新仙帝の遺産なんでしょうか……」
「さあ、どうかしら。少なくとも次のステップには違いなさそうね」
　入り口で認証登録を済ませた五人が、手錠を環状に繋ぐことで、鉄格子が開く——そう考えると確かに、わたしたちは核心に一歩近づいたのかもしれない。

「本来なら組織の幹部が五人揃った時にだけ解除できるように構築されたセキュリティなのかもね」雪村が云う。「肝心の幹部がいなくなって、『空き』ができたところに、私たちが首尾よく入り込めたって感じかしら。これも君たちのおかげね」

確かに新仙帝や龍造寺月下はもういない。けれど彼らとジョニィ・アープを足しても三人。五人には満たない。他にも幹部が存在したのだろうか。

そもそも手錠は単なる罠で、セキュリティどころか、わたしたちを取り殺すためだけに用意されたものではないだろうか。

「さて、作戦会議よ」

雪村がわたしたちに手招きして、近くに座るようにジェスチャーする。わたしたちは顔を寄せ合うようにして、氷柱の近くにしゃがみ込んだ。

「ここからがゲームの本番ね。どうにかしてあの氷漬けの箱を手に入れる。もちろん、夕覇院や門美たちより先にね」

「どうにかしてって……どうやって？」

「それを今から考えるのよ」

わたしは氷の柱を見つめる。

直径は約二メートル。箱はその中心にあるので、取り出すにはおよそ一メートル分、氷を取り除かなければならない。

「何十発と銃弾があれば話は別だけど、私たちはそんなものは持っていないし、門美も同じみたいね。だから何か別の方法を考えなきゃいけない。たとえば溶かす、削る、掘る……二人とも、何か使えそうな道具は持ってない？」

わたしは霧切に目配せして、リュックの中身を雪村に見せるべきかどうか、無言で尋ねた。霧切は特に間を置かずに肯いた。とりあえず今の段階では、雪村に歩調を合わせていくという判断のようだ。

わたしはリュックを開けて、ひっくり返す。床の上に散らばったものの中から、雪村は早速ライターを見つけ出した。

「なんだ、持ってるのね。さっき名乗り出なかったのは賢いわ」雪村はにやりと笑う。「あと使えそうなのは……このドライバーくらいか」

二つのアイテムを床に並べる。

ライターはコンビニで売っているような、いわゆる百円ライターだ。一方、ドライバーは全長十五センチ程度の小型なもので、軸も細い。

「これだけでは心もとないわね……」

「雪村さんは何か持ってないんですか？」
「ピッキングの道具は揃えてきたけど、今回は役に立ちそうにないわね」雪村は肩を竦める。「とりあえずこの二つが、あの氷のオバケに太刀打ちできるかどうか、試してみましょ」
　雪村はライターとドライバーを持って、立ち上がった。
「まずはこれで——」
　雪村はドライバーを逆手に持つと、氷の表面にその先端を突き立てた。しかし案の定、わずかな傷が残された程度で、中心まで掘り抜くにはとてつもない時間がかかりそうだ。
「ライターの方はどうですか？」
「これだけじゃ歯が立たないと思うけど……とりあえずやってみよっか。門美も夕覇院も、部屋に引っ込んでるわね。今のうちに——」
　雪村はライターに火を灯すと、氷の表面に近づけた。すると火を当てた部分が黒く焦(こ)げただけで、ほとんど溶けたようには見えない。
「ええっ、氷って焦げるの？」
　雪村は驚いて焦げた部分を指で擦る。
「火を直接当てると、ガスの成分で焦げるのよ」霧切が云う。「火を当てずに、熱で溶かした方がいいわ」
「へえ、勉強になった。今度子供に教えてあげよう」
　雪村は、今度は氷柱から少し離したところで火をつけた。ゆっくりと氷の表面が溶けだして、てらてらと濡れ始める。けれど全体から見ると、撫でた程度の変化でしかない。
「やっぱり無理そうね。これは種火として温存しておきましょ。はい、返すわ」
　雪村がライターを差し出す。わたしはそれを受け取って、コートのポケットにしまった。
　氷の金庫は見た目以上に堅牢(けんろう)そうだ。闇雲にこじ開けようとしても、まるで突破できそうにない。
　他の探偵たちもそれを察してか、それぞれ部屋に引っ込んで攻略法を模索しているようだ。
「やむを得ないわね……私たちも一旦手分けして周囲を探索してみようか。あの箱を取り出すのに有効な道具が見つかるかもしれないし」
　雪村の提案に、わたしと霧切は肯く。
「いい？　これは莫大な遺産をかけたレースなのよ。あんな怪しいやつらに権力(ちから)を渡したくないでしょ？　もたもたしていたら出し抜かれるわ。くれぐれも頼むわね」
　雪村は諭すように云って、小走りで自分の部屋に引き返した。
「結お姉さま、一緒に部屋を調べましょう」

わたしは霧切に連れられるようにしてホールを移動する。移動の際には、手錠の鎖が絡まないように注意しなければならない。新仙はなんて厄介なものを作ったのだろう。

部屋に戻る際に、ふと壁に埋設されているキャビネットに気づいた。

これは……見覚えがある。

「天井のドームを開けるためのスイッチね」

霧切がわたしの視線に気づいて云った。

そうだ。この建物はもともと天文台として使われていたので、天井のドームが開閉式になっている。天井は以前と変わらず『鏡地獄』を彷彿とさせる全面鏡張りだ。凹面鏡によって奇妙な形に歪んだわたしと霧切が、上からわたしたちを見下ろしている。

わたしはキャビネットを開けて、試しにスイッチを押してみた。

しかし何も起きない。

以前は確かにドームが開いたのだけれど——

「それは放っておきましょう。それよりも結お姉さま、これを見て」

霧切はキャビネットの蓋の裏に吊るされている水銀温度計を指差す。

温度計が指しているのは……

「マ、マイナス十度？」わたしは驚いて何度も目盛りを確認する。「どうりで寒いわけだ。でもいくらなんでも外の気温はそこまで低くなかったと思うんだけど……」

「氷の柱を維持するために、温度調節されていると考えるべきね」

「とんでもないリフォームしてくれたもんだよ、まったく。雪の降ってる外の方がまだあったかいって、泣きたくなるような状況だね。そのまま涙も凍りそうだけど」

「ホールよりも客室の方が暖かいわ。中へ入りましょう」

霧切が先にわたしの部屋へ入る。わたしも後から続いた。

部屋の扉を閉めると、確かにホールよりは暖かく感じられた。扉の上下左右、何処にも隙間はなく、機密性も高そうだ。けれど霧切の手錠の鎖が両開きのドアに挟まれるため、そこから冷気が漏れ出してきてしまうのは避けられなかった。

霧切が周囲を見回しながらベッドに腰かける。わたしはその隣に座った。

「霧切ちゃん、どう思う？　これってもう『黒の挑戦』は始まってるのかな？」

「五人揃った時点で『黒の挑戦』が始まっているのは間違いないと思う」

「やっぱり……そうだよね。ってことは、三人の探偵の誰かが犯人？」

「そうとも限らないわ」

「えっ？」
「気づいたら私たち以外、三人とも屍体になっている、なんてこともあるかもしれないわ。前と同じように」
「ああ、そっか……」
　嫌な思い出だ。
　以前、シリウス天文台で遭遇した事件では、わたしと霧切の他に、同行した三人の探偵が一晩の間に全員バラバラ屍体となって発見された。生き残ったのはわたしと霧切だけだった。
　二度とあの恐怖を味わいたくはない。
　ベッドの上に置かれた霧切の手を、わたしは自然と握りしめていた。手錠が触れ合って、乾いた金属音を鳴らす。
「今回も二人で生きて帰るために、今の状況を子細に把握しておきましょう」
　霧切はいつもと変わらない冷静な顔つきで云った。
　わたしは無言で肯く。
「まずこの手錠ね」霧切は片腕を持ち上げてみせる。「見たところ鍵穴がないわ。おそらく電子制御だと思う。自動車のリモコンキーみたいなタイプね」
「ピッキングでは外せないってことか」
「解錠するにはリモコンキーを見つける必要があるけど、そう簡単に手に入るとも思えない」
「ずっと手錠したままだと、不便でしょうがないな……って、よく考えたらこれ、着替えができないじゃん！」
「別に着替えなんてしなくても問題ないでしょう」
「いやいや、問題あるから！」
「最悪でも１６８時間経過後には自動的に外れると思う。一週間くらいなら平気でしょう？」
「平気じゃないって。霧切ちゃんも女の子なんだから、そういうとこ気にして！」
「少しは気にしているわ」
　霧切は髪を留めているリボンに触れる。わたしがプレゼントしてあげたものだ。
「まあ、上着は変えられないけど、下は着替えられるからまだマシか。リュックを降ろしておいてよかったよ」わたしはため息交じりに云う。「それにしても……来客者を全員、鎖で繋げるなんて、大したおもてなしだよ」
　左右の手錠から、それぞれ別々に部屋の外へと続いている長い鎖。文字通り、これがわたしたちを縛りつけている。
　通常、手錠の鎖といえば、せいぜい十センチ程度で、左右の輪を繋ぐだけのものだ。ところがわたした

ちが今はめている手錠の鎖は、床に引きずってなお、余りあるほど長い。しかも左右それぞれ、他人の手首に繋がっている。
「この鎖、短く見積もっても二十メートルはあるわ」
「そんなに？」
「試しに測ってみましょう。結お姉さま、メジャーを持っていたわね」
「あ、うん」
　わたしはリュックから巻き取り式のメジャーを取り出す。
「結お姉さまは、部屋の一番奥まで移動して。三角部屋の頂点ね。私も自分の部屋に戻って、同じようにするから」
　霧切はメジャーを持って部屋を出ていってしまった。こういう時の彼女は積極的で、なんだかうきうきしているようにさえ見える。
　彼女が出ていってから、彼女と繋がっている方の鎖が何度か引っ張られるような感触があった。そのあと彼女が戻ってきた時にはもう、計測は終わっていた。
「建物の構造が大体把握できたわ。客室の奥行が約六メートル——これが三角形の『高さ』に当たる部分の長さね。そして底辺が約四メートル。つまりホールは一辺が四メートルの正五角形になる。仮にさっきみたいに隣同士の人間がそれぞれ部屋の奥に立った場合、扉までの最短の鎖の長さは六足す六で十二メートル。そしてホールを経由する鎖は、ぴんと張った時に最短で約三メートルになるわ」
「えっと……それって、つまり？」
「鎖の長さはおよそ二十メートルで、差し引き五メートルの余裕がある。要するに……手錠で繋がっていても、それぞれの部屋で行動するぶんには不自由はなさそうということね。鎖を引きずって歩くのが煩わしいくらいで」
「なるほど。理解した」
「問題は、この鎖が私たち五人を環状に繋げているという点ね。しかも円の中心に氷の柱がある」
「ってことは……あの氷の柱を溶かしきらない限り、わたしたちはこの建物から逃げ出すことすらできないのか」
「たとえ氷の柱がなくなっても、鎖が扉を経由している以上、全員揃って窓から脱出というわけにはいかないわ。手錠を外さない限りね」
　ようやく状況が見えてきた。
　わたしたちはこの館に囚われてしまったのだ。
　しかも自ら両手首を差し出して——

『新仙帝の遺産』に手を出す以上、それくらいの覚悟や代償が必要ということだろうか。
「私の推測では、手錠を外すためのリモコンキーは、あの氷漬けの箱の中に入っている」
　霧切が云う。
「えっ、遺産は？」
「そんなものがあるとは思えないけれど……もしあの箱に一緒に入っているのだとしたら、なんらかのデータメモリか、次の指示が書かれた紙切れくらいじゃないかしら。少なくとも金銀財宝の類ではないでしょうね」
「うーん……いずれにしても、このとんでもない脱出ゲームを攻略するには、とりあえず氷を溶かすのに協力するしかないってことだね」
「ええ。しばらくは雪村さんに従うことにしましょう」
「正直、あの人だって信用できないけど。今まで何度も探偵には裏切られてきたからね。霧切ちゃん以外、誰も信じられない」
「それは私もよ。結お姉さま以外──」
「あ、わたしのことは信用してくれてるんだ」
　そう云うと、霧切は視線を逸らして、返事をごまかした。
「で、どうやって箱をゲットするの？　できれば他の探偵たちよりも早く攻略したいところだけど……」
　わたしは立ち上がって室内をぐるりと見回す。雪村は『有効な道具』を見つけろと云っていたけれど、最低限の家具しかない客室だ。
　一つだけ、物珍しいものといえば、窓際の天体望遠鏡だけど……
「あっ、そうだ！　天体望遠鏡のレンズで太陽光を集めて、氷の柱に当てるっていうのはどう？」
　わたしは思いがけず出た自分のグッドアイディアに、思わず声が大きくなる。
「日光の収斂(しゅうれん)火災を使ったトリックは前にあったわね。でも角度的に可能かしら」
　霧切が首を傾げる。
「南向きの窓ならできるんじゃない？　もちろん昼間、晴れていることが条件だけど……陽射しの角度が多少悪くても、ほら、あの鏡台を使えば！」
　わたしは壁際に置かれている小型のテーブル鏡台へ近づく。それほど大きくないので、動かすことも造作ないだろう。この鏡で太陽光の位置を調節して──
「あれ？」
　わたしは鏡台を窓際まで運ぼうとして、違和感に気づいた。
　いくら動かそうとしても、びくともしない。

よく見ると、鏡台の足がボルトで床に固定されている。

「何これ……」

「ベッドも冷蔵庫も、家具はすべて床に固定されているわ」

　霧切はベッドに腰かけたまま平然と云う。

「気づいてたの？」

「ええ、さっき自分の部屋を調べた時に」

「なんでこんなこと……まさか太陽光レンズを使わせないために？」

「というよりは、本来の用途以外には使えないようにするためじゃないかしら。たとえばクローゼットや鏡台をホールに運び出して、そこで燃やせばそれなりに燃料になるでしょう？　ちなみにシーツや毛布も、鋲で本体に打ちつけられていて、運び出せないようになっているわ。カーテンも取り外せないように金具で固定されている。持ち出せたところで、不燃性で燃えにくいでしょうけど」

「氷の柱を保護するために、家具を固定してるってこと？」

「おそらく」

「それじゃ、ライターなんか持ってても意味ないじゃん。燃やすものが何もないんだから」

「ところがそうでもないのよ」

　霧切はベッドから立ち上がると、唐突に冷蔵庫を開けた。

　中には数本のミネラルウォーターの他に、四角い煉瓦ブロックのようなものが詰め込まれている。霧切がその一つを手に取った。

　それは札束だった。

　女子高生の日常生活ではまず見ることもないような代物。けれどわたしはそれを、トラウマになるほど見たことがある。かつて『黒の挑戦』で、命の代わりにそれをやり取りしたことだってある。

「全部で二千万あるわ」

「に、二千万——」

　わたしは息を呑む。

「私の部屋の冷蔵庫にも、同じ金額が入っていた。たぶん他の部屋も一緒よ。挑戦状に『現金１億』の記載があったけど、五つの部屋に二千万ずつと考えれば計算が合う」

「なんなの、これ……またオークションでも始まるっていうの？　それとも、まさかこれが新仙の遺産？」

「いいえ、おそらくこれは——」

　霧切が何か云いかけた瞬間、ホールの方から騒がしい音が聞こえてきた。

　わたしたちは反射的に立ち上がって、ホールに飛び出す。

氷の柱を挟んだ向こう側で、夕覇院が床に倒れていた。彼のきらびやかなコートが床の上に広がって、高級そうな絨毯のように見える。

　その横では門美が何やら喚き立てている。どうやら彼が夕覇院を突き飛ばしたらしい。

「大人しく渡しときゃいいのよ、ゴミカス」彼の手には銀色のジッポーライターが握られていた。「ああ、アンタたち、これを見な。コイツ、ライター隠してたのよ。つまりアタシたちに嘘ついてたの。手錠で繋がれた者同士、仲良くやっていかなきゃいけないってのに！」

　門美は早口でまくし立てると、近くに落ちていた札束を拾い上げた。

「それは私の金だ……」

　夕覇院が身体を起こして手を伸ばす。

　すかさず門美が蹴りを入れて、夕覇院を再び高級絨毯に変えた。

「アタシたち、のよ」

　門美は札束から紙幣を一枚抜き取る。

　そしてためらうことなく、ライターでそれに火をつけた。

　たちまち紙幣が派手に燃え上がる。門美はまるで舞台に立つマジシャンのように、炎を宙へ放り投げた。しかし手品と違って、火は消えることなく弧を描いて、氷柱の近くに落ちた。

　そのまま灰になるまで数秒、火は強く燃え続けた。

「やっぱり、そういうことね」門美は腕を組んで云った。「万札に可燃性の液体を染み込ませてあるみたい」

「可燃性の液体……？」わたしは思わず呟く。「それじゃあ、あのお金は――」

「氷を溶かすための燃料ってわけね」

　一億円分の燃料。

　確かに一枚であれだけの炎を起こせるなら、一万枚で氷柱を溶かすことも不可能ではないかもしれない。

　けれど……一億円をかけてでも手に入れるだけの価値が、あの小さな黒い箱にあるのだろうか？

「それじゃアンタたち、ボケッと見てないで、早く部屋から金を持ってきな」

　門美は親指で、わたしと霧切に部屋へ戻るように指示する。

「勝手に話を進めないでくれる？」

　いつの間にか部屋から出てきていた雪村が割って入る。

「ああ？　何よアンタ。さっきから生意気じゃない？」

「挑発に乗るつもりはないから」雪村は片手を掲げて制するように云う。「あなたの部屋にある二千万を

あなたがどう使おうと勝手だけど、他の人にまでそれを強要するのはいかがなものかしら。結ちゃんたち、あいつには従わなくていいから」
「何云っちゃってんの、アンタ。まさか部屋にある金は自分のだって主張するんじゃないでしょうね。あれはもともとここにあった金よ？　誰のものでもねえし！」
「残念だけど、私の部屋にある金は、私が拾ったものよ。あなたの自由にはさせない」
「てめえ……」門美はメイクの整った顔を鬼のように歪めて呟くと、突然その場に屈(かが)み込んだ。「云うことが聞けねえなら、こうするしかねえな」
　門美はブーツのホルスターに手を伸ばす。
　銃を抜くつもりだ！
　わたしはとっさに身構える。
　しかし——ホルスターは空だった。
　門美は慌てて周囲を見回す。銃は何処にも落ちていない。
「ど、何処いった？」
「探し物はこれか？」
　夕覇院が云った。
　彼はうつ伏せの体勢のまま、額縁を床に立てて、その枠の中から銃で門美に狙いをつけていた。
「お前、いつの間に……」
「次から人を蹴る時には、ホルスターのない方の足にするといい」
　夕覇院はそう云うと、銃口を壁に向けて、引き金を引いた。
　空気が震えて、壁に小さな穴が開く。一瞬の静寂のあとで、火薬の臭いが立ち込めた。上下二連式のデリンジャー銃はもう弾切れだ。
「お、おいっ、何すんのよ！」
　夕覇院は門美の抗議には構わず、立ち上がると、銃の中折れ式バレルを一旦開いて、強引に関節(ヒンジ)部分を捻じ曲げた。構造上、もっとも強度の弱い場所だ。おそらくこれでもう、あの銃は使えない。
「私も金を譲る気はない。さっき燃やした分も返してもらおう」
　夕覇院は銃を放り捨てて云った。
「目先の金に惑わされてんじゃねえよ！　アンタらはあの箱の中身がどれだけ価値のあるものなのか、なんにもわかっちゃいない！　あれは新仙帝が遺したすべて——犯罪被害者救済委員会のすべてなのよ？　世界を動かすだけの力が眠ってるんだ！　それをたった二千万ぽっちで投げ出すっていうの？」

「世界征服でもするつもり？」
　雪村は呆れ顔で云う。
「せいぜい笑っていればいい。アタシは支配されるより、支配する側になってやる」
　門美は捨て台詞を吐いて、自分の部屋に戻ってしまった。彼が部屋に入ったあとも、しばらくは手錠の鎖がドアノブの穴から室内へと引き込まれ続けた。できるだけ手元に鎖の余剰分を引き寄せておこうという魂胆だろう。
「助かったわ」雪村は夕覇院に声をかけた。「礼を云うつもりはないけど」
「構わん。助けたつもりもない」夕覇院はコートの裾を払って云った。「さて、これからどうするかね？　一通り調べてはみたが、この氷の柱を攻略できそうな道具は見当たらなかった。それこそ札束以外はな」
「地道に氷を削っていくしかないんじゃない？」
「……やむを得まい」
　夕覇院はさっき捨てた銃を拾って、グリップを氷柱に打ちつけた。砕けた氷が飛び散る。けれど手のひらサイズの銃では、大した打撃にはならないようだ。
「私たちも作業を始めましょ」
　雪村がわたしと霧切を連れて、夕覇院から離れた位置へ移動する。あくまで彼と協力し合うつもりはないらしい。
「こんなことになるなら、チェーンソーでも持ってくるんだった」雪村が冗談めかして云う。「まあでも、ドライバーでも一晩かければ、一メートルぶんくらい削れるでしょ」
「一晩ずっと、氷を削り続けるんですか？」
　わたしはげっそりして云った。
「交代しながらコツコツやりましょ。こっちは三人いるってだけで、相当なアドバンテージなんだから。最初は私がやるわ」
　雪村はドライバーを受け取ると、鼻歌を歌いながら、氷柱にその先端を打ち込み始めた。
　分厚い氷に対して、一秒間に削れる量はほんのわずか。けれど確実に削れているのは事実だ。こうして延々と削り続けていけば、いずれは——
　それから何分経っただろうか。
　氷はまだ深さ五センチも削れていない。雪村は疲れてきたらしく、早速わたしにドライバーを託した。
　バトンを受け取ったわたしは黙々と作業を続けた。そのうち、柱の反対側で作業していた夕覇院が、作業に嫌気がさしたのか、ふらふらと部屋に帰っていった。少し前から彼の氷を打ちつける音が明らかに弱まっていた。そもそも彼が手にした道具は、この作業を続けるにはあまり適していない。

「ふふふ、これで私たちが単独トップね」雪村が云う。「でもぶっちゃけると私、実はもうそれほど、遺産に興味がないのよね。このゲーム、降りてもいいと思ってる」
「ええっ？」わたしは思わず作業の手を止めていた。「ど、どうしたんですか、急に。今まであんなにノリノリだったのに……」
「だって——二千万よ？　いきなり大金をゲットしちゃったんだもの。そりゃあ一生分の糧（かて）にはならないけど、子供二人分の学費としては充分だわ。私の目的はすでに達成されたってわけ」
「あの二千万を持って帰るつもりですか？」
「ええ。どうせ表には出せない金でしょ。それなら私が有意義に使ってあげるわ」
「で、でも……新仙の遺産はどうするんですか？」
　わたしは氷柱の中に見える黒い箱を指差す。
「あんな取り留めもない箱より、目の前の現金よ」雪村はきっぱりと云った。「それで相談なんだけど……もし万が一、君たちが冷蔵庫に入っているアレをいらないっていうなら、私が……」
「譲るわ」
　霧切は即答した。
「ちょっと、霧切ちゃん」
「さすが名探偵のお嬢ちゃん！　頭が良ければ器もでかい。君のこと、子供たちに語り継いでいくわ。ああ、合わせて六千万！　それだけ現金があれば、しばらくは家族平和に暮らしていける」
「その代わり、知っていることは全部話してもらうわ」
　霧切は無表情の顔を雪村に向ける。
「もちろん、なんだって話すけど……何が聞きたいの？」
「新仙帝が死んだのは間違いないの？」
「まだそのことにこだわってたんだ。よほどトラウマなのね……実は私の別れた元旦那が、警察のお偉いさんでね。情報はそこからなのよ。少なくともデマや噂で片付けられるレベルじゃないって、わかるでしょ？」
「でも……そもそも警察の見込みは正しいんですか？　死んだ人物が新仙帝だという確証は？」
　わたしは尋ねた。
「それはこれから確かめていくことになるんじゃない？　警察だって今まで黙って見てたわけじゃないのよ。警察のデータベースには少なくとも新仙の指紋やDNA情報が記録されてるみたいだし、そのうち本人確認も済むでしょ」
　雪村は気楽そうに云う。

一方で霧切は眉一つ動かさず、無表情のままだった。
「本当に新仙が死んだのなら、この『黒の挑戦』は一体何……？」
霧切は呟く。
わたしにはその答えがわかる。
今回の『黒の挑戦』は紛れもなく、霧切響子のための殺人事件だ。云い換えるなら、死してなお現世に残された新仙帝の呪い——
『私がいなくなったとしても、組織はプログラム通りに動き続ける。「黒の挑戦」もこれまで通り行なわれるだろう』
新仙は確かにそう云ったのだ。
「ところで、そろそろお腹が空いてきたわね」雪村が腕時計を見ながら呑気に云った。「夕食前には帰るつもりだったから、なんにも用意してないけど……」
「パンとかお菓子ならありますよ」
わたしは云った。
「わあ、準備いい」
「水筒もあるので、よかったら……」
「冷蔵庫のペットボトルがあるからいいわ」
「あれは飲まない方がいい」霧切が云う。「毒が混入されている可能性が高い」
「考え過ぎじゃない？　飲み水で毒殺なんかしてたら、ゲームとしてはブーイングものでしょ。でもまあ、冷蔵庫まで取りに行くのも面倒だし、水筒を頂くわ」
わたしたちは氷柱の前で、まるでピクニックのように食事を済ませる。けれど尋常ではない寒さのため、食欲もあまりわかない。もはや目の前の作業に没頭することでしか、寒さを紛らせることをできそうにない。
わたしはチョコレートを少し齧ってから、すぐに氷を削る作業を再開した。
けれどそれも長くは続かなかった。ドライバーを何度も氷に突き刺しているうちに、突然軸が根本からぽっきりと折れてしまったのだ。
「そんな……」
手元に残ったグリップを見つめて、わたしは悲嘆に暮れるしかなかった。折れた軸はわたしの足元に転がっていた。
「あらら、困ったわね」
雪村が折れた軸を拾い上げる。

「安物ですみません……これじゃ作業を続けられませんね」
「計画を少し見直す必要がありそうね。第一、この寒さじゃ一晩中作業し続けるなんて無理だわ。かといって、のんびり攻略してる余裕もないし」
　雪村は自分の身体を抱くようにして、両腕を擦り合わせる。
「お金を少し燃やして、暖を取るという手段も……」
　わたしが云うと、雪村は即座に反論した。
「少し？　少しっていくら？　一枚じゃ暖かくなるはずもないし、十枚でも物足りないでしょうね。だったら百枚？　ないない！　それはあり得ないわ。それだけ稼ぐのがどんなに大変か……」
　確かにそれが普通の感覚だ。けれどこの異様なゲームの中では、常識外の行為で命を繋がなければならないことがある。わたしは今まで何度もそういう経験をしてきた。
　なんとか雪村を説得できないかと思案したけれど、結局諦めるしかなかった。実際、数枚燃やしたところで、なんの意味もないのは事実だろう。
　三人で身を寄せ合って、どうしたものかと思案していると、客室の扉が開いて、門美がホールに出てきた。彼はペットボトルの水を呷（あお）りながら、真っ直ぐ氷柱に近づき、手元に残った水を突然ぶちまけた。
　水は一瞬、白く煙って氷柱を包んだ。けれどそれだけだった。半透明だった氷柱の表面に、白い霜が付着して、むしろさっきよりも余計に厚みを増しているようにさえ見えた。
　門美はそれを確認すると、無言のまま部屋に引き返してしまった。
「何、あれ」
　わたしたちは顔を見合わせる。ペットボトルの水でどうにかなると考えたのだろうか。
「あいつは放っておきましょ」雪村は肩を竦める。「それより、私たちも一旦部屋に戻らない？　とにかく寒くって……」
　いまやわたしたちは、小刻みに震える身体をどうすることもできずにいた。雪山で狙撃戦に備えて何時間も待機していた経験はあるけれど、あの時よりも寒く感じられる。
「しばらく毛布に包（くる）まってくる」
　雪村はそう云って、自分の部屋に入ってしまった。
　ホールにはわたしと霧切だけが残された。
「なんだか不毛なことをしているような気がしてきた」わたしは力なく呟く。「毎回毎回、わけのわからないゲームに参加させられて……わたしたち、なんでこんなことやってるんだろ」
「探偵だからよ」
　霧切は迷いも淀みもせず、そう云った。けれどその顔は寒さですっかり青ざめて、そのまま氷の彫刻に

でもなってしまいそうだった。
「ほんとにあの三人の中に殺人者がいるのかな……霧切ちゃんは予測がついてるの？」
「全員怪しいわね」
「……そりゃそうだ」
「私たちも部屋に戻りましょう。このままだと低体温症で思考能力まで奪われてしまうわ」
　霧切は真っ直ぐにわたしの部屋へと向かう。わたしたちは一緒に部屋に入った。
　扉を閉めると、いくらか冷気を遮断（しゃだん）することができる。おそらく冷凍装置が働いているのはホールだけで、客室にはその影響がない。ただし暖房もないので、これ以上は暖まらない。
「ホールにいるよりは、はるかにましだね」
　じっとしていても寒いので、わたしは何気なくカーテンの隙間から外を覗いてみた。
　こちら側の窓からすぐ向こう側は崖になっているらしく、雪の積もった白い地面が、途中からすっぱりと切断したみたいに暗闇になっている。暗闇の向こうでは風が吹き荒れているのか、唸（うな）り声のような音が聞こえた。
　雪は相変わらず降り続いている。風の影響か、さっきよりも鋭く、凶暴だ。風に煙る雪の向こう、やや左方向に、隣室の窓が見えた。こちらは雪村の部屋だろう。
　窓の鍵を確認する。ハンドル式のクレセント錠で、取っ手を横にすると解錠できる仕組みだ。試しにハンドルをひねってみると、簡単に窓が開いた。
　ここから外に出ることもできそうだ。ただし手錠で繋がれている以上、遠くにはいけない。
　わたしは窓を閉めて、施錠し直した。
　室内を振り返ると、霧切はシャワー室を覗いているところだった。
「何かあった？」
「いいえ、これといって特に」
　霧切は首を振る。
　わたしは彼女の背後から、一緒にシャワー室を覗き込んだ。
　トイレと浴室が一緒になったユニットバスだ。浴槽は存在せず、わずかなシャワースペースがカーテンで区切られている。シャワーヘッドは壁に固定されていて、動かすこともできない。
「あっ、そうだ！　お湯！」
　わたしは思いついて、蛇口を捻（ひね）った。
　お湯を集めて、氷柱に浴びせれば、氷を溶かすことができるのではないだろうか。
　けれどいくら蛇口を捻っても、お湯は出てこなかった。その程度の考えは敵もお見通しのようだ。

「嘘でしょ……お湯が出ないってことは、シャワーも浴びられないってこと？」わたしは愕然（がくぜん）として云った。
「ノーマンズ・ホテルでもシャワーは浴びられたのに、ここではダメっていうの？」
「結お姉さま、これを見て」
　霧切がシャワー室の壁を指差す。そこには数字の書かれた小さなプレートが取り付けられていた。

『22:00――7:00』

「何これ？」
「午後十時から、翌午前七時までの間にしか、シャワーは使えないみたいね」
「時間制？　まあでも使えないよりはいいか……いずれにせよ、お湯が出るなら氷柱を溶かすのに使えそうじゃない？」
「どうやってお湯を氷柱まで運ぶの？」
「えーと……あれだ、ペットボトル」
「少しのお湯をかけたところで逆効果よ」
「それじゃ君と雪村さんの部屋のペットボトルもかき集めて、バケツリレー方式で次から次へとお湯を浴びせ続けよう。これでどう？」
「上手くいくかしら」
「じっとしているよりはまし。そう信じてやってみるしかないね」
　わたしは腕時計を確認する。時刻は午後六時を回ったところだった。シャワーが使える時刻まではまだ時間がある。
　ホールの方は静まり返っている。雪村をはじめ、他の探偵たちも自分の部屋に閉じこもっているようだ。寒さから避難しているのか、それとも次の一手を考えているのか……
　さっき門美がペットボトルの中身をぶちまけていたけれど、もしかしたらシャワータイムが来るまでの下準備だったのかもしれない。冷蔵庫で冷やされた水――ここではむしろ空気よりも温かい――を氷柱にかけた場合どうなるのか、試していたのではないだろうか。
　わたしはベッドに腰かける。シンプルなパイプ製のベッドなので、背中を預けるヘッドボードや、横の柵さえない。上にかかっているのは毛布一枚きり。どうやら今回のゲームは寒さとの戦いでもあるみたいだ。
　それから十時を迎えるまで、わたしたちは部屋の中を仔細に調べたり、ベッドで休んだりして、時間を過ごした。
　九時を過ぎて、シャワータイムまであと三十分――となった時、どこからともなく例の機械音声が館内

中に響き渡った。
『ホール閉鎖まで、三十分を切りました』
　わたしと霧切はスナック菓子を食べていた手を止めて、思わず顔を見合わせた。
「ホール閉鎖……？」
『各員、翌朝まで自室で待機してください』
　機械音声は三度、同じ説明を繰り返して終了した。
　そこへ慌てた様子で、雪村が部屋に飛び込んでくる。
「今の聞いた？」
「は、はい」わたしは肯く。「夜十時以降は、ホールに出られない……ということでしょうか？」
「どうやらそのようね。さすが新仙帝、セキュリティもばっちりってところかしら。残り三十分で、あの箱をゲットするのは難しそうだから、競争は明日に持ち越しね」
「雪村さんはまだ、諦めてないんですか？」
「貰（もら）えるもんは貰っていくわ。でも目下の重要課題は、手元の現金を守り抜くこと。門美と夕覇院に警戒しつつ、隙あらばお宝を頂く。でも無理はしない。私には帰らなきゃいけない場所があるからね」
　帰らなきゃいけない場所――
　そうだ、彼女には家族が待っている。わたしや霧切とは違う。もちろん霧切には家族がいるけれど、新仙の亡霊に取り憑かれている限り、何処にも帰れない。少なくとも彼女はそう考えている。
　霧切の推測が正しければ、手錠を解く鍵は、あの箱の中にある。わたしたちはまず、それを手に入れる必要がある。
「それじゃ、私は朝まで部屋で寝てるわ。云うまでもないと思うけど、君たちも気をつけて。明日にはみんなで笑ってここを出ましょ」
　雪村は手を振って、部屋を出ていった。
「朝まで閉鎖か……」
「シャワー作戦は失敗ね」
　霧切が云った。
「あ、そっか……ホールが閉鎖される十時以降でなければ、シャワーは使えない」
「大人しく部屋で朝を待つしかなさそうね」
「朝まで何もできないなんて……」
「夜は犯人の手番。きっと何か仕掛けてくる」
　霧切はそう云うと、ベッドに腰かけたまま、突然わたしに抱きついてきた。ぬいぐるみのように軽い彼女

の身体を受け止める。彼女はしばらくそのまま、黙っていた。
「どうしたの？　霧切ちゃん」
「死神の足音が聞こえる。今朝からずっと、胸騒ぎが収まらない」
　彼女はわたしの胸元で顔を伏せたまま云った。
「大丈夫だよ。今までだって大丈夫だったじゃない。それはもう霧切ちゃんが死神を飼い慣らしてるって証拠だ。死神なんか君の敵じゃない」
「このまま離れたくない。でも――」
　そう呟く彼女を、わたしは包むように抱いて、冷えた身体を温めてあげた。
　そうしたまま、何分が過ぎただろう。
　やがてまた、あのアナウンスが響き渡る。
『ホール閉鎖まで、五分を切りました。各員、翌朝まで自室で待機してください。なおルールに従わない場合、自爆プログラムを開始します』
「なっ……なんて？　自爆プログラム？」
「手錠をしたメンバーが全員、夜の間は各部屋にいることが、ゲーム続行の条件なのね」霧切は顔を上げて云った。「私、そろそろ部屋に戻るわ」
　霧切はわたしから身体を離すと、ベッドから立ち上がった。そのまま何も云わずに、扉の前まで移動する。
「霧切ちゃん」わたしは彼女の背中を呼び止める。「また明日ね」
「結お姉さま……」
　彼女は振り返って、その場で立ち止まった。
　わたしは彼女に近づき、おでこに口づけする。
「君のこと、必ず守ってみせるから」わたしがそう云うと、彼女は不思議そうな顔でわたしを見上げた。「それに……ほら、離れていても、左手はこうして繋がってる」
『ホール閉鎖まで、三分を切りました。各員、翌朝まで自室で待機してください。なおルールに従わない場合、自爆プログラムを開始します』
「必ずここから一緒に帰りましょう、結お姉さま」
　霧切はそう云い残して、部屋を出ていった。

『ホール閉鎖時刻となりました。それではみなさま、おやすみなさい』

夜十時になった。

それと同時に、扉にロックがかかる音が鳴った。試しに扉を開けようとしてみたけれど、びくともしない。

これでまた独りぼっち。

とりあえず自爆プログラムとやらは作動させずに済んだようだ。もしアナウンスに従わなかった場合、どうなっていたのだろう。あまり考えたくない。

窓の外を覗く。視界はいつの間にか真っ白だ。風が吹き荒れ、地吹雪が周囲を覆っている。窓の鍵は問題なく開いた。試しに窓を開けてみると、たちまち細かい雪が頬を刺してくる。

外に出ることはできそうだ。ただし手錠で繋がれたままでは館から離れられないし、そうでなくてもホワイトアウトの森へ出ていくのは危険だろう。

わたしたちはこの小さな部屋に閉じ込められたのだ。

窓を閉じ、吹雪の向こうに見えるはずの隣の窓を探す。そこには霧切の部屋がある。もしかしたら、霧切もこうして、地吹雪の向こうにわたしの姿を探しているかもしれない。

霧切ちゃん——

明日の朝も、今まで通り会えるよね？

わたしはシャワー室に入り、蛇口を捻る。最初は冷たい水が出てきたけれど、すぐに温かいお湯になった。久々に触れる温もりに、思わず感動する。わたしはシャワー室の縁に座り込んで、裸足になり、足先にお湯を浴びせた。たちまち周囲は湯気で白く煙り始める。

温かい——たったそれだけのことが、とてつもなく幸せに感じられた。

湯気でシャワー室全体が少しずつ暖まっていく。このままお湯を出しっ放しにしておけば、寒さで凍えて朝を待つという事態は避けられそうだ。

わたしはベッドに戻り、仰向(あおむ)けになる。無意識のうちに枕を動かそうとして、それができないことに気づいた。枕はシーツと一体になっていて、持ち上げることもできない。ここではあらゆるものが固定されている。

毛布も引き剥がせないように、ベッド本体に両サイドと足側の辺が鋲で打ちつけられている。寝る時には、開口部から身体を潜らせていく必要がある。寝袋みたいなものと考えれば、それほど不便ではない。

風が唸り声を上げている。その音は次第に、わたしを呼ぶ声に変わっていく。

悲鳴にも似た、助けを求める声。

自然と涙があふれてくる。気づけば寝ている間に泣いていることがよくあった。そうなったのはあの日からだ。妹の繭が何処かに連れ去られた日。

妹はたぶん、拉致(らち)された車の中から、わたしに助けを求めていたんだと思う。犯人に殴られて、朦朧とする意識の中、わたしは確かにその声を聞いたんだと思う。

ぼろぼろと自然に涙が零れる。

わたしは決断を迫られていた。

ここで決断しなければ、何もかも失うことはわかっている。

涙を拭(ぬぐ)って、立ち上がる。

迷っている時間はなかった。

やらなきゃ。

わたしがすべきことは一つ。

この刃物で刺し殺す。

躊躇(ちゅうちょ)はなかった。

そして——わたしは人を刺した。

その生々しい感触は、想像の産物なんかじゃない。現実だった。わたしは刺した。わたしは人を刺した。わたしは人を刺してしまったのだ！

何をやっているんだろう？

どうしてわたしはこんなことを？

手についた血を見下ろす。紛れもない、人の血だった。わたしがやったのだ。

これは夢？

血の臭い。

相手の身体に突き刺さったままの刃物。

震えるわたしの手。

それは紛れもなく現実だった。

夢ならよかったのに。

むしろ、これから始まるのが、悪夢なのだ——

第三章
果てしない白

1

『ホール開放時刻となりました。みなさま、おはようございます』

午前七時。

三度の機械音声のあと、部屋の扉のロックが外れた。それと同時に、わたしはホールに飛び出した。

まるでタイミングを計ったかのように、すぐ隣の部屋から霧切が出てくる。

わたしたちは互いの顔を見るなり駆け寄って、抱き合った。霧切の身体はひどく冷たくて、まだ夜をそのまま引きずっているみたいだった。顔色はいつものように優れず、目の下には濃いクマが浮いている。

「よく眠れた、って顔じゃなさそうだね」

「結お姉さまは……いい匂いがする。シャンプーしたの？」

「ああ、うん。せめてドライヤーくらい用意しといてほしかったよ」

一夜明けて、ホールは少し様子が変わっていた。壁や床、天井に至るまで、うっすらと霜に覆われている。わたしたちが館に侵入したことで、湿度に変化が生じたせいかもしれない。一面、真っ白な氷の世界になっていた。

「うう、寒い。客室のあったかさに慣れちゃったら、ホールが恐ろしいほど寒いね」

キャビネットの温度計を確認すると、昨日と変わらずマイナス十度を指していた。やはり温度は一定に保たれているようだ。

問題の氷柱も全体が霜に覆われて、透明度は失われていた。わたしたちが時間をかけて掘り進めた穴は、こころなしか元に戻っているようにも見える。

「この氷の塊を見ると……うんざりするよ」

「銃撃戦なんかよりはずっとましだわ」

霧切は肩を竦める。

わたしたちに続いて部屋から出てきたのは、夕覇院だった。彼は派手なコートをはためかせながら、例の額縁を真っ直ぐわたしたちの方にかざす。

「おはよう、諸君。早速だが、氷の柱を攻略する方法を思いついた」

「へえ……そうですか……」

半信半疑で応じる。

「いやいや、一人でも可能なんだが、みんなで協力した方が効率よくてね。おそらくこれが、組織側の想定している模範解答だと思う。どうだね？　私の案に乗ってみるかね？」

「その場合、あの箱は誰のものになるんですか？」

「それはもちろん、私だろう。私が一番に思いついたアイディアだからな」
「それじゃあ、わたしたちはタダ働きさせられるだけじゃないですか」
「そんなことはない。私が遺産の継承に成功したあかつきには、君たちを探偵王の秘書にしてやろう」
「いえ結構です」わたしは即答する。「というか……探偵王ってなんなんですか」
「すべての探偵を統べる存在、それが探偵王だ。新仙帝は、それにもっとも近い男だった。残念ながら志半ばで散ったようだがね！」
「まさか本気で新仙帝二世になろうとしているんですか？」
「いや、探偵として彼の美学に賛同すべき点はほとんどない。私が彼に見出したのは、アーティストとしてのセンスだ。見てみたまえ、この異様な館を。他にも彼の作品を見たことがあるかね？　屋敷の建築美とトリックの機能美が二重螺旋のごとく絡み合って築かれた芸術作品だ！」夕覇院は興奮したように、あちこちに額縁を掲げながら云う。「だが彼はその溢れるセンスの使い道を間違えた。彼は王の器ではなかったのだよ。犯罪被害者救済委員会？　愚の骨頂、究極の駄作だ。器を持たない庶民が、届かぬ雲に絵空事を描いてしまったのだろう。しかし！　私ならば、彼の遺した芸術作品の数々を、有意義に扱いこなすことができる。これらの建物は、犯罪者のためではなく、探偵のためにこそあるべきだ。私は彼の遺した財産と建築物を、探偵組織の礎として利用する。そしてこのユーハインが、世界の求める探偵王国を築き上げるのだ！」
　夕覇院は芝居がかった身振り手振りで熱弁を振るう。ちょっとまともとは思えない。けれど本心を見せているようにも見えなかった。
「私の思い描く未来へ、共に歩むなら今だぞ。さあ、どうするかね？」
　夕覇院がわたしたちに手を伸ばす。
「箱を取り出す方法なら、私も考えたわ」
　その手を振り払うように、霧切が背を向けて云った。
「ほほう……ではその方法とやらを聞かせてもらおうか」
「霧切ちゃん、云ったらダメだよ」
「ええ」
　霧切が口をつぐむと、夕覇院は悔しそうな顔をした。実は攻略法なんて思いついてすらいなかったりして……？
「とりあえず雪村さんが起きてくるのを待とうか」
　わたしは寒さを紛らわせるために、その場で足踏みする。それでふと、気づいた。絨毯にうっすらとわたしの足跡が残されている。霜が降りたことで、絨毯が小さな雪原になっているのだ。

周囲を見ると、霧切や夕覇院の足跡も残されていた。一方で、雪村と門美の部屋の周りには、足跡はない。その代わり、床を這う鎖が動かされたような痕跡が残されていた。それも当然で、片方はわたしの右腕の手錠と繋がっている。わたしが動けば、少なからず鎖も動く。

それから数分が過ぎた。

寒さもあって、そのまま待ち続けるのが苦痛になってきた。わたしはついに焦れて、雪村の部屋の前まで移動した。

「起こしても怒られないよね？」

「ええ」霧切が両腕を抱くようにして肯く。「それより嫌な予感がするわ」

その言葉に、空気が張り詰める。

わたしは扉をノックした。

しかし返事はない。

「雪村さん？　開けますよ！」

扉に鍵はかかっていない。

押すと、簡単に開いた。

雪村はベッドの中にいた。胸元まで毛布に入って寝ている。足はこちらを向いていて、頭は向こう側。少し横を向くような形で、目を閉じて——その顔つきだけ見れば、すこやかに眠っているようにしか見えない。

けれど彼女が死んでいるのは、ひと目でわかった。

彼女の右肩辺りから、まるで角のように、異物が生えていた。ナイフだ。身体から突き出ている部分だけを見ると、せいぜい十五センチ程度で、刃物としてはそれほど大きくない。

わたしと夕覇院が戸口で絶句する中、霧切は用心深く雪村に近づいて、首筋に指を当てた。

「亡くなっているわ。もう冷たい」

もう冷たい——

その言葉が、わたしの胸に突き刺さり、わたしの心を凍えさせる。

「そんな……雪村さんが……」

わたしはそう呟くので精一杯だった。

「自殺か？」

夕覇院が尋ねる。

「いいえ。もし自殺なら、ナイフを刺した腕が毛布の外に出ていなければおかしい。でも両腕ともしっかりと毛布の中に入っている」霧切が云った。「それに自殺するのに肩を刺すというのは不自然ね。もっと致

命的な場所を――」
「あらぁ、何？　もしかして屍体？」
　突然、わたしたちの背後から声がする。
　門美だった。
「化粧してたら遅くなったわ。で、死んだのは生意気なシンママ？　お気の毒さま。残された子供たちはどうなってしまうのかしら」
　門美はふざけた口調で云いながら、部屋に入っていく。わたしは通り過ぎていく彼を横目で睨みつけた。彼は高らかに笑ってそれをいなす。
「自殺ではなさそうね。ナイフは数センチしか刺さってないし、出血もそれほど多くない。これで死ぬってことは……死因は別にあるんじゃないかしら。かといって顔面にうっ血したような兆候は見られないし、抵抗して暴れた様子もない……ってことは、毒物？」
　門美は手際よく屍体を検（あらた）めていく。さすが、とは云いたくないけれど、殺人事件専門の『９』ナンバーだけはある。
「ナイフに毒物が塗られていた可能性が高いわ」
　霧切はポケットから黒い紙切れを取り出して、門美に見せた。『黒の挑戦』の挑戦状だ。門美は腕組みして、それを覗き込む。
「カリブドトキシン……サソリ毒か。ブギーなもん用意してくれたわね」門美はそう云って窓に近づき、カーテンを開ける。「窓の鍵は閉まってる。そっちは？」
　霧切が反対側の窓のカーテンを開けた。そちらもやはり鍵はかかったまま。二等辺三角形の両辺とも、施錠されていたことになる。
「雪の上に足跡はないわ」
　霧切は外を眺めて云った。
「こっちもよ」
　門美が云う。
「なるほど、密室殺人というわけか」夕覇院は室内には入らず、戸口に立ったまま云った。「窓からの出入りはなし。扉も夜十時から朝七時までは、ロックがかかって開かなかった。何者もこの部屋に侵入することはできなかったはずだ」
「うーん……それはどうかしらね」門美が腕組みして云う。「そもそもこれは新仙帝の仕組んだゲームなのよ。ゲームの挑戦者である犯人だけが、特権的にマスターキーの使用を許されていたとしても、なんら不思議じゃないでしょ？　だから犯人だけは密室を簡単に出入りできたのよ」

「いや、それはありえんな。新仙帝の美的センスに照らし合わせて考えると、そのやり方はフェアとは云えない」
　夕覇院が反論する。
「うっせーわよ、おっさん。死んだ奴の作ったルールに、今さらなんの意味があんのよ」
「わたしは夕覇院さんの意見に賛成です」思わず口を挟む。「『マスターキーで密室を開けて殺しました』では、探偵への挑戦――命がけの謎にはなりません。この殺人に組織が絡んでいるのであればなおさら、謎解きゲームとして、なんらかの解明可能なトリックが用いられたと考えるべきだと思います」
　かつて龍造寺月下も云っていた。
『「黒の挑戦」はあくまでフェアなルールのもとで行なわれる。我輩が新仙帝に見出した光は、そのフェアな精神性だ』――
「はんっ、馬鹿みたい。そもそもフェアなトリックなんて存在すんのかよ。二人とも、まるで組織の味方ね。殺人犯を擁護してるみたいじゃない」
「そ、そんなことは……」
「仮にトリックが使われていたとして、だから何？　この女がどうやって殺されたのか、アンタたちと議論しなくちゃなんないの？」
「探偵ならそれが当然じゃないですか！」
　わたしは少しムキになって云う。
　けれど門美は鼻で笑うだけだった。
「お前はこの女が殺されるまで、何もできなかった。その時点で探偵を語る資格なんてないね」
　違う。
　心ではそう思っていても、反論する言葉が見つからなかった。
「犯人がマスターキーで扉を開けて侵入した、という可能性はゼロよ」
　それまで黙っていた霧切が口を開く。
　わたしたちは虚を衝(つ)かれたように、一瞬黙り込んで、小さな探偵を見つめた。
「ああん？　どうしてそう云い切れるのよ？」
　門美が眉間に皺を寄せて、霧切に詰め寄る。
「ホールの絨毯に霜が降りたことで、部屋を出入りすれば足跡が残る状況だった。けれど私たちがこの部屋に入るまで、扉の前に足跡はなかった。つまり犯人がマスターキーを持っているかどうかにかかわらず、扉から出入りした者はいなかった、と云えるはずよ」
「ははっ、残念だけど、その理屈を呑むわけにはいかないわね。だって絨毯の霜がいつできたのかなん

て、アンタにはわかんないでしょ？　もしかしたら霜が降りる前に犯行が行なわれたかもしれない。あるいは霜が降りたあとだったとしても、犯行後に再び霜が降りて、犯人の足跡を覆い隠したかもしれない。そうでしょ？」
　確かに門美の云う通りだった。何時頃に霜が現れ始めて、何時頃に一面覆われたのか、確認することはできない。よく雪上の足跡の問題では、雪が何時から何時までどれくらい降っていたのかが重要な要素となるけれど、ホールの霜の状況なんて明確にわかるはずもない。
「そうね。霜の発生時刻を厳密に特定することはできないわ」
　霧切があっさり認める。
「ほーらね。しゃしゃってんじゃねえよ、ガキが。同じ『９』ナンバーでも、ランクの序列は明白ね。わかったら二度とアタシに盾突くんじゃないよ」
「──それでも私は『犯人は扉から出入りしていない』と断言できるわ」
　霧切はめげずに門美に立ち向かっていく。
　門美はいよいよ霧切の胸倉を摑み上げた。
　わたしは慌てて二人の間に入る。合計六本の鎖が交錯し、今にもこんがらがってしまいそうだった。
「ふん、いいわ。だったら云ってごらんよ。どうして『犯人は扉から出入りしていない』のか」
「答えはシンプルよ。何故なら──私が一晩中見ていた、から」
　霧切の答えに、門美はまるで麻痺したかのように、しばらく沈黙を続けた。
「一晩中見てたって……何処から？　どうやって？」
　門美に代わって、わたしが尋ねる。
「自分の部屋からホールを覗いていただけよ。犯行現場であるこの部屋はちょうど斜向かいにある。もし誰かが出入りしていたら見逃しようがないわ」
「覗くって云っても、どうやって？　扉には隙間なんてないよ」
「手錠の鎖を通す穴が開いているでしょう」霧切は扉を指差して云う。「鎖という物の構造上、いくらぴったりの穴を作っても、どうしても隙間が生じるようになっているわ。私はその隙間から、ホールを覗いていたのよ。ちょうど鍵穴から室内を覗くみたいに」
「で、でも……一晩中？　ずっと？」
「ええ。殺人犯に挑戦状を叩きつけられているのだから、それくらいして当然よ。もし不審な動きをする人物を見つけたら、犯人として告発する時に、決め手になるかもしれないものね。むしろ……その程度のことしかできなかったのが悔やまれるわ。結果的に被害者を出してしまった」
　霧切は残念そうにうつむく。

誰が彼女を責めることができるだろう。彼女は夜の間ずっと、孤独に戦いを続けていたのだ。きっと顔色が優れないのもそのせいだろう。彼女は身を挺して事件と向き合っている。

「どうせハッタリよ」門美が吐き捨てるように云う。「一晩中、その小さな穴からホールを覗いてたって云うの？　信じられないわね。だって九時間もよ？」

その言葉に対し、霧切はただ肯くだけだった。

門美は舌打ちすると、それ以上反論することを諦めたのか、わたしたちから離れていった。

「それにしても――」夕覇院が部屋を見回しながら云う。「扉から誰も出入りしていないのだとしたら、犯人はどうやってこの部屋に侵入し、何処から出ていったんだ？」

「窓からに決まってるでしょ」

門美が苛々したように云う。

「しかし窓の鍵は内側から施錠されているじゃないか」

「じゃあ結論は一つね。犯人はまだこの部屋の中にいる、ってことじゃない？」

投げやりな口調。

けれどそれは意外な答えだった。わたしたち以外の第三者――外部犯の可能性を考えれば、あり得ないことではない。

周囲を見回す。クローゼットの中、ベッドの下、シャワー室……犯人が隠れられそうな場所は幾つかある。

「まさかそんなことあるはず――」

「いや、ないとは云えないぞ」夕覇院が急に緊張した面持ちで云った。「我々と同じように、新仙帝の遺産を狙ってやってきた同業者がいてもおかしくない。その招かれざる客は、正攻法では建物の中に入ることができないと知り、無理やりその窓から押し入ったんだ。そして雪村氏を殺害し、今も息を潜めて我々を見ている。たとえば――ここだ！」

夕覇院はクローゼットの戸を開けた。

けれど中は空っぽだった。誰もいない。

「ここか？」

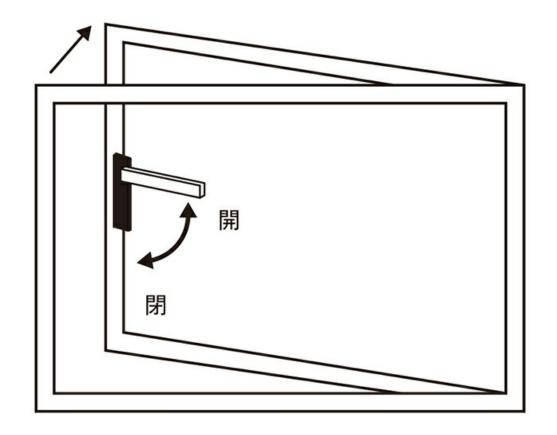
床に這いつくばり、ベッドの下を覗く。

そこにも誰もいなかった。

その後、わたしたちは一通り室内を調べて回った。けれどシャワー室にも、ベッドの中にも、そしてもちろん天体望遠鏡の中にも、誰も潜んではいなかった。

「犯人がいない――こんなことあり得るのか？」

夕覇院は動揺した様子で云う。
「そもそも窓の外に足跡がない以上、第三者が窓から侵入したという可能性はないのでは？」
　わたしは云った。
「どうかしらね」門美は含みのある笑みを浮かべて云う。「この風の強さだと、すぐさま足跡が掻き消されても不思議じゃない」
「そうですね……確かに昨夜はひどい地吹雪で、少し先も見えないくらいでした」
「でしょうね」
　門美はそっけなく云って、入り口近くへ移動する。彼はそこに落ちていたものを拾い上げた。ミネラルウォーターのペットボトルだ。中身は半分ほど入っていて、きちんと蓋がされている。
　わたしもさっきからそれが気になっていた。部屋に入って左手すぐ、壁に寄り添うようにそれは転がっていた。ただのゴミかと最初は思ったけれど……
「それがどうかしたかね？」
　夕覇院が尋ねる。
「このペットボトル、アンタたちが入った時から、そこに転がってたの？」
「ああ、間違いない」
　それを聞いて門美はほくそ笑む。
「ははーん、なるほどねえ！　犯人わかっちゃった。ああっ、気持ちいい！　アタシって、この瞬間のために探偵やってるようなものよね」
「犯人が……わかった？」
　わたしは驚いて首を傾げる。
「それじゃ早速、告発タイムといこうかしら。せっかちと思われちゃうかもしれないけど、氷の柱もどうにかしないといけないし、早めに済ませておくべきよね」
「ちょっと、霧切ちゃん。あの人、あんなこと云ってるけど……」わたしは霧切に耳打ちする。「どうなの？　霧切ちゃんはまだ犯人わかってないの？」
「ええ、まだ」
「そ、そんなあ……」
「せっかくだからあの人の推理を聞いてみましょう」
　霧切は表情一つ変えずに云う。特に焦っている様子はない。
「こそこそ話は終わった？」門美はわたしたちを指差して云う。「これから大人が本物の推理ってやつを見せてあげるから、ガキは少し黙ってな」

わたしは仕方なく口をつぐむ。
「それじゃ早速、解決編を始めるけどいい？」
　特に誰も返事をしなかった。
　被害者の屍体が横たわる部屋で行なわれる推理劇。そんな状況に慣れきってしまっている自分が、少し怖くなる。
「アタシが注目したのは窓の鍵よ」
　門美は芝居がかった大股歩きで窓へ近づく。さっきまで謎解きを否定するようなことを云っておきながら、今はまるでそれを楽しんでいるかのような態度だ。それも『９』ナンバーの性分だろうか。
「この大きな窓。畳二畳分はあるかしら。鍵は部屋の奥側にあって、ハンドルを操作して半月型の錠を引っかけるタイプね。施錠時には、ハンドルは垂直になってる。開ける時はハンドルを水平の位置に動かす。時計の針にたとえると、六時が施錠時で、三時が開錠時ね」

窓の鍵

門美は部屋の右奥にある窓で説明しているが、反対の左奥の窓は、ちょうど二等辺三角形を線対称にしたように、左右反転の状態になる。つまり施錠時のハンドルが六時なのはそのままだけど、九時の位置が開錠時となる。
「試しに開けてみると……」門美はそう云って窓を開ける。「窓本体は横にスライドするんじゃなくて、扉のように一か所を支点にして、押すと開くようになってる。全開にすれば、人が充分に出入りできるだけの隙間ができるわ」
「窓の構造など、見ればわかる。そんなに詳しい説明が必要かね？」
　夕覇院が少し呆れ気味に口を挟む。
　すると門美は手に持っていたペットボトルを夕覇院に向かって全力投球した。水が少し入っていたこともあって、なかなかの勢いで夕覇院の額に当たった。
「アタシは解説中に余計なことを云われるのが大嫌いなのよ！　わかった？　わかったらそのペットボトルを早く返しなさいよ。大事な証拠なの！」
　大事なものなら投げなければいいのに……と思ったけれど、口には出さなかった。次は何が飛んでくるかわからない。
　夕覇院は額を撫でながら、ペットボトルを拾って門美に投げ返した。
「アタシはアンタみたいな馬鹿にもわかるように丁寧に説明してやってんの。いいから黙って聞いてな」門美はそう云って窓を閉め直す。「で、屍体が発見された時、窓は両方とも施錠されていた。これはさっき確認した通り。間違いないわね」
　わたしは肯く。
「犯人が扉から出入りした可能性は低い。ってことは、窓から出入りしたとしか考えられない。では犯人はいかにして、密室殺人を成功させたのか。その謎を解くカギはこれよ」
　門美はペットボトルを回転させながら宙に放り、キャッチする。ごく普通のペットボトルだ。あれがどうして密室のカギになるのだろう。
「順番に説明するわ」門美はベッドに腰かけると、もったいぶるように足を組んだ。「犯人は夜中、闇と雪に紛れて、外からこの部屋に近づいた。もちろんその時点では、窓に鍵がかかっていて、中には入れない。そこで犯人は、外から窓を叩き、室内にいるこの女を呼ぶ」
　門美は親指で、ベッドに眠る雪村を指差す。
　彼女は口を閉ざしたまま何も語らない。もう永遠に。
「いきなり窓の外におかしな奴が現れて、最初はびっくりしただろうね。だけど結局、この女はそいつを中に入れてしまう」

雪村が自ら犯人を招き入れた？
　そんなことあり得るのだろうか。
「それから犯人とこの女との間で、どんなやり取りがあったか知らないけど、これが『黒の挑戦』だって云うのなら、犯人は何かの事件で女に恨みを抱いていたんじゃない？　ともかくなんやかんやあって、犯人はブスリと女を刺した」
　門美は雪村にナイフを突き立てるような仕草をしてみせた。実際のナイフは、まだそこに生々しく突き刺さったままだ。
「さて、次にいよいよ密室からの脱出ね」門美はらんらんと目を輝かせながら云う。「まずはさっき説明した窓のハンドルを、もう一度よく見てもらおうかしら」
　門美はベッドから立ち上がって、再び窓の前に立ち、クレセント錠のハンドルを握る。
「窓を開ける時は、ハンドルを水平になるまで動かして、押し開ける」門美は説明通りに窓を開ける。
「この時、アタシがハンドルから手を離したら、どうなるかしら？」
　門美は実際にそれをやってみた。
　すると支えを失ったハンドルは、自重で垂直に戻った。三時から六時の位置へ。
「ハンドルの軸が緩いのね。だから手で押さえてないと勝手に元に戻る」
「それはオートロックというやつなのでは？」
　夕覇院が云う。
「残念、もしそうなら最初から密室なんてなかったと云えるんだけど。このハンドルは、窓が開いてようが閉まってようが、手を離したら勝手に戻ってしまう。だから、たとえば犯人が外に出て、このまま窓を閉めようとすると、錠の部分が引っかかっちゃって閉められない」
　オートロックなら、窓を閉めた時にだけ自動的にハンドルが戻る仕様でなければならない。単なる不具合でこうなっているのか、それとも元から緩い仕様なのか……
「でもこの仕組みがわかれば、もう密室はできたも同然ね。要するに、ハンドルが戻らないように、一度固定してしまえばいい。そこで犯人が目をつけたのが、このペットボトルというわけ」
　すると門美は、ペットボトルをハンドルに噛ませた。そうすることによって、ハンドルは水平を保ったまま固定される。
「もうおわかりね。犯人はペットボトルを使って簡易のオートロックを作ったのよ。たとえばこの状態で、窓を強く閉めると！」
　門美は勢いをつけて窓を閉めた。
　その衝撃によって、噛ませていたペットボトルがはずれて、床に落ちる。

そうして支えを失ったハンドルは垂直になり、鍵がかかった状態になった。
「これで密室の完成！」
門美は自ら拍手しながら云った。
窓の下には、ペットボトルが転がっている。
「あの……わたしたちが屍体を発見した時、ペットボトルは窓の下ではなく、部屋の入り口近くに落ちてましたけど……」
わたしは恐る恐る意見する。また何かが飛んでくるかもと思いつつも、云わずにはいられなかった。
「ころころと転がって、そこまで移動したんでしょ。今回はたまたま、転がらなかっただけよ」
たまたま？
窓の鍵がある位置から、入り口までは、六メートル近くある。そこから落下しただけのペットボトルが、それだけの距離を転がって移動するだろうか……
「ともかくこれで、犯人が絞り込めたわね」
「えっ？」
「第一に、犯人は外部犯ではなく、内部犯――つまりこの中にいる」
「ど、どうしてそんなことが云えるんですか？」
「当然のロジックよ」門美は得意そうに続ける。「いくらこの女が馬鹿でも、知らない人間を部屋に招き入れたりはしないでしょ。つまり犯人は知人。じゃあ昔からの知人で、アタシたちの知らない第三者が訪ねてきたのか？　もしそうなら、そいつは夜更けに吹雪の吹き荒れる森の中を歩いてやってきたことになる。それはあり得ないわ」
「確かに……」
「ってことで、犯人の第一の条件は、内部犯であるということ。そして第二の条件は――これよ」
門美は自分の腕を掲げて、手首を振ってみせる。
手錠の鎖がじゃらじゃらと音を立てた。
「手錠？」
「そう！　アタシたちは全員、鎖で繋がれている。これは犯人も例外じゃないと思うわ。たとえばもし犯人だけ手錠を外せる特権があるなら、それ以前にマスターキーを使っていてもおかしくないものね。けれど犯人は扉から出入りせず、わざわざ窓を出入り口に使ってる。ってことは、やっぱり犯人特権はないという前提で考えていいわね。つまり犯人も鎖で繋がれたままで――」
「待ちたまえ。霧切少女が一晩中ホールを見張っていたというじゃないか。犯人は彼女に目撃されるのを避けるため、その特権とやらをあえて行使しなかった、とも考えられる」

夕覇院が云う。
「馬鹿ね。ガキが一晩中見張ってるなんて、普通は想定しないでしょ。いくら用心深くてもね」
「むむ……確かに」
「話を戻すわ。犯人もまた、アタシたち同様、鎖で繋がれた状態だった。そこで犯人の第二の条件。それは——犯行現場から鎖の届く範囲にいる人物、ってこと。たとえば窓から外に出て、犯行現場に近づくには、かなりの距離を歩かなければならないわ。この時点で、部屋が犯行現場から離れている二人は除外できる。逆に云うと、犯人は犯行現場の両隣の人物に絞られる」
「両隣って……」
　門美と——わたしだ。
「これで答えが出たわね」門美はわたしを指差した。「犯人はアンタよ」
　一瞬、時が止まったような静寂のあと、わたしが感じたのは、全身に突き刺さるような視線だった。わたしを犯人扱いする門美の目、驚きと納得の入り混じったような夕覇院の目、そして感情を見せずにただわたしを見つめる霧切の目。
「ちょ、ちょっと待ってください。どうしてわたしなんですか」慌てて抗議する。「確かに雪村さんとの位置関係から考えて、霧切ちゃんと夕覇院さんが犯行現場に行けないというのは理解できます。けれどわたしに犯行が可能なら、あなたにだって可能じゃないですか。門美さん！」
「はあ？　アタシは自分が犯人じゃないってことはわかりきってる。だからアンタが犯人」
「そんなの認められません！　あなたが犯人ではないということを、論理的に証明してください」
「いいわよ」門美はにやりと笑う。「そもそも被害者の女は、自ら犯人を部屋に招き入れている——そうだったわね？　じゃあ、よく考えてみな。この女がアタシを部屋に入れたと思う？」
「う、うう——」
　反論の余地はなかった。
　雪村が門美を部屋に入れるはずがない。ましてや夜中だ。しかも外は吹雪。そんな中、突然窓の外に門美が現れたとしたら……恐怖以外の何ものでもないだろう。警戒こそすれ、招き入れるなんてことは絶対にあり得ない。
「決まったわね。こいつが犯人よ」門美は人差し指で突き刺すように、わたしを示す。「死んだ女とも仲良くしてたみたいだし、窓越しに哀れっぽい台詞の一つでも呟けば、中に入れてくれたんじゃないかしらね」
「ち、違います！　わたしは犯人ではありません！」
「犯人じゃないって云うのなら、論理的に証明してみせな」

門美は嘲笑う。

まるで呪いのように、さっきわたしの放った言葉が返ってくる。

犯人ではないという証明——

何か云わないと。

何か、なにか——

このままだと本当に犯人にされてしまう。

「そ、そうだ、足跡！」わたしはとっさに思いついて云った。「窓の外の雪には、足跡なんか一つもないじゃないですか。もしわたしが外を移動したというのなら、足跡が残されているはずで……」

「昨日の夜はひどい地吹雪だった、って云ったのはアンタ自身よ。風と雪で、足跡は掻き消されたのよ。え？　何、アタシたちはすでにそういう前提で話をしていたんだけど、もしかしてアンタ、そんなことが証明になるとでも思ったの？」

門美はイヤミたっぷりに云った。

ダメだ——反論しようがない！

わたしは助けを求めるように、霧切の方を向いた。

霧切は肩を竦めて、小さなため息を零す。

「結お姉さまは犯人ではないわ」

霧切は云った。

「き、霧切ちゃん！」

「へえ、そう。アンタのお姉さまが犯人じゃないって、証明できるの？」

「ええ」霧切はポケットからメジャーを取り出した。「これでね」

「……何それ？」

「単純な計算の問題よ。さっき実際に測ってみたけれど、手錠の鎖はそれぞれ二十メートル。結論から云うと、この長さでは、結お姉さまは犯行現場までたどり着けない」

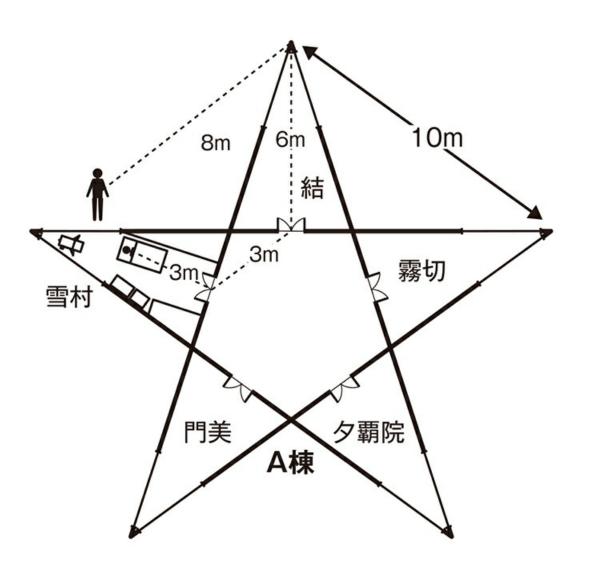
「はあ？　犯行現場はすぐ隣の部屋よ？　窓から出ればすぐじゃない。二十メートルもあれば足りるでしょうが」

「いいえ、足りないわ」

霧切はベッドに近づくと、毛布の中にしまわれている雪村の左腕を引っ張り出した。手錠から伸びる鎖の一部が、音を立てて床に落ちる。その鎖は、二十メートルを経て、わたしの右手の手錠に繋がっている。

「結お姉さまと被害者は、この鎖を共有している」霧切は鎖を摑み上げて云った。「では試しに、被害

者の左腕から、この部屋の入り口に至るまで、鎖が何メートルあるか測ってみるわ」
　霧切はメジャーを伸ばして、手際よく鎖の長さを測っていく。
「約三メートル。わかりやすくするために、細かい数字は省いていくわ」
「残り十七メートルもあるわよ」

10m
8m
6m
結
3m
3m
霧切
雪村
門美
夕覇院
A棟

門美は腰に手を当てて、うんざりした様子で云う。
「ええ。ちなみに中央のホールは、一辺が四メートルの正五角形になっているわ。これだけわかれば、計算上、結お姉さまには犯行が不可能だということは明白よ」
「なるほど……確かに、間違いない」
　夕覇院は納得したように云った。建築にうるさそうな彼には、図面上のおおよその距離感が掴めたのかもしれない。
「なんなのよ、どういうこと？」
　門美は首を傾げている。
「さっき測った通り、室内にある鎖の長さが三メートル。それからホールに出た鎖が、隣の結お姉さまの部屋に至るまでの長さは、最短で三メートル。これはぴんと張り詰めた時の長さ。そして結お姉さまの部屋において、入り口から窓の出入り口まで、六メートル。ここまでで合計十二メートル」
「残り八メートル……それくらいあれば、外に出て隣の部屋まで移動することもできるでしょ？」
「いいえ。この星型の建物において、隣り合う三角形の頂点同士の距離は、およそ十メートル。残り八メートルの鎖では、二メートルも足りない。大雑把(おおざっぱ)に見積もっても、結お姉さまは隣の部屋の窓にすらたどり着けないのよ。そこからさらに被害者にナイフを突き立てようとすれば、もう数メートル必要だわ」
「はあ？　ホントにその計算は合ってんの？」
　門美は答えを求めるように、夕覇院の方を向く。
　夕覇院は黙って肯いた。
「じゃあこのペットボトルは何よ！」
「ただの飲み残しでは？」
　夕覇院は云った。
「それが窓の鍵を施錠するのに使われた可能性までは否定できないわ」
　霧切はゆるゆると首を振る。
「そうだったとしても……じゃあ誰が使ったのよ？　誰が密室にしたって云うのよ！　アンタのお姉さまじゃないなら、もちろんアタシでもないわよ。アタシだって条件は同じ。鎖が届かないものね」
「だとすると……我々の中に犯人はいない、という結論になるな」
　夕覇院は難しい顔をして腕組みする。
「まさか……外部犯？」
　門美は警戒するように声を潜めて云った。
「競合相手か――いよいよ第三者の存在を疑わねばなるまい。少なくともその人物は、雪村氏と知人

関係にある。しかも夜中に窓から部屋に招き入れられるような間柄だ。君たち、心当たりはないかね？」
　夕覇院がわたしと霧切に尋ねる。
「うーん……」
　雪村の別れた夫が警察関係者だということを思い出したけれど、わたしはあえて口には出さなかった。おそらく事件とは関係ないだろう。
「もしかしたら遺産狙いグループの仲間かもしれないな」夕覇院が云う。「雪村氏は我々の知らないところで、仲間同士連絡をやり取りしながら動いていたのかもしれない」
「この女ならあり得る」門美が同意する。「どうせ遺産の分け前を巡って仲間割れでもしたんでしょ。そんでブスリよ。よくある話ね」
「それはないと思いますけど……」
　わたしは呟く。根拠はない。ただの印象だ。
「冷蔵庫の札束は減ってないわ」霧切が云った。「分け前を巡って仲間割れしたのなら、真っ先に札束を持って逃げそうなものだけど」
「逆に考えな。犯人は札束を持ち出さなかったんじゃなくて、持ち出せなかったのよ」
「どういうことだね？」
　夕覇院が尋ねる。
「犯行は夜中、吹雪いてる中で行なわれたのよ。金を奪ったところで、森の中を逃走するなんて無理。自殺行為よ。そこで犯人は一旦、金を諦めて、潜伏することにした。きっと今も近くに隠れているわ。アタシたちの隙を見て、金を盗んでいくつもりよ」
　わたしははっとして、周囲を見回す。
　急に浮上した『遺産泥棒』の存在に、緊張感が増す。もはや第三者犯人説は濃厚のように思われた。
「身を潜めるとしたら、エントランスのＢ棟が怪しい。あそこなら少なくとも寒さをしのげる」
「それよ！」
「私の部屋の窓からなら、Ｂ棟が見えるはずだ」
「確認するわよ！」
　門美と夕覇院は目の色を変えて部屋を飛び出す。
　わたしと霧切は、雪村の屍体とともに、部屋に取り残された。
「霧切ちゃん……さっきはありがと。冤罪を晴らしてくれて」

「数字的な事実を説明しただけよ」霧切はそっけなく云う。「それより……悔しいわ。また人が殺された。救える命だった」
　霧切は小さな握りこぶしを震わせる。
　わたしは彼女を抱きしめて、その背中をぽんぽんと叩いた。
「わたしは君に救われたよ」
「結お姉さま……」霧切はか細い声で呟いた。「鎖が絡まってしまうわ」
「ああ、ごめん」
　わたしは両腕の手錠に気をつけながら、霧切から身体を離した。
「それにしても……外部犯っていう見方は正しいの？」
「まだ、どちらとも云えないわ」
「そう……じゃあＢ棟に犯人が隠れてるっていうのも、あながち間違ってないかも。前にここで起きた事件も、結局もう一人余分にいたってオチだったしね」
　わたしたちは部屋を出た。霧切はそっと扉を閉じた。まるで眠っている人を起こさないようにするかのように。それは死者に対する彼女なりの礼儀だったのかもしれない。
　わたしはふと、床の跳ね上げ戸の存在を思い出す。
「あっ、そういえばこの地下通路の出入り口って、向こう側からは開くんだよね。もし犯人がＢ棟に隠れているとしたら、ここから侵入してくる可能性もあるんじゃない？」
「どうかしら。私たちが手錠をかけた時点で、部外者が立ち入れないように、ロックされているんじゃないかと思うけれど……」
「でももし、侵入可能だとしたら——」
　そこへ門美と夕覇院が戻ってくる。
「ああ、アンタたちも気づいた？　もしかしたら犯人はすでに、こちら側に侵入してる可能性もあるわ。アタシたちが屍体に気を取られている間にね！」門美は苛立った様子で云う。「もしかしたら、最初からこれが狙いで、あの女を殺したのかもしれない」
「そんなまさか……」
　わたしは愕然として声を漏らす。
「いい？　これから建物の中を徹底的に調べるよ。不届き者をあぶり出して、懲らしめてやろうじゃない」
「まずは金を奪われていないか確認した方がいい」夕覇院が云う。「ちなみに私の金は無事だった」
　それからわたしたちは手分けして、館内を調べて回った。
　以前もこうして、隠れた犯人を捜して、あちこち調べ回った思い出がある。懐かしい思い出だ。今思

い返しても、わたしと霧切はよく互いに傷つけ合わずに生還できたと思う。
　はたして――今回はどうだろう。
　五つの部屋すべてを調べ終えた結果、何処にも犯人は隠れていなかった。冷蔵庫の札束も、一つも減らずにそのままだった。
　だからといって外部犯の可能性が消えたわけではない。むしろ状況的には、その可能性は濃厚なまだ。
　内部の人間、つまりわたしたちには鎖の制約がある。互いに鎖で繋がり合っている以上、雪村を殺害することはできない。
　わたしたちは、外部の人間が地下通路から入ってきたらすぐわかるように、跳ね上げ戸の上に空のペットボトルを置いた。戸が開いたら、これが転がって音が鳴るという寸法だ。
　ぽつんと置かれたペットボトル。
　それがわたしたちのたどり着いた結論を象徴しているのだとしたら、あまりにも雪村の死の重みからかけ離れすぎているように見えて、現実感がまるでなかった。

2

　事件の混乱と犯人捜しで、気づけば正午を過ぎていた。
「ああ……腹減った」門美はホールの片隅に座り込んで、腹をさする。「こんなことになるならバーベキューセットでも持ってくるんだった」
「あの……パンとお菓子くらいならありますけど」
　わたしは云った。できることなら無視したいけど、そこまで鬼にはなれない。
「マジで？　気が利くじゃない」
　わたしと霧切が持ってきた食糧や飲料水をホールで分け合う。残りはそう多くはない。仮に『黒の挑戦』の期限一杯、あと六日間ここに閉じ込められた場合、餓死はしなくとも、そのぎりぎりまで追いつめられるかもしれない。
「もしかして飲み水まで用意してきたの？　アンタたち用心深いわね……」
「苦い経験がありますから」
「アタシ、冷蔵庫の水飲んじゃったけど、やっぱりあれ、やばかった？」
「何か体調に異変がありましたか？」
「今にして思えば、やけに眠かったのよね。ぶっちゃけ、例の十時のアナウンス？　あれ聞いている時点

で、ほとんど朦朧としてたし」
「そうだったんですか……」
「睡眠薬ね。昨夜、あなたが殺されずに済んだのは、運がよかっただけかもしれない」
　霧切が云った。
「云ってくれるじゃない、ガキが。アンタ、先輩に対するリスペクトってもんはないわけ？」
「ペットボトルの中身は一度捨てて、夜の間にシャワーの水を汲んでおくことね。そうすれば、とりあえず飲み水には困らないわ」
「クソガキ」
　門美は霧切に向かって中指を立てる。
「君たち、あまり悠長にしている暇はないぞ」夕覇院が云った。「姿を見せぬ競合相手に先を越される前に、作業を進めるべきではないかね？」
「何よ、作業って」
　門美はパンを齧りながら立ち上がる。
「君はなんのためにここに来た？　新仙帝の遺産を手に入れるためだろう？」
「んなこと云ったって、どうしようもねえだろうがよ。それとも何か？　金を燃やす決心がついたの？　だったらまずアンタの金を持ってきな」
「いや、それよりも有効な手段を思いついてね」夕覇院は霧切に目配せする。「そろそろ始めようか？」
「そっちはそっちで進めてください」わたしは間に割って入る。「わたしと霧切ちゃんは、遺産には興味がありません。ただ、あの箱を回収しない限り、ここを出られないと思うので……自分たちなりのペースで作業を進めます」
「だったら協力して全員でやるべきじゃない？　アンタたちは早く帰れる、アタシは遺産をゲットする、それでいいでしょ」
「私の立場は？」
　夕覇院がぽつりと云う。
「アタシと殴り合いして、アンタが勝ったら遺産を譲ってやる」
「そういう趣味はないのだが」
「ごちゃごちゃうるせーわね。さっさと箱を回収するわよ。それで、どうやってこの氷をぶち折るわけ？」
「霧切少女、説明してあげたまえ」
「わかったわ」
「ちょっと、霧切ちゃん……」

「この状況を長く続けるべきではないわ。結お姉さま、とりあえず先へ進みましょう。事件の解決はそのあとでもできるから」
「賢明ね」
　門美が両手を広げて云う。
「箱を取り出す方法を説明するわ」霧切が氷柱に近づいて云った。「昔から、氷を切り出すのに使われる道具といえば、ノコギリよ。だから私たちもノコギリを使えばいい」
「ノコギリ……？　そんなの何処にもなかったけど……」わたしは首を傾げる。「云っておくけど、わたしのリュックの中にもないよ？」
「ええ、ノコギリそのものはない。でも、代わりになりそうなものならあるわ」
「ノコギリの代わりになりそうなもの……？」
「今も目の前にあるわ」霧切は片手を上げて、手首を左右に振った。「この鎖よ」
「チェーンソーか！」門美が急に立ち上がって、声を上げた。「クソ、盲点だった」
「チェーンソー……？　何処にそんなものがあるんだね？」
　夕覇院が尋ねる。
「アンタが想像してんのは電動のチェーンソーだろ。そうじゃなくて、アウトドアツールの一種に、ハンド・チェーンソーっていう手動のチェーンソーがあんのよ。細いチェーンとかワイヤーの両端にリングが付いてて、そこに指を引っかけて使うの。チェーンを木材なんかに当てて、擦るように素早く動かすと、摩擦の力で切断できるって代物よ。ワイヤーソーと呼ばれることもあるわ」
　門美が早口で説明する。
「いわゆる糸ノコとは違うのか？」
「全然違う。馬鹿じゃないの？　糸ノコは名前だけ糸っぽいけど、実際は棒状だろうが」
「同じチェーンなら、この手錠の鎖も、ノコギリ代わりになるはずよ」
　霧切が云った。
「つまり……この長い鎖を氷柱に当てて、擦るように押し引きすれば、ノコギリのように切断できる？」
　わたしが尋ねると、霧切は肯いた。
　手錠の鎖を、ノコギリの刃に見立てる——
　普通ではあり得ない発想だ。けれどこの異様なゲームを切り抜けるには、それくらい異様な閃（ひらめ）きが必要なのかもしれない。
「早速やってみよう」
　夕覇院が立ち上がる。

「ちょっと待ってください。夕覇院さんが云っていた『攻略法』も、一応聞いておきたいんですけど……」
「アイディア自体は霧切少女のそれとまったく一緒だ」
「そうですか……」
「じゃあ、ここの鎖を使うわよ」
　門美の右腕と、夕覇院の左手を繋ぐ鎖だ。
　鎖が氷柱に対して水平に当たるように、左右から引っ張り合いながら調節する。片方は門美が、もう片方はわたしが持って立つ。
　あとはこの鎖を、綱引きの要領で引いたり戻したりすれば、氷柱と接している部分に摩擦が生じることになる。
　試しに何度か引いてみると、確かに氷柱が削れている。鎖を引く二人の息を合わせる必要があるけれど、ドライバーによる穴掘りよりは、はるかに効率がよさそうだ。
「なるほどね。この鎖はアタシたちを縛ると同時に、ゲームを攻略するための道具だった、ってわけね」
　門美が鎖を引く手を止めて云った。
「これなら確実に箱までたどり着けそうですね」
　ただし時間はかかるだろう。体力の問題もある。この寒さの中、そう長いこと綱引きしていられない。
「あとで揉めないように云っておくけど、あの箱はアタシがもらうからね」
「待ちたまえ。それは話が――」
　そう云いかけた夕覇院の側頭部に、門美の回し蹴りが入った。一瞬の閃光のようだった。夕覇院はボロ切れと化してその場に横たわる。
「忠告通りホルスターのない方の足にしといてやったよ」
「暴力はやめてください」わたしは抗議する。「遺産を巡って争いになるようであれば、わたしはこれ以上手伝いません」
「何？　アンタも昼寝したい？　別にいいよ。もう一人のガキに手伝わせるから」
「遺産を独り占めする気なんですね」
「アタシは一貫して、そう主張してきたけど？」
「どうしてそこまでして、新仙帝の遺産を手に入れようとするんですか」
「それもすでに云ってあるはずだけど。アタシは世の中を支配したいのよ。今まで散々他人に利用されてきたから、見返してやんのよ。いかにも優等生っぽいアンタらには、他人に支配される人生なんて、思いも寄らないかもしれないけどね。他人の罪を被って刑務所入れられたことある？　アタシは五年入ってた。五年もよ？」

「でも……あなたには『0』ナンバーとして認められるほどの才能があるじゃないですか。それだけの才能がありながら、どうして……」
「何それ、皮肉？　まあね、どうしてアタシに探偵なんかの才能があるのか、それこそ謎ね。だけどこの才能があれば、支配する側に回れるって、ようやく気づいたんだよ。新仙帝という存在を知ってね！」
「あなたも……新仙に人生を狂わされたんですね」
「真実に気づいたと云ってほしいわね。力があるなら、他人を支配してもいいんだって。アタシは新仙帝の遺産を引き継いで、組織を私利私欲のために使わせてもらうわ。ああ、今から楽しみ！」
「残念ですけど、あなたは新仙にはなれない。あの人の透き通るような狂気には、到底及ばない」
「はあ？」
　門美は首を傾げて、わたしの顔を覗き込む。
　まるでわたしの目の中に、新仙帝を探すかのように。
「結お姉さま、もう部屋に戻りましょう」
　霧切がわたしのコートの裾を引っ張る。
「待て待て。交代の時間だよ、ガキ。アタシは部屋で休んでるから、二人で作業進めといて」
　門美はそう云うと、スナック菓子を抱えて、自分の部屋に入ってしまった。
「あいつ……」
「構う必要ないわ。早めに箱を回収して、ここから早く脱出しましょう」
「そうだね」
　わたしと霧切は、自分たちを繋ぐ鎖で、氷柱を削る作業を始めた。
　門美とペアを組んでやった時よりも、はるかにやりやすい。一種の共同作業だから、気の合う相手との方が、呼吸も合うのだろう。不本意ながら、だんだんとこの作業が楽しくなってきた。
「夕覇院さん、大丈夫かな……？　生きてる？」
「息はしているわ」
「それにしても……寒いね……」
「こうして身体を動かしていると身体が温まるわ」
「もうすぐ春だっていうのに」
「桜……見られるかしら」
「好きなの？」
「いいえ、ほとんど見たことがない。海外にいることが多くて」
「じゃあ今年は一緒に見よう」

「一緒に……見られる？」
「見られるよ。君とは海にも一緒に行かないとね。夏祭りで、浴衣も一緒に着て……」
「行く先々で事件が起きなければいいけど」
　霧切は微かに笑みを零して云った。
　それは彼女なりの冗談だったのだろう。ちょっとした季節のイベントごとに、事件に巻き込まれるわたしと霧切ちゃん。そんな日常を想像すると、確かにおかしくて——泣きそうになる。
　わたしたちはそれからしばらく、お手製のハンド・チェーンソーで氷柱を削り続けた。目に見えて成果が出ている。いまや柱の一部が『くの字』形に欠け始めている。
　けれどそこそこ重たい鎖を引っ張り合うのは、かなり体力を消耗する。
「霧切ちゃん、大丈夫？」
「ええ」
　明らかに声に元気がなかった。
　わたしは鎖を動かす手を止める。
「ちょっと休もう」
　霧切は肯き、鎖をその場に置いた。その時ちょうど、夕覇院が目を覚まし、身体を起こした。不思議そうに周囲を見回す。
「何日経った？」
「一時間程度ですよ。大丈夫ですか？」
「あ、ああ……嫌な夢を見た。仕事で失敗して、死にかけた時の記憶が蘇った」
「そのまま寝ていたら凍死していたかもしれませんね」
「そうなる前に起こしてくれて助かったよ」
　起こしてないけど——まあいいか。
「わたしたちは一旦休憩します」
「あ、ああ。私も気分が優れない。少し休むとしよう」
　夕覇院はふらふらと自分の部屋へ向かった。
　わたしと霧切は床に置いてある食糧を拾い集めて、わたしの部屋へ移動した。寒さと重労働のせいか、わたしはくたくただった。
　こんな過酷な状況を六日間も続けるなんて無理だ。なるべく早く決着をつけなければならない。
　けれどわたしは心の何処かで願っていた。
　終わりなんか訪れないことを。

３

　窓の外を見ると、相変わらず雪が吹き荒れていた。仮に手錠から解放されたとしても、この雪の中を歩いて帰るのは危険だろう。いわゆる吹雪の山荘だ。わたしたちは囚われたまま、何処にも行けない。
　霧切は窓のクレセント錠のハンドルを上げたり下げたり、繰り返していた。
「ハンドルが緩いのは、どの部屋も一緒みたいね」
「まだ密室のことを考えていたの？　少しは休んだら？」
　わたしが呆れ気味に云うと、彼女はそれを無視して、突然窓を開けた。
　たちまち雪が吹き込んでくる。
「さ、寒いよ！」
「ここで前に起きた事件、覚えてる？」
「もちろん」
「あの時も、招かれざる客が潜んでいないか、館中を捜し回ったわね。それでホールの天井のドームを開けて、屋根の上に誰かいないか、調べたでしょう」
「ああ、うん」
「あの時みたいに、屋根を調べてみてもらえないかしら。ドームは開かないから、この窓から」
「別にいいけど……できるかな」わたしは窓の縁に足をかける。「もしかして屋根の上に誰か隠れてるとか？」
「一応、確認しておきたいの」
「了解」
　わたしは窓から身体を乗り出し、振り返って頭上を仰ぎ見る。屋根の縁は数十センチ上だ。ジャンプすればなんとか手が届くだろうか。
「気をつけてね」
　霧切の声に背中を押されるようにして、わたしは不安定な体勢のまま跳び上がる。
　縁に手がかかった。そのまま懸垂の要領で身体を持ち上げる。窓のハンドルに足をかけて、ようやく頭が屋根の上に出た。
　客室の屋根は平面で、白く雪が積もっている。視線をホール側に向けると、半球状に盛り上がっている屋根が見えた。
「屋根の上に上れそう？」

霧切が尋ねる。
「上れるけど……特に何もないみたい」
　もちろん隠れている人物もいない。といっても、わたしの視界から見えるのは、今いる部屋の屋根だけだ。
「ありがとう、もういいわ。結お姉さま」
　わたしは窓の縁に下りて、室内に戻った。
　霧切が窓を閉める。
「屋根の上に隠れるのは現実的じゃないな」わたしは濡れた手を払いながら云った。「ホールの屋根は半球状で足場がないし、客室の屋根は隣室から目撃される可能性がある」
　室内の窓からはそれぞれ隣室が見える。雪で視界が悪いため、ぼんやりとした輪郭しか見えないが、それでも屋根の上に人がいれば、はっきりとわかるはずだ。
「屋根の上に寝転んでいれば、姿は見えないと思うけどね。もしかしたら、何処かの屋根に、そうやって隠れてる奴がいたりして？」
「防寒対策をしていたとしても、この雪の中をじっとしているのは大変そうね。仮に、今もそうして隠れている人物がいたとして、その人は次に何をするつもりかしら」
「夜になったらまた、こっそり内部に侵入するつもりじゃない？」
「何処から？」
「窓から――はもう無理か。入れてくれる人がいない。じゃあやっぱりＢ棟から地下通路を抜けて……」
「それなら屋根の上にいる必要はないわね。それこそＢ棟に隠れていればいい」
「あ、そうか」
「そもそも地下通路の跳ね上げ戸が開くかしら。昼間はともかく、夜は確実にロックされているはずよ。何故なら、夜のアナウンスで『ホール閉鎖』と云っているから」
「確かに……まあでも、外部の人間ならそのことを知らない可能性だってあるし、夜になったら入れると思い込んで、待機しているのかも」
「そうね……ないとは云えない」
　霧切はそう呟いて、しばらく考え込むように沈黙した。その凜々しい横顔は、苦悩の表れだ。目の前の『もっともらしい答え』には、明らかに納得していない。
「第三者の外部犯なんていない――そう思ってる？」わたしは水を向けるように話しかける。「もし犯人が外部の人間だったら、『黒の挑戦』っぽくはない感じはする。わたしの印象に過ぎないけど……密室トリックも、窓にペットボトル挟んだだけでしょ？　今までの経験からすると、せいぜい１００万程度じゃな

い？　挑戦状では確か『４億』の値段がついてたよね。どう考えても、価値と価格が釣り合ってないよ」
「そういう考え方もあるわね」霧切はようやく口を開いた。「ペットボトルといえば、結お姉さまもさっき指摘していたけれど、窓の下ではなく部屋の入り口近くに落ちていたというのも不自然ね」
「ああ、うん。いくら筒状だからって、窓のハンドルから落下しただけのペットボトルが、六メートル近くも転がるとは思えないよ」
「もう一つ、不自然な点があるわ」
「え？」
「ペットボトルの中身が減っていたでしょう。あれはどうしてだと思う？」
「うーん……まさか飲んだとか？　でも雪村さんにはちゃんと、霧切ちゃんが警告してたよね」

「あれは飲まない方がいい」霧切が云う。「毒が混入されている可能性が高い」
「考え過ぎじゃない？　飲み水で毒殺なんかしてたら、ゲームとしてはブーイングものでしょ」

「あまり信じてはいないようだったけど……」
「そうね。しかもあの直後、門美さんがペットボトルの水を飲みながら、部屋から出てきたのを覚えてる？　残った水を氷柱にぶちまけて……」
「ああ、あったあった」
「雪村さんはあれを見て、『ペットボトルの水は安全だ』と思ってしまったんじゃないかしら」
「あり得る。雪村さん、結構行動に大胆なところあったし」
「そもそもあの門美さんの行動は、シャワーのお湯をペットボトルに溜めて使うための下準備だったんだと思う。結局、ホールが閉鎖されたため、計画は頓挫したわけだけど」
「わたしも考えたやつだ」
「もし雪村さんがペットボトルの水を飲んでいたのだとしたら、今までに推理してきた事件の様相が少し変わってくるわ」
「えっ？　事件の様相が変わる？」
「雪村さんの屍体が、しっかりとベッドの毛布の中に入っていたでしょう。あれも変だと思わない？　もし犯人が雪村さんに窓を開けてもらって部屋に侵入し、そのあと彼女を殺害したのだとしたら、犯人はわざわざ屍体をベッドに寝かせたことになる。見ての通り、このベッドは毛布をかければ済むようなものではないわ。毛布の端が鋲で打たれているせいで、屍体を寝かせるのには手間がかかる。犯人は何故、殺

害後にそんな手間をかけたのか」
「自殺に見せかけるため……ってわけでもないし……なんでだろう？」
「そもそも前提が間違っているのよ。犯人が雪村さんの屍体を寝かせたんじゃない。雪村さんが寝ているところを、犯人が殺害したのよ」
「ど、どういうこと……？」
「ここまで云えばわかるでしょう。雪村さんは事件当時、ベッドでぐっすりと眠っていた。それはペットボトルの水に混入されていた睡眠薬を飲んだからよ」
「睡眠薬……！　そうか、水を飲んだ門美さんも、異様に眠かったと云っていたけど……そういうことだったのか」
　挑戦状に『気絶薬』と書いてあるそれが、おそらく睡眠薬の一種なのだろう。
「もし睡眠薬で眠り込んでいたのだとしたら、雪村さんが犯人を窓から招き入れたという推理は成り立たない！」
「ええ」霧切は肯く。「でも、だからといって外部犯の可能性は完全には排除できない」
「どうして？　だって犯人は外から入って来られないじゃないか」
「いいえ。たとえば先客がいた可能性――私たちより先に、五人の野心家がすでにここに乗り込んできていたとしたら？　彼らは認証を経て、この本館に移動したけれど、命の危険を感じて、手錠はせずに窓から外へ出て帰っていった。ところがその中の一人だけ、帰らずに館に残った者がいた。彼は後から無謀な五人が来るのを待った。そこへ私たちが現れ、手錠をしたことで、遺産への道が開く」
「そいつがクローゼットにでも隠れてて、夜中に雪村さんを襲ったっていうの？」
「可能性の一つよ」
「それはないと思うけどな。だって、氷の柱を攻略する道具を探すために、一度部屋を探し回ったでしょ。雪村さんだってそうだよ。さすがに人が隠れているのを見落としたとは思えない」
「そうね……さすがに考え過ぎだと思う」霧切は自嘲するように、ふっと口元に笑みを零した。「でも外部犯ではなく、内部犯だと仮定すると、どうしてもこの手錠が枷（かせ）になってしまうのよ」
「文字通りの枷か……」
　わたしは自分の手錠を眺める。何処かに解錠スイッチでも隠されていないかと探したけれど、それらしいものはなかった。
「鎖の長さを測り間違えてる可能性は？」
「ないと思うけど……たぶん」霧切は首を竦める。「もう一度測ってみる？」
「いや、それよりわたしが実際に窓から外に出て、雪村さんの部屋に向かってみるっていうのはどう？　そ

れなら本当の長さがわかるはずだよ」
「その方が確実だけど……危ないわ。もうすでに暗くなってきたし……」
「大丈夫だよ。任しといて。先に進むためには、危険を避けては通れない、でしょ？」
　わたしは早速、窓を開けて身を乗り出す。
　吹雪がたちまちわたしを包み込んだ。おそらく気温自体はホールの方が寒いくらいだけど、雪と風があるせいで、体感温度はかなり低い。
「それじゃ、ぱぱっと行ってみるよ」
「ちょっと待って。今のままだと、せいぜい一、二メートルくらいしか先に行けないわ」
「え？　どうして？」
「私がここにいるせいで、私と繋がっている方の鎖を、六メートル分くらい、余計に使ってしまっているからよ」
「ええと……よくわかんないけど、霧切ちゃんは本来、自分の部屋にいなきゃいけないんだね」
「そういうこと」
「じゃあ部屋で待っててよ。終わったらそっちに行くから」
　霧切は小さく肯いた。
　けれどなかなか行こうとしない。
「心配してくれてんの？　わたしのこと」
「違うわ」即座に否定する。「不安なの。私が」
　彼女は怯えていた。他人に弱みを見せること自体珍しいけれど、はっきりとその気持ちを言葉にすることはめったにない。それでも打ち明けずにいられなかったということは、彼女は今、一人では抱えきれないほどの不安を感じているのだろう。
「君は今回の探偵役だから大丈夫だよ。それでももし、不安な時はわたしの名前を呼んで。必ず助けに行くから。わたしは君のヒーローだからね」
「……ありがとう、結お姉さま」
　霧切はそう云って、気持ちを振り切るように小走りで部屋を出ていった。
　わたしは少し待ってから、雪の中へと踏み出した。
　向かって右側には、近くまで森が迫っていて、不気味な葉擦れの呻（うめ）きが聞こえる。
　左手方向に、雪村の部屋。そのさらに奥、建物の向こう側で地面が途切れ、谷底へと続く崖になっている。
　わたしは薄闇の中を歩き出す。

雪はくるぶしくらいまで。風のせいか、それとも気温が低いせいか、地面の雪はさらさらとしている。風がもっと強まれば、地吹雪となって、再び視界が閉ざされるだろう。
　一歩一歩、踏みしめるように歩みを進める。
　雪村の部屋まであと少し……
　そこで急に両腕が重たくなった。手錠の鎖が張り詰めて、それ以上引っ張っても動きそうにない。
　雪村の部屋の窓までは、あと二、三メートル。けれど、どう頑張ってもそれ以上先には進めない。腕を動かすことすら難しい。
　霧切の見立ては間違っていなかった。
　ふと、風の音に混じって、わたしを呼ぶ声が聞こえたような気がした。
　あれは、妹の声――
　それとも霧切ちゃん？
　わたしは走って引き返す。
　窓から室内に飛び込み、鎖をがちゃがちゃと引き摺(ず)って、ホールに出る。誰もいない。冷気が肌を刺す。
　隣の霧切の部屋へ向かう。
　扉を開けようとすると、ちょうど部屋から霧切が出てきた。
　見たところ無事なようだ。特に慌てている様子もない。
「なんともなかった？」
　わたしは白い息を浅く何度も繰り返しながら尋ねる。
「ええ」霧切は少し驚いた顔で云う。「どうしたの、そんなに慌てて」
「不安だったんだ。わたしが」
　わたしは彼女を抱きしめて云った。例によって、鎖が絡まないように気をつけながら。
　霧切は少しはにかんだようにうつむいて、しばらくわたしの腕の中で黙っていた。
　それからふと、思い出したかのように身体を離して、口を開く。
「実験はどうだったの？」
「ほとんど君の計算通り。どう頑張っても窓までたどり着けない。やっぱりわたしたちが手錠で繋がっている以上、内部犯の可能性は限りなく低いよ」
「不可能犯罪ね。それなら今まで何度も見てきたわ。それに解決もしてきた」霧切はさらりと云う。「鎖を一通り調べてみたけど、特に仕掛けはなさそうだったわ。もちろんすべて材質は一緒。たとえばどれか一つだけゴム製だったとか、そういうトリックではないみたい」

「……ゴム製の鎖か。よくそんなこと思いつくね」
「あらゆる可能性を検討しないと。それより結お姉さま、気になるものを見つけたの」
　霧切はわたしの手を引いて、自分の部屋へと招く。
　入ってすぐのところで振り返り、頭上を指差した。
「入り口の木枠を見て」
　霧切が云っているのは、扉を囲っている木枠の上部分、その底面に当たる場所だ。普段はその下を通り過ぎるだけで、わざわざ仰ぎ見るようなこともない。けれど霧切に指摘されて、あらためてよく見てみると、まるでひび割れのような細い隙間が何本か確認できた。ただし自然にできたひび割れというには、あまりにも直線的で、きっちりと扉と平行に走っている。
「何これ？」
　わたしはこれに似たものをホールで見たことがある。
　氷柱を囲む鉄格子が消えたあと、床に同じような隙間ができていた。鉄格子を上下に稼働させる際に、摩擦が起きないようにするための余白だろう。
　わたしは再び扉の上に見える隙間を覗き込む。
「もしかしてこれも……鉄格子？」
「そうだと思う。シャッターみたいに上部に収納されているんじゃないかしら」
「ちょっと待って。みんなの部屋にもこれと同じものがあるの？」
「ええ。雪村さんの部屋にも、結お姉さまの部屋にもあるのを確認したわ」
「部屋の出入り口に鉄格子って……なんか物騒だな。まるで牢屋みたい。でも、なんのために？　昨日の夜は扉自体にロックがかかって、鉄格子は下りてこなかったけど……」
「私たちを閉じ込める目的で用意されたものではないのかもしれないわ」
「ホールの鉄格子もセキュリティ目的で設置されていたしね」そこでふと、思い至る。「そうか、セキュリティか。ホールの鉄格子みたいに、各部屋の鉄格子も、もともと下ろされていたのかも。それでわたしたちが地下通路の認証を済ました段階で開いたんじゃない？」
「正規の手続きを踏まない侵入者から、遺産を守るため？」
「そういうこと！　なかなか冴(さ)えた推理じゃない？」
「一理あるわね」
　霧切は肯く。
「でもそれがわかったところで、事件の解決にはまったく結びつかないな」
　わたしは疲労からため息を零す。そのままふらふらと霧切の部屋のベッドに座り込んだ。

「今のうちに休んでおくといいわ」
　霧切が云う。
「霧切ちゃんこそ。寝てないんでしょう？」
「平気」霧切はわたしの隣に腰かけた。「張り込みは探偵の基本よ。狙撃訓練のおかげで、何時間だって見張りを続けていられるわ」
「あの壮大な茶番劇も無駄ではなかったか」
　わたしは冗談めかして云う。
「結お姉さま。昨夜は何してたの？」
「え？」その問いに一瞬戸惑う。「何って、ベッドに入ったらわりとすぐ寝ちゃって……」
「眠れた？」
　わたしの目を覗き込むようにして、霧切が尋ねる。
　何故そんなことを訊くのだろう。
「いや……風の音がうるさくて、あまり寝られなかったな……」
「それなら、夜中に何かおかしな物音を聞かなかった？」
「おかしな物音？」
「何かが呻いているような……」
「呻き声？　もしかして雪村さんの？」
「ううん、そういうのじゃなくて、もっと機械みたいな音で——」
　霧切は喋りながら途中で何かに思い当たったように、口を開けたまま固まった。
「どうした？　大丈夫？」
「機械……！　そう、あれは風や獣や人の声なんかじゃなくて……ましてや幽霊でもなくて……機械の音だったんだわ」
「何かわかったの？」
「以前、似た音を聞いたことがある。しかもここ、シリウス天文台で」
「ちょっと、なんの話をしてるのか、わたしにもわかるように説明して」
「昨夜、見張りをしている間に、異様な物音を聞いたの。気にかけなければ、ただの風音と聞き紛うような、低くて重たい音……けれど今にして思えば、あれは機械の音だったと云えるわ」
「機械の音って、どんな？」
「前にここに来た時、天井のドームを開けたことがあったでしょう。あの時の音、覚えてる？」
「いや、全然……音なんか聞いてる余裕なかったし」

「モーターが駆動するような音よ」
「うーん……云われてもピンとこないけど、君がその音を聞いたってことは、夜中に誰かがホールの天井を開けたってこと？」
「いいえ。天井が開いた気配は一度もしなかった。扉の覗き穴からは、天井は視界に入らないけれど、もし屋根が開けば雪が吹き込んでくるから、はっきりとわかるはずよ」
「じゃあ霧切ちゃんが聞いたモーター音っていうのは？」
「まだわからない。けれどこれだけは云えるわ。夜の間に、機械駆動によって、この館の何かが動いた。それがおそらく、殺人事件と関連しているのは間違いない」
「動く館か……」
　わたしはリブラ女子学院を思い出す。犯罪被害者救済委員会は特殊なギミックを取り入れた建物を犯行現場として提供することがあるが、あの密室はとりわけ異様だった。
　そういえばあの密室も、扉周辺の構造に違和感があり、結果的にそれが解決のヒントに繋がった。今回のケースで云えば、戸口の室内側上部に収納された鉄格子の存在が、それにあたるかもしれない。
　わたしはもう一度、問題の隙間を確認しようと扉へ近づいた。
　するとホール側から扉を蹴飛ばすようにして、門美が部屋に怒鳴り込んできた。
「こんなところでサボってたのね、ガキども！」
　わたしは危うく扉にぶつかりそうになって、のけぞった拍子に尻餅をつく。
「休憩は終わりだよ。さっさと働きな」
　門美はわたしを見下ろして云う。
　わたしは負けじと彼を睨み返した。けれど腕力で敵（かな）うはずもないので、それ以上の抵抗は諦めた。
「結お姉さま、行きましょう」
　霧切も大人しくホールへ移動する。
　わたしたちの目の前に、またしてもあの氷柱が立ちはだかる。
　柱の傍に夕覇院が立っていた。どうやら彼も招集されたようだ。
「なんでこれだけ時間が経ってて、これっぽっちしか進んでないのよ。たった一メートル削ればいいのに、なんでそれができないの？」門美が苛々した様子で云う。「やっぱり無能な奴隷たちには、支配層の存在が必要ってことね。古式ゆかしい帝王学を学ばせてくれるなんて、いかにも王の墓って感じがしてきたじゃない」
　王の墓、か……
　わたしがこの様変わりしたシリウス天文台から感じていた印象は、まさにそれだったのかもしれない。新

仙の隠し金庫というより、彼のいびつな魂が眠る場所。彼の存在がごく身近に感じられるのも、ここが墓だからこそだったのだ。
　王墓に囚われたわたしたちは、交代で柱を削る作業を続けた。
　門美は壁際に座り込んで指示を飛ばすだけで、実際に氷柱を削る作業は、わたしと霧切と夕覇院の三人が交代で当たった。
　氷柱にできた水平なくびれは、確実に中心へと向かっていた。
「ガキども、そろそろ夕食タイムだ。夕覇院、アンタはまだ交代じゃないよ。アタシと作業を続けるんだよ」
　門美はいつの間にかわたしたちが持ってきた食糧を管理する立場になっていた。わたしと霧切はパンを受け取って、一旦ホールを離れた。
　しばらくぶりに、わたしの部屋へ移動する。わたしと霧切は並んでベッドに腰かけて、寂しい夕食をとった。
「霧切ちゃん、このままだとあいつの云いなりだけど、これでいいの？　雪村さんの件だってまだ何も解決してないし……」
　わたしは菓子パンを食べながら嘆く。
　霧切はチョコレートをひと欠片(かけら)ずつ割って食べていた。
「彼らは外部犯の存在を信じているみたいね。あるいは――そう信じさせようとしているのか」
「あの二人のうち、どちらかが犯人だとすれば、あえて外部犯に目を向けさせているという可能性が高いな」
「まずは内部犯であることを、はっきりとさせておくべきね。私たちがこれから推理を組み立てていくのにも、確固とした証拠が必要だわ」
「証拠か……それがあれば苦労しないんだけど」
「それらしいものは一応あるわ」
「えっ？」
「雪村さんが飲んだペットボトル。もしあれが睡眠薬入りなら、雪村さんが外部犯を招き入れたという推理の根底が覆る」
「確かにそうだけど……睡眠薬が入ってるかどうかなんてわからないじゃないか。試験薬を持っているわけでもないし」
「飲めばわかるでしょう？」
「ま、まさか……やめてよ？　そんな自分の身体で試すようなこと……」
「大丈夫よ。ちょっとしか飲まないから」

「量の問題じゃないって！　『黒の挑戦』のリストには致死薬も含まれてるんだよ？　万が一、あの水の中に毒も入っていたら……」
「確かに飲み水に毒を混ぜておけば、確実に殺せるわね。最初からそうやって全滅を狙った方が、目的を達成しやすいかもしれない。でも組織はそんな手札を犯人には売らない。下手したら探偵役を殺してしまうことになるから」
「それはあくまで組織のルールに則った場合でしょ？　ルールが厳密に守られるかどうかわからないって云ったのは君の方だよ？」
「話にならないわね。目の前に証拠があるのに、手に入れようとしないなんて怠慢よ」
　霧切はそう云って立ち上がると、部屋を出ていってしまった。
　怒らせてしまっただろうか。
　ケンカがしたかったわけじゃないのに。
　わたしは霧切を追って部屋を飛び出す。
「あ、ちょっとアンタ！　そろそろ交代――」
　門美が話しかけてくるのを無視して、わたしは雪村の部屋へ向かう。
　霧切はすでに雪村の部屋の中にいた。屍体の眠るベッドのそばで、ペットボトルを手にして立っている。天井の小さな常夜灯だけが、彼女を控えめに照らし出し、薄い影を屍体の隣に横たわらせていた。
「飲んだの？」
　わたしは部屋に駆け込んで尋ねる。
　すると彼女は目を伏せたまま、首を横に振った。
「やめておいたわ」
「どういう気持ちの変化？」
「どうせ命をかけるなら、私が死んでも誰かが跡を継げる程度には、解決への鍵を集めておくべきだと思って」
「そうやって自分の命を軽く見るのはやめなよ。命よりも大事な『答え』なんてないんだよ。君が死んで、その結果ハッピーエンドを迎えたとして、誰が喜ぶ？」
　わたしが云うと、彼女はうつむいてしまった。
「ねえ、霧切ちゃん。勝手に先に行かないで、もう少しわたしの近くにいてよ」
「……いつもは私の方が突っ走ろうとする結お姉さまを止める役だった気がするんだけど……まあいいわ」

霧切はそう云って微笑みを浮かべると、急にふっと意識が途絶えたように、足から崩れ落ち、ベッドにもたれかかった。
「霧切ちゃん！」
　わたしはとっさに彼女を抱きかかえる。
　まさか……やっぱりペットボトルの水を飲んだのか？
「大丈夫、飲んでないわ」
　霧切はかろうじて意識を取り戻して云った。
　しかし立ち上がろうとしても、足に力が入らないようだ。
　彼女の額に手を当てると、ひどく熱っぽい。
　考えてみれば、彼女は昨日から一睡もせず、食事もほとんどとらず、極寒の中で重労働を強いられてきたのだ。それに加えて、探偵として殺人事件の捜査に当たり、見えざる新仙帝の亡霊と戦っている。
「部屋に戻ろう」
　わたしはやむを得ず『お姫様抱っこ』で霧切を抱え上げて、雪村の部屋を出た。
「ガキども！　交代の時間――」門美はわたしたちの姿を見て、一瞬言葉を失う。「どうした？　死んだのか？　まさかお前がやったのか？」
「過労だと思います。少し休ませてもいいですか？」
「当たり前だ。立てない奴隷なんて、なんの価値もないね」門美は追い払うような仕草をする。「ちゃんと本人の部屋に寝かせておきなよ。自爆プログラムに引っかかったらたまんないからね」
「はい。ありがとうございます」
　わたしは霧切の部屋に移動し、彼女をベッドに寝かせた。その時点で彼女は、浅い息遣いで眠り込んでいた。
　彼女は本当にペットボトルの水を飲まなかったのか？
　いや、信じよう。
　わたしは後ろ髪を引かれながら、ホールに戻った。
　それから門美の指示のもと、氷を削る作業を再開した。
　不本意だけど、いつまでもこんなところに閉じ込められていたくはない。
　ふと、この作業は一人でもできることに気づいた。氷柱を一度、鎖でぐるりと囲んで、鎖が交差している辺りを両手で持ち、左右互い違いに押し引きすればいい。
　けれどこのことを口に出せば、一人でやらされるのがオチなので黙っておいた。

わたしと夕覇院は十五分作業しては、三十分部屋で温まり、それを繰り返して黙々と氷柱を削っていった。門美は主に部屋で食糧を食べ、時々様子を見にくるだけだった。
　そうしているうちに夜十時が近づいてきた。
『ホール閉鎖まで、五分を切りました。各員、翌朝まで自室で待機してください。なおルールに従わない場合、自爆プログラムを開始します』
「ああ、もう！　あと少しだっていうのに！」
　氷柱のくびれは、中心の箱まであと三十センチ程度のところまで迫っていた。
「少なくとも明日の朝には到達できそうだ」
　夕覇院は満足そうに腕組みして云う。
「これでいよいよアタシの時代が始まる。いい？　アンタたち、アタシがいいって云うまで、明日は柱に触るんじゃないよ」
　夕覇院とわたしは特に返事はせずに、それぞれの部屋へ向かった。
　途中で霧切の部屋を覗く。彼女はベッドの中で静かな寝息を立てていた。頭のリボンが首元に絡みついているのが気になったので、わたしはそっとリボンをほどいて、枕元に置いておいた。
『ホール閉鎖まで、三分を切りました』
　そのアナウンスを聞いて、慌てて自分の部屋に戻る。
　明日になれば、きっとすべてが終わる。
　わたしたちのやってきたことは何も間違いじゃないって、わかるはずだ。
『ホール閉鎖時刻となりました。それではみなさま、おやすみなさい』
　おやすみ、霧切ちゃん。
　彼女と繋がった左手の手錠に触れる。
　わたしは君のために、これから独りで、夜と戦うよ。

第四章

五月雨結

1

『ホール開放時刻となりました。みなさま、おはようございます』
　わたしはアナウンスと同時に部屋を飛び出した。
　ホールは昨日よりもさらに白さが増していた。床や壁に付着した霜が、まるで根雪のように固まり、この館をじわじわと氷で浸食するかのように、すべてを凍結させている。空気までもが白く凍りつき、冴え冴えとしていた。
　霧切の部屋へ向かう。するとちょうど霧切が部屋から出てきた。いつもの三つ編みはほどけていて、リボンもしていない。けれど昨日よりはいくらか顔色もましになったようだ。
「よかった……無事だったんだね」
　わたしは彼女を抱きしめて云った。
「結お姉さまも」
　わたしは彼女の額に手を当てて熱を測った。
「熱はだいぶ下がったみたいだね」
「ごめんなさい」霧切は眉間に皺を寄せて、心底悔しそうに唇を噛む。「疲労で倒れるなんて不覚だわ。体力がなければ探偵は務まらない。そう教わってきたのに……」
「無理しちゃいけないよ。だいたい君はまだ身体もできあがってない中学生なんだから」
「そんなの云い訳にならない」
「自分を責めないで。それよりも、ほら、柱を見てよ。だいぶ削れたでしょ」
　中央の氷柱は、霜で真っ白になっていること以外は、昨夜のままだ。鎖のノコギリによってできたくびれは、もう少しで黒い箱に届きそうなところで止まっている。
「箱も無事だし、侵入者もなし。やっぱり外部の人間は存在しないのかもしれないね」
　霜の降りた絨毯には、わたしたち以外の足跡はなかった。地下通路の入り口周辺も特に異変はなく、跳ね上げ戸の上に置かれたペットボトルも倒されずにそのままだ。
「そうだといいけど。他の人たちが無事か確認しましょう」
「ああ、うん」
　あまり気が進まなかった。
　死の気配を感じる。
　静寂——
　閉ざされた扉の向こうに、屍体があることは、なんとなく予想がついた。それは今まで『黒の挑戦』で、

これと同じ静寂を何度も経験してきたからだ。
　扉を開けてしまったら、引き返せなくなってしまう。
「霧切ちゃん……」
　わたしは彼女の背中に向かって声をかける。
　けれど彼女は振り返るより先に、扉を開けてしまった。
　ベッドの中で眠る門美。
　その右肩に、突起物が見える。
　それはまるで小さな墓碑のように、彼の死を象徴していた。
「死んでる……」
　わたしはそう呟くことしかできなかった。
　出血はほとんどなく、周囲のシーツを少し赤く濡らしている程度で、例によってナイフも先端だけが突き刺さっているような状態だ。
　見たところ抵抗したような痕跡はなく、ベッドも綺麗な状態のまま。
　霧切が室内に足を踏み入れる。わたしも彼女のあとをついていくような形で中へ入った。
「すでに冷たいわ」霧切は門美の首筋に触れて云った。「化粧をしていないわね。この様子からみると、雪村さんと同じように、寝ているところを刺されたと考えるべきね。しかも刺されたあとに、痛みで飛び起きたり、抵抗したりした様子がない。例の睡眠薬を飲んでいた可能性が高いわ」
「睡眠薬？　ペットボトルの水は睡眠薬入りだって知ってたはずなのに……」
　わたしは周囲の床を見回す。ペットボトルは見当たらない。
　シャワー室を覗くと、空のペットボトルが三本、床に転がっていた。
「窓の鍵は両方とも内側から掛けられているわ」霧切が窓を確認して云う。「外に足跡はなし」
「昨日の夜も、それなりに雪や風はあったけど、それでも足跡を全部消してしまうほどだったとは思えないな」
「ペットボトルを使った施錠法は、今回で否定されたわね。窓から落ちたペットボトルが、都合よくシャワー室に転がっていくはずないもの。クレセント錠のハンドルに噛ませるだけなら、たとえば外の雪をボール状に固めたものでもいいけど、室内にそれが溶けたような痕跡もない。窓からの出入りについては、推理をあらためる必要がありそうね」
「でも……窓でなければ、一体何処から？　扉から出入りしたっていうのは考えにくいよ。夜間は扉がロックされるし、さっき見た感じだと、絨毯の霜はまっさらな状態で、誰かが出入りしたような足跡もなかったよ」

その時、ふと背後で足音がした。
振り返ると――
「完璧な密室というわけか」
夕覇院が戸口に立っていた。
わたしたちは彼の生存を喜ぶより先に、とっさに身構えていた。彼が犯人である可能性を考えたら、他に取るべき態度なんてない。
「まさか君たち、私を犯人だと思っているのではあるまいな？」夕覇院は両手を広げて、芝居じみた身振りで云う。「私から見れば、君たちのうちどちらかが犯人ということになる。いや、二人とも、という可能性もあるな」
彼が何を云おうと関係ない。
わたしと霧切は、彼から距離を取るようにあとずさる。
冷たい空気がいっそう張り詰めて、肌に突き刺さるほどの緊張感に変わっていく。
長い沈黙のあとで、夕覇院が口を開いた。
「君たちの狙いは、遺産の独占か？」
「遺産なんかいらない。最初からそう云っているはずです」わたしは云った。「わたしたちは『黒の挑戦』で呼ばれたから来ました。犯罪被害者救済委員会と戦うために、ここに来たんです」
「子供二人で、あの組織と戦う？　とても信じがたい発言だな」
夕覇院は腕組みして云う。
部屋の戸口に彼が立っているため、わたしたちに逃げ場はない。
「しかしそれが本当なら、私と君たちとでは、利害関係は一致していると云えよう。私は遺産を手に入れるためにここに来た。もし君たちが遺産には興味がなく、本当に謎解きごっこがしたいだけなら、ここは互いに干渉せず、互いの目的のみを追求するということで、いかがかね？」
「ええ、もちろん」霧切が目を細めて云う。「あなたが犯人でなければ、ね」
「よかろう」
夕覇院は大げさに云って、部屋の中に入ってくる。わたしたちは逃げるように奥へ移動した。彼は門美の屍体に近づくと、何を思ったのか、肩に刺さっていたナイフを抜き取った。
「君たちが殺人鬼ではないと証明されたわけではないからな」夕覇院はナイフの先端で、わたしと霧切を指し示す。「最低限の自衛はさせてもらうよ」
「それが大人のすることですか」
わたしが嫌味っぽく云うと、彼は冷ややかに笑った。

「念には念を。私は過去の失敗から、慎重に行動することを学んだ。こう見えて地道な探偵活動が得意でね。私が『O』を手に入れられたのも、ひとえに私の高潔なる慎重さゆえだろう」
「なんでもいいですけど……ナイフを振り回すのはやめてください」
「おっと、これは失礼」夕覇院は仰々しくお辞儀する。「ではこれからのことについて、提案なのだが……私は遺産を手に入れるために、ホールで作業を進める。できれば君たちに手伝ってもらう方が、君たちの動向も監視できて一石二鳥だが、万が一、箱のすり替えなどされてはたまらない。仕上げは私の手ですべきだろう」
「ええ、そうしてください」
　わたしはトゲを隠さずに云った。
「しかし君たちを放置しておくわけにもいかない。君たちが殺人鬼ならなおさらだ。そこで、私があの箱を手に入れるまで、何処かの部屋に閉じこもっていてくれないか？　もしその約束を守ってくれるのであれば、私はこのナイフを君たちに使うことはけっしてない」
　彼は云いながら、ナイフの刃先を常にわたしたちに向けていた。血で赤黒く染まった刃が、嘲笑うように何度も閃く。
「わかったわ」
　霧切が即答する。
「い、いいの？　霧切ちゃん」
「ちょうど私も邪魔されずに推理できる環境が欲しかったし。まさに利害は一致しているわ」
「話のわかるお嬢さんだ」
「ただし約束は約束よ。互いに手出しはしない。少しでもその約束を破ったら、二度と遺産は手に入らないと肝に銘じておいて」
「交渉成立だ」
　あくまで自分が優位に立っているかのような口ぶりだ。『いけ好かないって言葉がいけ好かない服を着て歩いてるような男』というのは、あながち間違っていない。むしろ大嫌いなタイプだ。
「それでは早速、作業に取り掛かるとしよう」夕覇院が云った。「何ぶん、一人での作業だから、時間はかかるかもしれないが、今日中には終えられるだろうから安心したまえ」
「ちょっと待ってください」わたしは慌てて云った。「閉じこもるなら、この部屋じゃなくて、わたしの部屋がいいんですけど」
　そちらには着替えや食糧もある。ここで屍体と一緒に長時間過ごすことになるよりはいい。
「……いいだろう。移動したまえ」

夕覇院はナイフを振って、わたしたちに促す。
　わたしと霧切は大人しくホールに出て、わたしの部屋へ移動した。
「二人一緒でいいんですよね？」
　わたしは尋ねる。
「ああ。その方がこちらとしても監視しやすい」
　結局のところ、彼は体よくわたしたちを閉じ込めておきたいのだろう。
「あ、そうだ。忘れ物があるので、一度霧切ちゃんの部屋に入りますけど、いいですよね」
　わたしは返事を聞く前に、霧切の部屋に入った。背後で夕覇院が何か云っていたが、それを聞き流して、ベッドの枕元に置いてあるリボンを二本拾い、ホールに戻った。
「勝手な行動は慎（つつし）みたまえ」
　わたしは無視して自分の部屋に入る。霧切はすでに室内にいて、わたしを待っていた。
「それじゃあ、どうぞご自由に」
　わたしはそう云って、後ろ手に扉を閉める。
　わたしと霧切は並んでベッドに腰かけた。
「わざわざそれを取りにいったの？」霧切はリボンを指差して云う。「……ありがとう」
「あとで結んであげる」わたしは笑顔で応えた。「それより、これでよかったの？　あの男が野放しの状態だけど……やっぱり生き残ったあいつが犯人なんでしょ？」
「彼が犯人だとしても、密室殺人を立証することはできないわ」
　扉は施錠され、ホールの絨毯に足跡はなし。
　窓も内側から施錠され、周囲の雪に足跡はなし。
　この状況で、犯人はどうやって室内に侵入し、被害者をナイフで刺し、部屋から出ていったのか。
　しかも被害者も含めて、全員が手錠の鎖で円環状に繋がれている状態だ。内部犯を想定するには、あまりにもハードルが高すぎる。
「結お姉さま、昨夜はどうだったの？」
「……え、何が？」
「奇妙な物音――モーターの稼働音が聞こえなかった？」
「ああ、そうそう、それ！　わたしも聞いたよ。確か夜中の三時頃だったと思う。ブーンっていう低い地鳴りみたいな音が、数分間鳴り続けて……やんだと思ってしばらくしたら、また同じ音が数分間続いて……聞こえたのはその二回だけだった」
「そう……わたしが前の日の夜に聞いたのも、それと同じだったと思う。残念だわ。昨夜、私が倒れなけ

れば、色々と調べられたかもしれないのに」
「霧切ちゃんはたぶんそう云うだろうと思って、わたしが代わりに調べといたよ。実は昨夜、わたしも霧切ちゃんの真似して、扉の穴からホールをずっと見張ってたんだ」
「さすがね、結お姉さま」
「まあ正直云って、途中うとうとした場面もあったけど……少なくともわたしが監視している間、ホールを行き来した不審人物はいなかった。それで奇妙な物音が聞こえてきた時、目を凝らしてホールを眺めたけど、特に動いているものはなかったな。もちろん天井のドームもそのままだった」
「けれど何かが動いているのは間違いないわ。そしてそれは密室と関わりあるはず」
「うん。でも……何がどう動けば、密室が成立するんだろう。たとえば犯人の部屋に隠し戸があって、機械的に開くようになってるとか？　犯人と被害者の部屋が秘密の地下通路で繋がっていれば、犯行は可能でしょ？」
「そうね。けれど犯人の部屋はともかく、被害者の部屋には、出入り口になるような隠し戸はなかったわ。たいして広い部屋ではないし、見落とすはずがない」
「うーん……仮に秘密の抜け道があったとしても、鎖が届く範囲でなければ意味がないんだよね。そう考えると、密室の出入り口は絞られてくるはずなんだけど……」
　たとえば窓から屋根に上がって、犯行現場を出入りするのは、鎖の長さが足りないので不可能だ。
「そういえば……例の機械音が聞こえてきた時、最初はホールを見ていたんだけど、二回目は窓の外を見てみたんだ。もしかしたら外で何かが動いているかもしれないと思って。でも何もなかった。たとえば……館全体が回転してるとか、そういうのを期待したんだけど」
「結お姉さまの発想はいつも派手ね」
「いやいや、普通だよ。でも今までの『黒の挑戦』を見ても、建物一つ動かす程度のことは、平気でやってくるんじゃないかな。今回はコストもとんでもないし」
「建物を動かす……」
　霧切はふと立ち上がり、カーテンを細く開けた。
　窓の外を眺める。
「いつも雪だね」
　わたしは彼女の隣に立って云う。
　彼女と出会った日も雪だった。初めてシリウス天文台に来た時も雪だった。あの日から、まるで時が止まったかのように、この場所はずっと冬に閉ざされているのかもしれない。次の季節が来ることはない、永遠の冬。

桜の下で笑う君も。
　水着ではにかむ君も。
　この閉ざされた世界にはいない。
「向こうに見えるのは……雪村さんの部屋ね？」
　霧切が尋ねる。
「ああ、うん。鎖の長さを確かめるためにわたしが向かおうとした部屋だよ。ほら、まだ少しわたしの足跡が残ってる」
　昨日の昼間に残した足跡が、今も残っているということは、昨夜の犯行時に誰かが窓から出入りすれば、その痕跡が残されたはずだ。けれど門美の部屋の外には、それらしい足跡などは見当たらなかった。
「やっぱり窓から出入りした可能性はゼロか……」
　わたしはぼんやりと空を眺める。重々しい雪雲が、谷の向こうで蠢（うごめ）いているのが見えた。
　霧切はじっと何処か一点を見つめている。
「何か見つけたの？」
「雪村さんの部屋の屋根――」
　霧切は指差す。
「まさか、誰か隠れてる？」
　わたしは驚いて目を凝らす。
　しかし何も見えない。人影はもちろん、取り立てて何か指摘するようなものは何もない。
「ううん、そうじゃない。屋根の上の雪が……少なくない？」
「そう？」
　云われてみれば確かに、屋根に積もっている雪が薄い気がする。
　霧切は反対側の窓へ移動して、カーテンを開けた。
　隣の部屋を眺める。こちらから見えるのは霧切の部屋だ。
「やっぱり……こっちの方が屋根の雪が分厚い」
「うーん、そう見えなくもないけど……谷間に近い方が風が強そうだし、自然現象と云えなくもないんじゃない？」
　わたしの言葉は、霧切の耳には届いていないみたいだった。彼女はじっと窓の外を眺めて、数分間そのまま立ち尽くした。
　彼女には見えない何かが見えているのかもしれない。わたしは彼女の邪魔にならないように、その場

からそっと離れた。
　ふと気になって、扉の隙間からホールを確認してみる。
　夕覇院の姿は見えない。氷を削る音も聞こえてこないので、まだ作業に取り掛かってすらいないようだ。部屋で休んでいるのだろうか。
　わたしはベッドに戻って、残っている食糧を確認してみた。キャンディやチョコレート、スナック菓子が少し。水筒の中身も、残り三分の一程度。夕覇院がとっとと遺産を見つけるなり、挫折するなりして退場してくれないと、わたしたちは雪山の遭難者同然のサバイバルを強いられることになる。
　早速お腹が空いたので、クッキーの袋を開ける。
　そこへ霧切が真剣な顔つきのままベッドに戻ってきた。おそらく今、彼女の小さな頭の中で、神経細胞が銀河の星々のごとく光を放っているのだろう。わたしはそういう時の彼女の横顔が好きだった。
　試しにクッキーを一つ手にとって、霧切の口にもっていくと、彼女は無意識のうちにそれをくわえていた。小鳥に餌付けをしているみたいで面白かった。
「霧切ちゃん、何かわかったの？」
「何かがわかりそう」
　彼女は唐突に立ち上がると、今度は天体望遠鏡のところへ向かった。彼女はそれをあちこち眺めたり、台座の回転盤をくるくると回してみたり、まるでおもちゃのようにしばらくいじり続けた。
「もしかして今回も天体望遠鏡がトリックのカギになってるの？」
　尋ねると、霧切は曖昧に首を傾げるだけだった。
「台座を回転させる時に、少し何かに引っ掛かる感触があるわ」
「壊れてるってこと？」
「どうかしら……」
　霧切は難しい顔でうつむく。
「霧切ちゃん、糖分が足りないんじゃない？　栄養が足りなければ頭も働かないよ。ちょっと休んで何か食べよう」
「……そうね」
　わたしたちはいつものお菓子パーティを始める。今まで何度も寮の部屋でやってきたやつだ。水筒に残っていた紅茶を二人で分け合って、一息つく。
　少しだけ、日常に戻れた気がする。
　考えてみれば、霧切と出会うまでは、わたしの日常なんて空っぽだった。あの日から——妹の繭が殺されてから、わたしはただ生き長らえているだけだった。かろうじて探偵という言葉にすがって、それだけを目

的に生きてきた。そうしなければ、わたしは自分を保っていられなかったからだ。
　あの時、わたしは妹と一緒に殺されていたかもしれない。
　もしかしたら妹ではなく、わたしが誘拐されて、殺されていたかもしれない。
　そんな想像を振り払うためには、探偵というヒーロー像にすがるしかなかった。救いを求める人々を助け出す正義の味方。わたしはそういう存在になることで、妹へのせめてもの贖罪（しょくざい）になると考えていた。
　けれどもちろん、わたしなんかがヒーローになれるはずもなくて。
　結局のところ、わたしは自分が救われたかっただけなのだ。
　そこへ現れたのが霧切響子だった。
　彼女は本物の探偵だった。
　もちろん彼女は、自分がヒーローだなんて、これっぽっちも思っていないだろう。けれど彼女に救われた人間がここにいる。
　だから、やっぱり彼女はヒーローであり、正真正銘の探偵なのだ。彼女はこれから先も、きっと多くの人々を救うことになる。
　だからわたしは何があっても――
「結お姉さま」
　霧切がふと、わたしの方を向く。
「ん？」
「髪を結って」
「あ、ああ、うん」
　ベッドに腰かける彼女の背後に回って、わたしは髪に触れた。まるで水のように手の中で流れる髪をそっと掴んで、編み込んでいく。
「今朝、ちゃんと洗ったのよ」
「偉い偉い」
「あの日、出会えたのが結お姉さまでよかったと思ってる」
　唐突に、彼女はそんなことを口にした。
「どうしたの急に」
「もし別の誰かだったら……私はもう生きてはいなかった気がする。新仙帝のゲームに付き合わされて、死んでいたんじゃないかしら」
「そんなことないでしょ。君は名探偵なんだから」
「わかってないわね。結お姉さまこそ、私にとっては名探偵よ」

「そんなお世辞を云われても、嬉しくないね」
　そんなことはない。
　とても嬉しかった。
　わたしは少しでも君の助けになったのかな。
　左の三つ編みを編み終えて、リボンを結ぶ。
　次は右――
　そう思って、彼女の髪に触れようとしたけれど、何故か手が空を切った。
「結お姉さま……」
　霧切が不安そうにわたしを見上げる。
　顔色が悪い。
「目が回る――」
　彼女はそう云って、脇に置いてあった水筒を手に取る。そして何かを確かめるように、臭いを嗅いだ。
「どうして……」
　そう呟いて、彼女はベッドの上に、横ざまに倒れ込んだ。
　霧切ちゃん。
　わたしは彼女の手を強く握りしめた。

2

　眠っている間に、涙をたくさん流したような気がする。
　どうしてわたしは泣いているんだっけ。
　哀しいことがあったから？
　それとも、妹の夢を見たから？
　理由はよくわからない。
　涙ですっかり頬が濡れちゃった。
　顔を拭おうとして、妙な違和感を覚える。
　わたしの手に、霧切の手が重ねられていた。
　その幼い手の甲には、銃弾が掠めた一筋の傷痕。その傷は一生残るかもしれない……そう思うと胸が痛む。
　わたしは身体を起こす。

わたしたちはベッドに横たわっていた。周りにはお菓子が散らばっている。水筒が床に転がって、床に液体の染みをつくっていた。
　腕時計を見ると、正午を過ぎている。
　いつの間にか、だいぶ時間が経っていた。
　ふと、異様な臭気を感じて、扉の方を向く。
　扉の隙間から、白い煙が流れ込んできている。
　わたしは息を呑んで、霧切を揺さぶった。
「霧切ちゃん！　起きてっ」
　霧切は苦しそうに呻き声を漏らしながら、身体を起こした。
　目を擦って、ぼんやりとわたしを見つめたあと、室内に立ち込める煙に気づく。
「な、何が……起こって……」
　霧切は呆然と呟く。ろれつが回らず、まだ意識もはっきりとしていないようだ。
　わたしは立ち上がり、思い切って扉を開けた。
　ホールの惨状が目に飛び込んでくる。
　氷柱を取り囲むように、燃え盛る炎の山が揺らめいていた。その熱のせいか、氷柱はくびれの形を残したまま、かなり細くなっているように見えた。表面も溶けだして、ぬらぬらと照っている。
　炎は氷柱の周りだけではなく、ホール中に点々と小さな火の山を作っていた。よく見ると、燃えているのは紙幣だった。あちこちに散らばった札束に引火して、激しく燃えているのだ。
　そうして爆発的に立ち上がった炎は、周囲の壁や絨毯を燃やし、その真っ赤な手を天井まで伸ばそうとしているところだった。
「か、火事……火事だっ」わたしは叫ぶ。「霧切ちゃんっ、逃げなきゃ！」
「手錠」霧切が云う。「これがある限り、逃げられないわ」
「そ、それでも……外へ出て、少しでも遠くへ……」
「見て、結お姉さま。柱の中に、箱がない」
「あっ」
　霧切の云う通りだった。
　氷柱の中心にあった黒い箱がない。
　霧切は立ち上がると、ふらつく足をどうにか動かして、炎の渦巻くホールへと向かっていく。
「霧切ちゃん！　危ないよ！」
「黒い箱……あれがあれば、手錠を外せるかも……」

霧切はそう云ってホールへ出る。
　わたしも彼女のあとに続いた。
　たちまち煙と熱波に包まれる。霜で真っ白だったはずの世界は、今や紅や朱色の極彩色に彩られていた。天井の凹面鏡が、その様子を悪夢のように映し出し、地獄絵図を広げている。まるでこの世の終わりに直面しているような気分だ。
　柱の向こう側、巨大な炎の山のふもとに、誰かが倒れている。
　派手な模様のコートが床に広がって、そこに火が燃え移り始めていた。
　夕覇院だ。
　彼は跳ね上げ戸の近くに、仰向けに倒れていた。足元に空のペットボトルが転がっている。彼は炎の中、身動きもせずに天井を見つめていた。
　右目だけを見開いたままで——
　左目には、長い棒状の何かが、深々と突き刺さっていた。
「これは……矢？」
　霧切は夕覇院のそばに屈み込んで、首筋に触れようとした。しかし彼のコートに燃え移った火が勢いを増し、霧切は思わずのけぞるようにして、その場からあとずさった。
　夕覇院が炎に巻かれていく。
　その時ふと、わたしは気づいた。
　夕覇院は手錠をしていなかった。
「霧切ちゃん！　夕覇院が手錠を外してる！」
　熱風のせいか、風の吹き荒（すさ）ぶような音がホール中を覆い尽くしているため、わたしは大声で彼女に呼びかけなければならなかった。
「やっぱり、彼は箱を手に入れたんだわ。それで手錠を外すことができた……」
「手の中に何か持ってる！」
　夕覇院が小さな黒いカード状のものを握りしめている。
　けれど彼の服に燃え移った炎が、今まさにそれを焼き尽くそうとしていた。
「ああっ」
　わたしは絶望のあまり悲嘆の声を上げる。
　あれがないと、手錠を外せない！
　うろたえるわたしをよそに、霧切は炎を跳び越えて、夕覇院に近づいた。わたしの視界からは、彼女は炎の海へ飛び込んだように見えた。

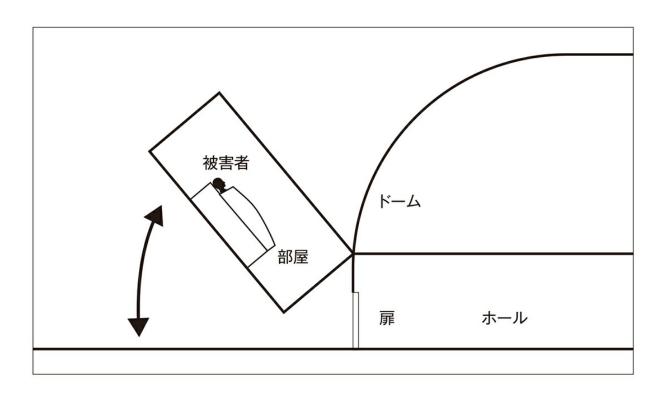
そして彼女は火の中に手を突っ込んで、夕覇院の手を掴み、そこに握られている黒いカードを引き抜いた。
「霧切ちゃん！」
「大丈夫」そう云って彼女はわたしのところへ戻ってきた。「たぶんまだ使えるはずよ」
「そ、そうじゃなくて、君の手……」
　もともと真っ白だった彼女の右手が、うっすらと赤く染まっている。
「これくらいなんでもないわ。それより早く一旦ここから離れましょう」
　霧切はホールの中央から離れて、比較的火の少ない部屋の前に移動した。
　さっき手に入れた黒いカードを確認する。
「なんなの？　それ？」
　見たところスイッチやボタンの類は見当たらない。想像していたリモコンキーとは全然違う。ただの真っ黒なカードだ。
「騙（だま）された……？」
「でも手錠が外れていたのは事実よ。きっとこれが鍵になっているはず……」
　霧切はカードを自分の手錠に近づけた。
　するとピッという音が鳴って、手錠が開き、彼女の腕からするりと落下した。床に落ちたそれは、まるで口を開けたまま死んだ小さな生き物のように見えた。
「やった！」
　わたしは歓声を上げる。
　やっとここから脱出できる。
　霧切は続けて、自分のもう片方の手錠を外した。どうやらそのカード型の電子キーは、すべての手錠に有効らしい。霧切は自由になった手で、それをわたしに渡そうとする。
　その時、頭上でいびつな音がした。
　見上げると火の粉が暴れている。
　そして空が割れて、ひび割れた欠片が落ちてくる――
「危ない！」
　わたしはとっさに霧切を突き飛ばす。
　そこに天井の凹面鏡の一部が落ちてきて、床に突き刺さった。絶叫するわたしの顔が、アルミのパネルに映し出されて、バケモノのように歪む。
　続けざまに、バラバラと音を立てて、燃え盛る屋根の一部が降ってきた。そして最後にドームの三分の

ーほどが斜めに落下してきて、氷の柱をいともたやすくなぎ倒し、ホールに横たわった。
「霧切ちゃん！　無事？」
　霧切とわたしは、瓦礫（がれき）によって離れ離れになってしまった。
「ええ、助かったわ」霧切の声が凹面鏡のパネル越しに聞こえる。「結お姉さま、瓦礫の下から鍵を投げるから、受け取って」
「わかった」
　凹面鏡の下にできた隙間から、黒いカードが投げ込まれる。その隙間から向こう側を覗くと、霧切が身体を屈めてこちらを覗いていた。
「霧切ちゃんは先に外へ出て！　部屋の窓から出られるでしょ？」
「結お姉さまは？」
「瓦礫でそっちに行けない。別の場所から出るよ」
「外で合流しましょう」
「了解。必ずだよ！」
「ええ、必ず」
　わたしたちは肯き合って、立ち上がった。
　黒いカードを手錠にかざす。するとあっさりと手錠が外れた。わたしたちの自由を奪い、解けない謎をもたらした手錠——それからついにわたしは解放される。
　あまりもたもたしていられない。天井がホールに落ちてきたことで、炎は新しい獲物を見つけたとばかりに腕を伸ばし、その勢いを強めている。
　黒煙はますます大きくなって、小雪のちらつく空へと昇っていく。天井がなくなったおかげで、煙に巻かれずに済んだのは、不幸中の幸いだ。
　わたしは炎を避けながら、近くの部屋の扉を開ける。
　そこは雪村の部屋だった。彼女は以前と変わらずベッドに横たわったまま。いずれ炎が彼女を焼き尽くすだろう。どうにかして屍体を外に運び出そうかとも考えたけれど、それだけの猶予があるとは思えなかった。
　その代わり、ふと思い立って冷蔵庫を開けた。彼女の子供たちに必要なお金だ。せめてそれだけでも持って行こうとしたけれど——冷蔵庫の中に札束は存在しなかった。
　わたしはそれ以上考えることはやめて、外へ出ることにした。
　鍵を開けて、窓から飛び出す。
　すぐ目の前に崖。谷底から凍てつく風が吹きつけてくる。けれどさっきまで熱波を浴びていた身体に

は、心地いいくらいだった。
「結お姉さま」
　声がする。
　彼女は建物から離れて、森の方へ移動していた。
　真っ赤な地獄から一転して、すべてが静止したような白の世界に、彼女はぽつんと立ち尽くしている。
「霧切ちゃん……」
　わたしは彼女に駆け寄り、ここに来てから何度目かのハグをする。
　振り返ると、シリウス天文台は火の塊となって揺らめいていた。あちこちから瓦礫の崩れる音や、何かが爆(は)ぜる音が聞こえる。それは不気味な怪物の断末魔の叫びにも聞こえた。その怪物が死に物狂いで吐き出した黒煙は、火の粉と共に空に立ち昇り、やがて灰色の空と同化していく。
「結局……みんな死んじゃった」
　わたしは呟く。
　館に訪れた五人の探偵のうち、わたしと霧切以外は誰も生きて外に出られなかった。
「前と同じね」
　霧切は燃える館を眺めて云う。
「また二人ぼっちだ」
「ねえ、結お姉さま」
「なあに？」
「――私のリボンは？」
　霧切は自分の髪に触れながら尋ねる。
　三つ編みは左の方だけ。そういえば髪を編んでいる途中で、意識を失ってしまったのだ。
「部屋に置いてきちゃった。ごめん……」
　今頃、炎に巻かれているところかもしれない。
　それにしても何故、今そんなことを訊くのだろう。
「また、結ってくれる？」
「もちろん」
「そう……ありがとう」
　霧切は云いながら、唐突にわたしに抱きついた。
　五秒ほどそうしてから、ゆっくりと呼吸を整えて、わたしから離れる。

「霧切ちゃん……どうしたの？　今のは何？」
「最後の思い出」
「最後……？」
　わたしと霧切の間に細雪が舞い落ちる。
　冷たい風に、彼女の片方だけの三つ編みが揺れた。まるで何かに迷う、彼女の心を映しているかのように。
「犯人がわかったの」
　そうか……
　彼女はとうとう答えにたどり着いたんだ。
　雪が肌に触れる冷たさも、背後で音を立てて燃え盛る火も、もう何も気にならない。ただ、一つだけ――彼女の唇が少し、震えていることだけが、気がかりだった。
「ひとまず屋根のあるところに行こうか？　Ｂ棟なら本館から離れてるし、火も大丈夫だと思うけど……」
「ううん、すぐ終わるから。私の話を聞いて。そしてもし、間違ってると思うことがあるなら云ってほしいの」
　霧切は雪の中から動こうとしない。
　その小さな身体に、氷のように冷たく固い意志が感じられた。
　わたしは肯く。そうするしかなかった。
「今までに『黒の挑戦』でいくつも密室殺人を見てきたけれど、その中でも今回は特に条件が厳しかったわ。窓の鍵は内側から施錠され、扉は全室ロックされていたし……外の雪には誰かが出入りしたような痕跡もなく、扉の前の絨毯にも足跡はなし。それに最初の殺人では、私がホールを見張っていたから、扉を出入りした人物がいないことは間違いない」
「あらためて考えると……どうしたって内部の人間には犯行が不可能に思えるよ。現場の密室状況もそうだけど、全員が手錠の鎖で繋がれた状態だからね。外から現場に近づこうとしても、鎖のせいで近づけない」
「そうね。手錠の鎖の存在が、この謎をさらに難しくしている。だからそのことは一旦、脇に置いて考えるしかないわ」
「それじゃあ、どうやってこの密室を暴くつもり？」
「謎を解く鍵は、とてもわかりやすい形で現場に転がっていたわ」
「転がっていた？」
「ペットボトルよ。あれは現場に残された唯一の手がかりだった」

「いや、でも……窓のハンドルにペットボトルを噛ませて密室を作る方法を否定したのは君自身じゃないか」
「ええ。もしペットボトルを使って密室を作ったのなら、窓の下にそれが転がっていなければならないし、二つ目の密室では、ペットボトルそのものが室内にはなかったわ」
「それじゃあ、あれがなんの手がかりになるって云うの？」
「あのペットボトルが、事件の夜に起きた出来事を示しているのよ」
「……どういうこと？」
「あれはもともと冷蔵庫にあったもので、雪村さんの飲みかけでしょう。蓋がきちんと閉じられていたし、あとでまた飲むつもりだったのかもしれない。そういう場合、普通ならそのペットボトルをどうするかしら」
「冷蔵庫に戻す？」
「そうね。もしくは——またすぐ飲むつもりなら近くに置いておいたでしょうし、単に冷蔵庫に戻すのが面倒で、その辺に置いた可能性もある。たとえばベッドの横とか、鏡台の上とか。いずれにしろ、あのペットボトルが部屋の入り口近くに転がっているという状況はおかしいと思わない？」
「うーん……まあ、云われてみれば……雪村さん本人が何かの意図をもって、あの辺に転がしておいたというのは考えにくいかな」
「だとすれば、あのペットボトルは何者かによって部屋の入り口近くまで動かされたことになる。では誰がなんのために動かしたのか？」
「部屋に侵入した犯人が、床に置いてあるのに気づかず蹴ってしまった、とか？」
「その可能性も、もちろんあるわ。けれどその場合、犯人はすでに密室の中に侵入していることになる。そもそもどうやって犯人が中に入ったのか……これでは謎は解けないわ」
「犯人以外に、誰がペットボトルを転がすわけ？」
「勝手に転がった、と発想を変えれば、密室の秘密が見えてくるの」
「勝手に……？」
「私にその閃きをくれたのは、雪村さんの部屋の屋根に、あまり雪が積もっていないのを見た時だった。どうして彼女の部屋だけ雪がないのか。どうして彼女の部屋のペットボトルが、勝手に転がるのか」
「なんなの？　わたしにはさっぱりわからないんだけど」
「傾いたのよ。部屋全体が」

被害者
ドーム
部屋
扉
ホール

「そ、そんなのあり得ないよ」
「いいえ、結お姉さまも例のモーター音を聞いているでしょう」
「そうだけど……」
「部屋を傾けるにあたって、支点となるのは、二等辺三角形の底辺部分。つまり客室がホールと接している部分の、天井側の一辺と考えられるわ。ここを軸として、部屋全体がちょうどダンプカーの荷台みたいに、斜めに持ち上げられるような仕組みになっているのよ。地面側にシリンダーが仕込まれているのか、それともウイング方式で、ホールと接している部分にシリンダーがあるのか、それは実際に見てみないとわからないけれど……」
「ちょっと待って。百歩譲って、部屋が持ち上げられて傾く、ってところまではいいとして、じゃあ傾いたからなんだっていうの？　それで密室の謎が解ける？」
「ええ。解けるわ。そのまま部屋を傾け続けて、九十度まで傾いた時に、何が起こるかというと——窓の鍵が開くのよ」
「えっ……？」
「窓のクレセント錠を操作するハンドルは軸が緩いせいか、押さえておかないと自重で勝手に下がってしまう。通常時には、ハンドルが垂直であれば施錠された状態、水平であれば解錠された状態。これをそのまま、九十度傾けた状態にすると……重力の方向も変わるから、それまでの水平方向が垂直方向になり、ハンドルは自然に解錠された状態になる。逆の見方をすれば、窓のハンドルを触らずに操作するために部屋全体を傾けた、と見ることもできるかもしれない」
「それじゃあ犯人は……垂直に立った部屋の窓を外から開けて、室内に侵入したの？　何もかもが垂直になってる部屋に？」
「ええ。備え付けの家具がすべて床に固定されていたのもこのため。もし固定されていなければ、全部下に落ちてしまうものね。この時、下というのは部屋の入り口側に当たるわ。飲みかけのペットボトルは、それで入り口近くに転がっていたのよ」
「そうだったのか……でも夜の間、君は一晩中ホールを見ていたのに、向かいの部屋が持ち上がっていくのがわからなかったの？」
「部屋が動いても、ホール側の壁や扉はそのままよ。ホールと部屋の接点になる壁が二重になっているんでしょうね。ただし、私が調べた限り、扉は二重構造になっているようには見えなかった。だから扉はホール側に残して、動いている部屋の方では戸口がぽっかりと開いた状態になっていると考えられるわ。けれどこのまま部屋が垂直になると、室内にいる人や物が、戸口から外に落ちてしまうかもしれない。そこで入り口に鉄格子のシャッターが下りる仕組みになっているのよ」

「落下防止の柵みたいなものか」

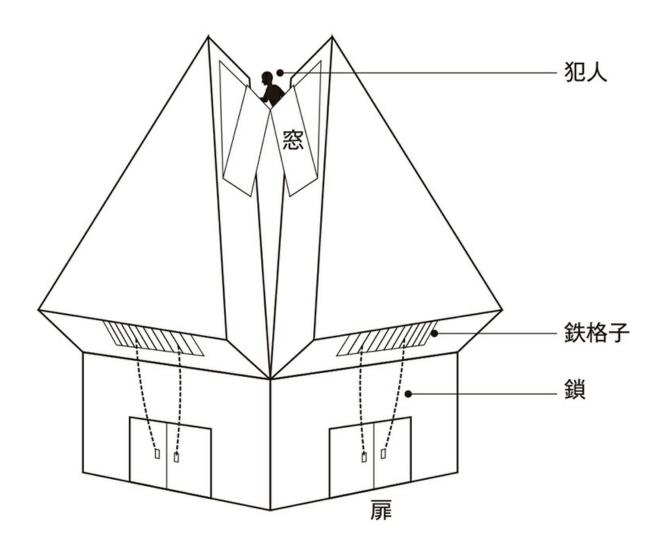
「ここまで云えばもう、真相は明らかね。犯人は部屋を垂直に傾けることで、窓の鍵を解錠し、そこから侵入した。この時、窓は地面から少なくとも六メートル以上高い場所にあるため、外部から来た者には出入りすることができない。そもそも部屋を傾けるスイッチは、建物の中にあると考えるのが妥当ね。厳密に云えば、天体望遠鏡の回転台がスイッチになっていると考えられるわ。金庫のダイヤル錠と同じ仕組みで、特定の回し方をするとスイッチが作動するのよ。つまりこれを作動できるのは、内部の人間と断定できる」

「つまり犯人は自分の部屋にある天体望遠鏡を操作することで、被害者の部屋を持ち上げることができた、ということ？」

「ええ」

「たとえそれができたとしても、相手の部屋の窓が頭上高くにあることには変わらないと思うけど……」

「それはなんの問題にもならないわ。何故なら——犯人の部屋も、同じように持ち上げてしまえばいいのだから」

犯人
窓
鉄格子
鎖
扉

「犯人の部屋も？」
「天体望遠鏡を足場にしておけば、部屋が垂直になっても落ちずに済む。そこから窓にはすぐ手が届くでしょう。窓から外へ出ることも可能だわ」
「まさか垂直に立った部屋の窓から外に出て、被害者の部屋の窓へ跳び移ろうっていうの？」
「そうよ」
「そんなことできるはずがない！」
「そうかしら。たとえばそれぞれの部屋が垂直よりも、もっと大きくホール側に傾いていたとしたら……隣り合う二つの部屋の窓は、かなり接近する。花のつぼみと同じよ。花が開いている時には、隣り合う二枚の花びらは離れているけれど、つぼみのように内側に向かってすぼまった形になれば、重なり合うくらい近い状態になる。それと同じことが、この星形の建物で起きていたのよ」
「そんなことが……」
「これで犯人の条件が揃ったわ。第一に、内部の人間であること。そして第二に――」
　霧切は早口でまくし立てるように、ここまで喋り通していたのに、急に言葉を詰まらせた。
　わたしたちの背後では、瓦礫の崩れる音がずっとしている。けれど炎の熱もここまでは届かない。冷たくて鋭い風が、わたしの髪を、霧切の髪を、切り刻むように通り過ぎていく。
「霧切ちゃん、どうしたの？　続けて」
「ここまで云えば……わかるでしょう？」
「ちゃんと云わなきゃわからないよ」
「犯人の条件は――被害者の部屋の隣室にいる人物。本来なら、たとえ隣室同士でも手錠の鎖が届かないから犯行は不可能だけど、部屋を内側に向かって傾ければ、ショートカットが可能になる。雪の上を十メートルも歩く必要はない。窓から窓へ、せいぜい一メートル程度の隙間を渡れば、隣室にたどり着くわ」
　霧切は顔を上げて、わたしを見つめた。
　攻撃的な目つきの中に、潤んだ瞳が見える。
「雪村さんの隣室って云うなら、門美さんだってそうじゃないか」
「あの人は前日、睡眠薬を飲んでいたから、夜には眠り込んで何もできなかった。彼がペットボトルの水を飲んでいるところを、結お姉さまも見ているはずよ。おそらく睡眠薬は全客室のペットボトルに仕込まれている。用途としては、標的にそれを飲ませることで、夜間に部屋が傾いても気づかせないため。理想は眠気を感じてベッドに入ってもらうのが一番だけど、雪村さんはまさにその通りに行動してくれた。毛布も鋲でベッド本体に固定されているから、たとえ部屋が傾いても、雪村さんは落下せずにその中に

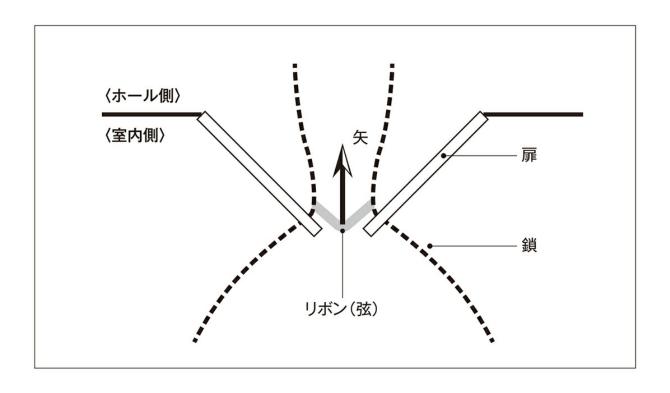
留まる。つまり――殺しやすくなる」
「でも部屋は傾いたままなんでしょ？　そんな状況でどうやって雪村さんを殺せるっていうの？」
「犯人は窓から室内に侵入し、天体望遠鏡やベッドを足場に被害者に近づく。それでも手に持ったナイフで直接、被害者を刺すのは難しいかもしれない。だからこそ、ナイフに毒が塗られているのよ。なんらかの理由で鎖の長さが足りなくなった場合や、直接刺すのが困難な場合、そのナイフを被害者に向かって落とすだけで殺害できる。同じ毒が使われた以前の事件も、同じようにナイフを落下させて被害者を殺害していたわ。雪村さんの身体に、ナイフが少ししか刺さっていなかったのは、そういう理由があったから。その方が、出血が少なくて都合がいい。出血が多いと、血の流れた方向で、部屋が垂直になっていたと気づかれるかもしれないから――」
　霧切はいつものように淡々と推理を語る。
　わたしはすでに反論の言葉すら失っていた。
「これ以上、説明すべきことは何もないわ。犯人は被害者を殺害したあと、自分の部屋に戻って、部屋の傾きを元に戻す。部屋が元の形になれば、窓のハンドルも自然と施錠された状態になる。これで――密室が完成する」
　不可能と思われた殺人事件が、あっさり解き明かされてしまった。
　今までに何度も見てきた光景だ。
　けれど今までとは立場が違う。
　これから先は、わたしが初めて知る景色。
「わたしが雪村さんを殺したって云うの？」
　云わずにはいられなかった。
　それを云ってしまったら、わたしと彼女が、容疑者と探偵になってしまう。けれど云わなければならなかった。
『このままだと結さんは戻ってこられない場所に行ってしまう』
　そう云ったリコの言葉が、今まさに現実になろうとしている。
　彼は間違っていなかった。
　わたしは今、引き返せない場所へ、歩き出そうとしている。
　霧切はうつむいて、答えをはぐらかした。
「結お姉さま――いつからなの？」
「……なんの話？」
「いつから組織とコンタクトを取っていたの？」

今度はわたしがはぐらかす番だった。
　わたしは雪空を見上げて、涙をこらえる。
「知らないよ、そんなの」
「いつかこういう日が来ることはわかっていたわ。でもそれはきっと、もっと先だと思っていた。だからそうなる前に、私はあなたの前を去るつもりだった。何処か遠くの国で仕事をしていれば、犯罪被害者救済委員会も手出しはしてこないでしょう。そうすれば組織があなたを利用することもなくなる。結お姉さまと私は、ずっと今のままでいられた。たとえもう会えなかったとしても……少なくとも終わることはなかった。こうして新仙帝の影を追いかけたりさえしなければ――」
　霧切はうつむいたまま、足元の雪に手紙を書くみたいに、言葉を一つ一つ選びながら云った。
「霧切ちゃん……本当にわたしが今回の『黒の挑戦』の犯人だと思ってる？」
「私は――思ってない」彼女は小さく首を横に振る。「でも……でも、推理によって導かれる答えが、あなたを指しているの。どうしてなの？　本当にあなたが真犯人なの？　ねえ、結お姉さま」
　霧切は顔を上げて、わたしの目を見つめる。
　そこに真実を探そうとするかのように。
「それじゃあ反論させてもらうけど」わたしは覚悟を決める。「門美さんの件はどうなの？　例のトリックが、隣り合う部屋同士でなければならないのなら、わたしは除外されるよ。門美さんの隣は、雪村さんと夕覇院さんだからね」
「結論から云えば、門美さんを殺害したのは夕覇院よ。密室トリックは同じ。彼の目的はもちろん、新仙帝の遺産。門美さんに独占される前に、殺してしまおうと考えたのね。けれど彼が、組織の用意したトリックを実行できたのは、あなたがそそのかしたからよ。結お姉さま――」
「わたしがそう仕向けたっていうの？」
「ええ。トリックの仕組みをそれとなくほのめかしたり、ヒントになるようなことを口に出したりしたんでしょう。昨日の日中は、全員交代で氷を削る作業をしていたから、私の目を盗んで会話することくらいできたでしょう」
「それはあり得ないよ。仮に夕覇院さんが密室トリックを知ったとしても、同じトリックで門美さんを殺害することはできない」
「……どうして？」
「部屋を傾ける時に門美さんが起きていたら大騒ぎするに決まってるでしょ？　門美さんが都合よく眠り込んでいるとは限らない」
「いいえ。雪村さんの時と同じように、睡眠薬が使われたのよ。昨日、私たちが寮から持ってきた食糧や

飲料水をみんなで分け合ったでしょう。夕覇院は私たちが交代で作業している間に、冷蔵庫にあった睡眠薬入りの水を飲料水に混ぜた。それを門美さんに飲ませたのね」
「それでもまだ、トリックが可能だとは云えない。問題は凶器だよ。彼が単なる便乗犯だというのなら、どうやって凶器を調達したの？　わたしが見る限り、門美さん殺害に使用されたナイフは、雪村さんの屍体に刺さっていたナイフと同じ種類だった。これは組織が用意したものでしょ？　もしわたしが真犯人なら、凶器の一つを彼に渡したりしない。そんなことをすれば怪しまれるからね。だから、夕覇院さんに犯行は不可能だよ」
「凶器については何も問題ではないわ。彼は昨日のうちに、ひそかに雪村さんの屍体からナイフを抜き取っておいたのよ。護身用のつもりで盗んだのか、そもそも殺害計画のために手に入れたのか、それはわからないけれど――」
「あのナイフは使い回しだった、っていうの？」
「ええ」
「それじゃあ雪村さんの屍体から、ナイフがなくなってることになるじゃないか。もし誰かに雪村さんの部屋に入られたら、それで気づかれるよ」
「彼は門美さんの屍体発見後、すぐに屍体からナイフを抜いて回収していたでしょう。いかにも私たちに敵意を向けるような演技をしていたけれど、あれは凶器が使い回しであることをばれないようにするためだった。あのあとすぐに雪村さんの屍体にナイフを戻せば、計画は完了。彼はそうして、あくまでも二つの殺人が同一犯によるものだと思わせようとしたのよ。だから同じナイフを使い、同じトリックで密室を作ってみせた」
「そんな……『黒の挑戦』の最中に、別の殺人犯がトリックを模倣したっていうの？　今までそんなこと、一度もなかったじゃないか」
「そうね。でも彼が遺産目的で他人を殺すところまで、『黒の挑戦』の計画に盛り込まれていたのだとしたら、あり得ない話ではない。意図的に用意された模倣犯ね。そもそも結お姉さまが『黒の挑戦』の犯人なら……その動機は妹の誘拐事件に発端があるはず。誘拐を専門とする探偵、雪村さんと夕覇院の二人が、過去にその誘拐事件となんらかの関係があってもおかしくない。だから結お姉さまには、その二人を殺害する理由はあっても、門美さんを殺害する理由はない」
「あくまでわたしが真犯人だって前提で話を進めるんだね。わたしのこと、信用してくれているんだと思ってた」
「信用してるわ！　だからこそ……真実を見つけようと必死になってるんじゃない！」霧切は珍しく感情的に声を荒らげた。「疑うのは糾弾したいからじゃない。あなたを信じたいからよ。あなたはやっぱり、私

の結お姉さまなんだって！」
「霧切ちゃん……」
　わたしは戸惑う。
　どうすればわたしたちは救われるのだろう。
　どうすれば彼女を救えるのだろう。
　探偵としてわたしがすべきことはなんなのか。
　五月雨結としてやらなきゃいけないことはなんなのか。
「まだ解決編は終わってないよ。夕覇院さんの件が残ってる。結局、彼も死んじゃったじゃないか。彼の身に何が起こったのか、説明してよ」
「……わかったわ」霧切は頰にかかった髪を払う。「事件は今朝、門美さんの屍体発見後に起こった。わたしと結お姉さまは、夕覇院に命令されて、部屋に引きこもったわね。それから私は……意識を失った。薬を飲まされたんだわ。薬は結お姉さまの水筒に混入されていた」
「でもそれは、わたしが混入させたという証拠にはならない。夕覇院さんが昨日のうちに入れておいたものかもしれない」
「そうね。ともかく私が薬で昏倒させられたのは事実。問題は、その間に何が起きたのかということ」
「何故、ホールが燃えていたの？」
「夕覇院が一刻も早く遺産を手に入れるために、禁断の手を使ったのね。死んだ人たちの部屋から札束を持ってきて、燃やしたのよ。結果的に、彼は氷柱の中から、ついに箱を取り出すことができた。箱の中身は――例の黒いカードだけだったんじゃないかしら。でも彼には、何か重要なデータが保存されたものに見えたかもしれないわね。そしてそのカードで、手錠を外せることに気づく。彼が殺されたのは、そのあとよ」
「左目に矢が刺さっているように見えたけど」
「ええ。その状況からみて、正面から矢を射られたと考えられるわ」
「矢を射るといっても……弓なんか何処にもなかったじゃないか」
「そうね。もっとも、矢も室内を探索した時には見つかっていないから、何かに偽装して外から持ち込まれたのだと思う。たとえばボールペンならそのままシャフトとして使えそうだし、矢じりは消しゴムの中にでも隠せそうだし……」
「わたしが筆記用具の中に、分解した矢を紛れ込ませて持ってきたというの？」
「可能性の一つよ」
「じゃあ弓の方は？　霧切ちゃんには何度もリュックの中身を見せているし、弓になりそうなものなんてな

いのは知ってるでしょ？」
「ええ、それは認めるわ」
「だったらどうやってわたしが夕覇院さんを殺したというの？」
「弓がないのだとしたら、矢を手に持って、被害者に直接襲いかかったとも考えられるけど……いくら隙をついたところで抵抗されるのは目に見えているし、そもそも彼に近づくことすら許されない状況だった。彼は遺産を独り占めするため、私たちを閉じ込めておこうとしていたくらいだもの」
「やっぱりわたしには、彼を殺すことはできない」
「……そうだったらよかったのに」霧切は呟くように云う。「むしろ彼の死を目の当たりにして、私は結お姉さまが犯人かもしれないと疑うようになった」
「……どうして？」
「矢で射られた屍体を見て、わたしが真っ先に思い出したのは、『武田幽霊屋敷』殺人事件だった。あの事件では、弓矢のない場所に、巨大な弓矢を作り出すトリックが用いられたわ。それと同じことが、ここでも行なわれたのではないかしら」
「まさかそんな……過去に一度使われたトリックを再利用したの？」
「有効な殺人方法なら、何度使われても不思議ではないわ」
「それにしたって……」
「そのトリックでは、両開きの扉が弓の代わりになる。左右のドアノブを繋ぐように弦を張り渡して――でもここではドアノブがないから、鎖をその代用として、弓が完成する。ここに矢を番(つが)えて、扉が開く方向、つまり室内側から弓を引けば、ホールに向かって矢を射ることができるわ」
「そんなこと本当にできるの？　それで人を殺傷できるほどの弓になる？」

〈ホール側〉
〈室内側〉
矢
扉
鎖
リボン（弦）

「矢の先端にカリブドトキシンを塗っておけば、掠った程度でも相手を一時的に麻痺させることくらいはできる。刺さりさえすれば、殺すことも可能だわ」
「いや、でも……その弓をわたしが射たというの？　霧切ちゃんが気を失っている横で？」
「そうよ。そもそも、この弓の発想ができるのは、『武田幽霊屋敷』殺人事件を経験している人間だけだわ」
「あのトリックが使い回されたからって、わたしが犯人だって云うの？　そんなの、犯罪被害者救済委員会が提供しているトリックなんだから、元ネタが同じだってだけかもしれないじゃないか。それに……わたしの部屋から、ホールにいる夕覇院さんを狙うのは不可能だよ！　だって、ホールの中央には氷柱があって、それが障害物になる。夕覇院さんが倒れていたのは、柱の向こう側だったでしょ？」
「昨日までなら、確かに不可能だったわ。矢は真っ直ぐにしか飛ばせないから、どうしても氷柱に当たってしまう。でも今朝なら可能だった。何故なら、黒い箱を取り出すために氷柱を削ったおかげで、中心近くまで大きくえぐれていて、矢の通り道ができていたから」
「ち、違う！　わたしは水筒の紅茶を飲んで、君と一緒に気を失っていたんだ。なんの証拠があって、そんなことが云える？」
「証拠――」
　霧切は不安そうに、自分の髪に触れる。
　その右手はまだ少し赤くて、痛々しかった。
「証拠は、弓矢に使った弦よ」
「弦？」
「誰にもばれずに、なんの不自然さもなく、この館に持ち込むことができて、なおかつ弦の代わりになるくらい長くて強度のあるもの。それは、結お姉さまにしか用意できなかったものなの」
「わたしにしか――？」
「リボンよ」
　霧切は自分の髪に結ってあるリボンに触れる。
　本来、左右一対だったそれは、今は頭の左側にしかない。
「そう考えると――いつから組織が結お姉さまを利用することを考えていたのか、いつから新仙帝がこの計画を立てていたのか……一連の事件とは無関係に思えたジョニィ・アープとの狙撃戦さえ、リボンを新調するためだったのかもしれない」
「待ってよ、リボンを選んだのは君自身じゃないか」
「店を選んだのは結お姉さまよ」

「霧切ちゃん……」
　反論の余地はなかった。
　彼女のロジックは完成されていて、否定のしようがなかった。
　言葉に詰まるわたしに、霧切は一歩近づいて、怒ったような顔でわたしを見つめる。
「あなたにとって、妹さんの復讐はそんなに大事だったの？　復讐心に囚われて滅んでいった人たちを今まで何人も見てきたのに。それでも踏みとどまれなかったの？」
「君には――他人の心は解き明かせない。どんなに事件の推理ができても、人の気持ちはわからないんだ。それが君の弱点」
「私は……わかろうとした！　こんなにわかろうとしたことなんて、今までなかった！　それなのに、それなのに……」
「ごめんね、霧切ちゃん。こうするしかなかったんだよ」
　わたしは彼女を抱きしめる。
　それがとても罪深い行為で、たとえわたしの手が汚れていたとしても……彼女と今まで一緒に過ごしてきた時間のことを考えたら、そうせずにはいられなかった。
　霧切はわたしの胸に顔を埋（うず）める。
「髪を結ってくれる約束は？」
　彼女は訊いた。
「いつか……きっと」
　背後で建物の崩れていく音が聞こえる。
　抱き合ったまま、永遠に思えるほどの一瞬が過ぎて――霧切は顔を上げた。
「組織が来る。犯行に失敗した犯人は消されるわ」
「そうだね」わたしは肩を竦める。「でもそれを判定するカメラやマイクは建物と一緒に炎上したはずだよ。しばらくは猶予がある」
「それでも彼らからは逃げられないわ」
　霧切はわたしから一歩離れると、ポケットから手錠を取り出した。彼女がいつか『思い出の品』と呼んでいたものだ。それは最初の事件で、わたしと彼女を繋いだ絆。
　すると彼女は手錠の片方を、わたしの手首にかけた。
「これは……何？」
「彼らの好きなようにはさせない。あなたは私が責任をもって、司法の場へ連れていく」
「そんなのは無理だよ。それに……それは探偵の仕事じゃない」

「いいえ。犯人を告発する時には命をかける。それが探偵の仕事。だから……最後まで一緒よ」
　彼女はもう片方の手錠を、自分の腕にかけようとする。
「だめだよ！　霧切ちゃん！」
　君を危険にさらすわけにはいかない。
　わたしは彼女を突き飛ばそうとした。
　けれどその瞬間、一際強い風が吹いて——
　わたしは何かに背中を押された。
　そのまま気が遠くなり、気づくと鼻の先に地面の雪が広がっている。
　何が起こった？
　わたしは……倒れたのか？
　身体を起こそうとすると、背中に激痛が走った。
　霧切が何か声を上げながら、近くにしゃがみ込んでわたしを抱え起こそうとする。
「どうして？　どうして……」彼女は激しく動揺している。「結お姉さま、動かないで。背中に矢が——」
　矢？
　この背中の激痛は、矢が刺さっているから？
　でも誰が……
　わたしはその場に倒れたまま、身体をねじって、燃え盛る建物の方を見る。
　こちらにゆっくりと近づいてくる人影が見えた。
　黒焦げになった上着を雪の上に引きずりながら、ふらふらと亡霊のように歩いている。服も身体も、あちこち焼けただれているせいで、一見誰なのかわからなかったが……左目を押さえるような仕草をしていることから、何者か推測できた。
　夕覇院だ。
　生きていたのか。
　彼は右手に何かぶらさげていた。
「あれは……クロスボウ？　どうしてそんなものが……」霧切が声を震わせる。「そんなものがあるはずはないのに……」
「霧切ちゃん、逃げて……」
　わたしは声を絞り出す。手錠で繋がる前でよかった。今ならまだ、彼女だけでも逃げられる。
　夕覇院がゆっくりと近づいてくる。
　雪の上に布を引きずる音を立てながら——

「私の遺産を返せ……」
　まるで地獄から呼びかけるような声。
「霧切ちゃん」わたしはポケットから黒いカードを取り出す。「あいつの目的はこれだ。わたしがこれであいつを足止めするから、その隙に逃げて」
「ダメよ。状況が変わった」霧切は今にも泣き出しそうな顔で、力強く云う。「やり直さないと……もう一度初めから推理し直さないと！」
　霧切はそう云って、わたしの手から黒いカードを奪う。そしてわたしから五メートルほど離れた場所まで駆けていくと、夕覇院に向けて黒いカードを掲げてみせた。
「あなたが探しているのはこれでしょう？」
　霧切は声を上げる。
　夕覇院が足を止めて、そちらを見た。
　霧切は囮(おとり)となって、夕覇院を誘導するつもりのようだ。その間に、わたしを逃がそうという算段だろう。
　夕覇院の足運びが速くなる。
　ぼろぼろになった彼の何処にそれほどの余力が残されているのか。彼は雪を蹴って走り出し……真っ直ぐわたしのところへ向かってきた。
「結お姉さまっ」
　霧切が小さい悲鳴を上げる。
　夕覇院はその勢いのまま、わたしを靴底で足蹴(あしげ)にして踏みつける。そして何を思ったのか、わたしの背中に刺さっている矢を抜き取った。
「ううっ」
　痛みで思わず声を上げる。
　雪の上に、点々とわたしの血が飛び散った。
「やめて！」
　霧切の声が耳鳴りのように聞こえる。
　夕覇院はわたしから抜き取った矢を、手元のクロスボウに番えて、装填し直した。矢は一本しかなかったのだ。どうやら彼は、黒のカードよりもこちらを優先したらしい。
「動くな」
　夕覇院はクロスボウを霧切に向ける。
　霧切は夕覇院に向かって走り出していたが、あと数メートル足りなかった。
　霧切は立ち止まり、悔しそうに夕覇院を見返す。

二人は互いに手が届きそうで届かないくらいの距離で対峙する。その距離では、クロスボウを持っている夕覇院の方が、圧倒的に優位だった。
　夕覇院の顔は火でただれていて、表情はよくわからない。服はほとんど破けていて、露出した肌は赤黒く変色している。生きているのが不思議なくらいだ。そもそも左目を貫通して、頭部に矢が突き刺さっていたはずだ。それ自体は致命傷にならなかったということだろうか。
　その時ふと、わたしは気づいた。
　ズボンが破けて露出した彼の太ももに、V字型の小さな古傷があることを……
「いいわ。このカードを渡す」霧切は両手を上げて云った。「ただし私たちに手出しをしないこと。さもなければ今ここで、カードをへし折る」
「交渉のつもりか？」
　夕覇院は掠れた声で云う。押さえた左目から、涙のように赤黒い血が滴り落ちて、足元の雪を染めていく。
「それをこちらに投げて寄越せ」
「いいえ、私たちの安全が確保されるまでは手放さない」
「私を……怒らせるな」夕覇院の声にいっそう憎しみが満ちる。「私はもう……何もかもぶち壊してやりたい気分なんだ。だから……」
　わたしは雪の上に這いつくばったまま、夕覇院を見上げる。
　左目を押さえている左手——その手の中に、ぎらりと光る何かが見えた。
　ナイフだ。
　おそらく門美の屍体から抜き取ったものだろう。先端に血痕が付着している。彼はそれを、傷口を押さえるふりをして隠し持っていたのだ。
「霧切ちゃん……気をつけて！　そいつの左手——」
　わたしが云い終わらないうちに、彼は隠したナイフを霧切に向けて投げていた。
　霧切はわたしの声に反応して、素早く身構える。
　けれど一瞬、遅かった。
　ナイフは霧切の胸元へ向けて飛んでいく。
　もはやその射線上から、彼女は逃れられない。
　間に合わない——
　すると霧切はとっさに左手を前にかざし、身体をかばった。
　ナイフは音もなく、霧切の手のひらに突き刺さる。彼女は苦痛に顔を歪めて、ナイフが刺さったままの

左手を、右手で押さえるようにしながら、その場に膝をついた。

　あのナイフが門美殺害に使われた凶器だとすれば、毒物が塗られていたはずだ。使用済みとはいえ、神経毒の影響がまったくないとは云えない。

「霧切ちゃんっ！」

　黒いカードはいつの間にか霧切の手を離れて、雪の上に落ちている。

　けれど夕覇院はそちらには目もくれず、うずくまった霧切に追い打ちをかけるように、クロスボウの先端を向けた。

　矢は霧切の額を狙い澄ましている。

　霧切はようやく顔を上げて、自分の目の前に死が迫っていることに気づいた。

「残念だが、お前は『ない』」

　夕覇院の指が引き金にかかる。

　その瞬間、わたしは彼の足首に手錠をかけた。

　霧切がさっき、わたしに片方をかけて、もう片方を自分にかけようとした手錠だ。さっきまで片方は空いたまま、雪の中に埋もれていた。わたしはその存在を思い出したのだ。

　わたしと霧切の『思い出の品』――

　これでわたしの右手と、彼の左足が繋がった。

　わたしが力を込めて腕を引くと、夕覇院は文字通り足をすくわれたように体勢を崩した。クロスボウの狙いが霧切から逸れて、引き金を引くこともままならない。

　わたしはそれで勢いをつけ、立ち上がった。

　手錠を繋ぐ鎖はせいぜい一メートル程度。わたしが立ち上がると、夕覇院の足は自然と宙に持ち上げられる形となり、その結果彼はうつ伏せに転倒した。

「くそっ！　何を……」

　夕覇院が自分の置かれた状況を認識できずに戸惑う。わたしは彼に考える暇を与えない。力の限り腕を引き、燃え盛る館の方へ向かって、前進する。

「うあああああっ！」

　わたしの手首に手錠が食い込む。

　背中の傷が痛む。血が溢れ出しているのが自分でもわかる。

　それでも足を止めない。

　数十キロのそれを引きずって、少しでも遠くへ――

　彼女を守るために！

「結お姉さま――待って！」
　背後から呼びかける声は、気づけばかなり遠ざかっていた。彼女の容態が心配だけど、今は振り向くわけにはいかない。
　地面が雪でよかった。わたしの力でも、なんとか引きずっていける。
「貴様、やめろ！」
　夕覇院が身体をひねって仰向けになり、わたし目がけてクロスボウを撃つ。
　矢は再びわたしの背中に刺さった。
　けれど痛みはもはや、わたしになおさら狂気をもたらすものでしかなかった。
「ああああっ！」
「やめろ！　やめろ！」
　夕覇院が暴れ出す。
　わたしはそれを無視して、とうとうシリウス天文台の前まで戻ってきた。炎は空に渦を巻いて昇り、雪と涙で濡れるわたしの頬を熱くする。
「今まで何人の子供を誘拐してきた？」
　わたしは燃える館を横目にしながら、さらに雪の向こうへと足を進める。
「……な、何？」
「その『ゼロ』もどうせ、自作自演で手に入れたものなんでしょ？　わたしは……憧れてたのに！」
「何を云ってる？」
　次第に虚空が見えてきた。
　風が強くなり、わたしの無茶を押し留めようとする。まるで霧切ちゃんのようだ。
　でも、ここで止まるわけにはいかない。
　目の前には闇が広がっている。深い谷間が横たわり、すぐ先は奈落に続く崖。底がどうなっているのかは、吹き荒れる風音から想像するしかない。
「まさかお前……や、やめろ！」
　夕覇院は立ち上がろうとする。けれど思うようにいかない。わたしが片足を押さえているせいもあるだろうけれど、そもそも彼は全身に火傷を負い、立っているのもやっとのはずだ。
「七年前……五月雨繭という女の子を殺したな？」
　わたしは振り返って尋ねる。
「な、なんの話だ？」
「あの事件ではたくさんの探偵が、彼女を助けるために力を貸してくれた。一人一人の名前は覚えてな

いけれど……その中にお前もいたんだろう。目的はお金？　それとも名誉？　たとえなんであろうと……殺す必要はなかっただろ！　何故、妹を殺した！」

「そうか、あの時の……確かに私も捜査に加わったのは事実だ。だが何を勘違いしているんだ？　まさか私を誘拐犯だとでも思っているのか？　何を証拠にそんなことを……」

「思い出したんだ。あの日、わたしは――」

　図工で版画を彫る課題が遅れていたため、いつもより少し帰りが遅れた。家に帰ると、妹の姿はなかった。この時すでに妹は誘拐され、家の前に止められた車の中に拉致されていた。

　妹はきっと、車の中から助けを求めてわたしを呼んでいたはずだ。

　いや――実際は口を塞がれていて、声は出せなかったかもしれない。真実はわからない。

　けれど今でもわたしの頭の奥では、彼女の声が聞こえる。

　あの時、もう少し警戒していれば……

　なんの疑念も持たずに帰宅したわたしは、背後から近づく誘拐犯の存在にさえ、気づかなかった。

　はっとして振り返った瞬間、視界の中で星が散った。気づくとわたしは床に両手をついていた。

　後頭部が焼けるように熱い。

　ぼろぼろと自然に涙が零れる。

　何者かに殴られたのだ。

　やがて巨大な柱のような影が、わたしのすぐ横にそびえ立つ。

　殺される、と思った。

　初めて感じた死の恐怖。

　立ち上がらなきゃ。

　この恐怖に立ち向かわなければ、終わりだ。

　わたしは決断を迫られていた。

　ここで決断しなければ、何もかも失うことはわかっている。

　涙を拭って、立ち上がる。

　迷っている時間はなかった。

　やらなきゃ。

　わたしは犯人の両足にしがみつき、必死に抵抗した。それから犯人と揉み合いになった。

　死と隣り合わせの極限状況で、これを終わらせる方法は、一つしかないと気づく。

　この刃物で刺し殺す。

　気づけば、わたしの手には刃物が握られていた。

課題で使っていた彫刻刀だった。
躊躇はなかった。
そして——わたしは人を刺した。
その生々しい感触は、想像の産物なんかじゃない。現実だった。わたしは刺した。わたしは人を刺した。わたしは人を刺してしまったのだ！
何をやっているんだろう？
どうしてわたしはこんなことを？
手についた血を見下ろす。紛れもない、人の血だった。わたしがやったのだ。
これは夢？
血の臭い。
相手の身体に突き刺さったままの刃物。
震えるわたしの手。
それは紛れもなく現実だった。
犯人は太ももに彫刻刀が刺さったままの状態で、家を飛び出していった。
「お前の太ももにある傷が、その証拠だ！」
わたしは手錠を引き、夕覇院の足を引っ張り上げる。七年前にわたしが誘拐犯を刺したのと同じ場所に、古い傷痕がある。その特徴的なV字の傷は、紛れもなく彫刻で使う三角刀の痕だ。
「そうか……お前があの時の……これは何かの偶然なのか？　それとも……誰かが仕組んだことなのか……」
「認めるんだな？」
「いや、お前は間違えている……金？　名誉？　そんなもの、当時の私にとってはどうでもよかった。ただ……お前の妹はな……『あり』だったんだよ」
夕覇院はそう云って、焼けただれた口元を、にやりと歪めた。
頭の中が真っ白になる。
こんなやつ……
許しておけない。
殺すしかない。
死んであがなう他に、この汚れた生き物に救いなどない！
「結お姉さま！　ダメ！」
霧切の声だ。

彼女はまだ館の向こう側で、立ち上がれずに雪の上に膝をついたままだった。神経毒の影響だろうか。それでも必死にこちらへやってこようと、身体を引きずっている。
「霧切ちゃん」わたしは風に負けないように、大声で彼女に伝える。「君は何も間違ってない！　だからどうか……これからもずっと……」
　その時、館の方で大きな爆発音がして、足元が揺れるほどの地鳴りがした。
　次の瞬間、館が巨大な炎の球体に包まれたかと思うと、直後にすべてが弾け飛んだ。燃え盛る壁も柱も、ドームのパネルも、硝子窓も天体望遠鏡も、何もかもが、大小様々な欠片になって、四方へ飛び散った。
　次いで強烈な爆風がわたしを襲った。圧倒的なエネルギーに抗うことなどできなかった。手錠の先に数十キロの重しがあるにもかかわらず、わたしは枯れ葉のように吹き飛ばされ、宙を舞った。
　背後は、崖だった。
　自爆プログラムというのは、ただの脅しではなかったのだろうか。
　谷底へと落ちていく間際に、霧切の姿が見えた。
　彼女は館から距離を置いていたおかげか、爆風で吹き飛ばされずに済んだようだ。愕然とした表情でこちらを見ている。
　君は間違ってない！
　わたしは叫んだ。
　だからどうか、これからもずっと……
　凜々しく生きて。

3

　涙はもう、流れない。
　きっと一生分、流し終わったのだろう。
　顔が濡れているのは、雪が積もったせいだ。

　わたしは顔の雪を払おうとして、妙な違和感を覚える。
　右手が顔に届かない。
　手首に痛みを感じる。
　気づくと、手錠がかけられている。手錠から伸びる鎖を目でたどってみると……人の足があった。見え

ているのは足だけだ。胴体の方は、山のような瓦礫の下にあって、どうなっているかわからない。少なくとも生きてはいないだろう。
空は見えない。
けれど雪はまだ降り続いている。
ここは……谷底か。
わたしは地獄に落ちたんだ。
陽の光も届かない場所なのに、周囲はほのかに明るい。
まだ燃え盛る瓦礫があちこちに散らばっているせいだ。館の爆発によって、谷底まで吹き飛ばされてきたのだろう。
どうにか身体を動かそうとするが、まったく云うことをきかない。
どうやらわたしも、あの足だけの男――夕覇院と同じ運命にあるらしい。
わたしの両足は、赤々と燃え燻る瓦礫に挟まれていた。熱さや痛みを感じないのは、どうしてだろう。わたしは考えようとしたけれど……やめた。
視界がぼんやりする。
そうか、眼鏡だ。
眼鏡がないせいで、周りがよく見えない。

わたしはまだ……生きているんだろうか？
最後まで間違わずに生きられただろうか？
わたしがもっと優秀な探偵だったら……
なんの取り柄もない女子高生じゃなくて、才能に恵まれた天才だったら。
彼女を守ることができたはずなのに。
悔しい。
結局、わたしは何も守れないままだ。

「結お姉さま！　結お姉さま、何処っ？」

声がする。
あれは……
繭？

繭はずっと前に死んだはず。
　そうか。わたし、死んじゃったんだ。
　繭が必死にわたしを呼んでいる。
　そういえば小さい頃、こうしてかくれんぼしたっけ。意地悪してずっと隠れていると、不安そうにわたしを呼ぶんだ。

「結お姉さま！」

　瓦礫をかき分けて、彼女が顔を覗かせる。
　えへへ……見つかっちゃった？

「待ってて、今助けるから！」

　彼女はわたしの下半身を押し潰している瓦礫をどかそうとする。何処かの柱の一部だろうか。まるで巨大な木炭だ。彼女の力では、到底持ち上げられないだろう。
　それどころか、すでに彼女の手は真っ赤に焼けただれていて、物を掴むことさえつらそうだ。
　わたしを見つけるために、あちこち捜し回ったのだろう。燃える瓦礫をかき分け、わたしのところへきてくれたのだ。
　ありがとう。
　それだけでわたしは救われたよ。
　繭……

「しっかりして！　結お姉さま！」

　彼女の声。
　わたしは閉じかけた目を開ける。
　薄ぼんやりとした視界の中に繭がいる。
　彼女はわたしの顔にそっと手を近づけると――
　視界が急にはっきりした。
　まるで魔法みたいだ。

そこにいたのは、妹の繭ではなく、霧切響子だった。

「霧切ちゃん……ありがとう……」
　眼鏡、見つけてくれたんだ。

「結お姉さま、生きて帰るのよ！」

「お願い！」

「犯人扱いしてごめんなさい。どうか間違いを訂正させて。このままじゃ私……」

　君は間違ってなんかいない。
　だから胸を張っていいんだ。

　ああ……
　桜の花びら。

　綺麗だね、霧切ちゃん。

　君はとても……

終章 霧切響子

1

　霧切響子はベッドの上で目を覚ました。
　消毒薬の匂いがする。
　ベッドの横には点滴スタンドがあり、そこから伸びた管が、自分の腕に繋がれている。
　病室だ。
　痛みを感じて、両手を見ると、手首から先が真っ白な包帯で何重にも巻かれていた。
　痛みとともに、じわじわと記憶がよみがえってくる。けれどそれはまだおぼろ気で、とりとめがなく、包帯に染み出した血のように、輪郭がはっきりとしないものだった。
　その手をじっと見つめていると、病室のドアがノックされた。
　高校生くらいの女の子が顔を見せる。
　結お姉さま──！
　記憶が一気に湧き起こる。その奔流（ほんりゅう）に意識を吹き飛ばされそうになりながらも、霧切は目を閉じてじっと耐えた。そうして瞼（まぶた）の裏に広がる一瞬の静寂に、五月雨結と過ごした数か月が過ぎ去っていく。
　ようやく落ち着いて、目を開けると、そこには結ではなく、セーラー服を着た見知らぬ女子高生が立っていた。
「目が覚めたんですね！　今、看護師さんを呼びます」
　彼女は笑顔で云って、ナースコールを押した。
　あなたは……誰？
　霧切は尋ねようとしたが、声にならなかった。
　けれど相手は霧切の表情から言葉を察したようだ。
「私は遠秋津菜砂（とおあきつなずな）といいます」そう云って丁寧に頭を下げる。「霧切さんにお会いするのは初めてですけれど、お話はよく宿木（やどりぎ）さんから伺（うかが）っています」
「宿木……」
「以前、同じ事件に関わったと──」
　そこへ看護師が来て、霧切の体温や血圧を測り、点滴と包帯の状態を確認する。
「お身体の具合については、のちほど担当の先生から説明がありますので、もう少しお待ちください」
　看護師はそう云って、病室を去っていく。
　それと入れ違いで、さらにセーラー服の女子高生と、長身の男が入ってきた。
　そのサングラスにスーツ姿の男には見覚えがあった。『武田幽霊屋敷』の事件で出会った探偵、サル

バドール・宿木・梟だ。彼にはいくつかの事件の解決を手伝ってもらった経緯がある。
「また随分と無茶をしたようですね」
　彼はそう云って、手に持った白杖で椅子の位置を確かめてから、座った。もう一人のセーラー服の女の子は、彼の肘を摑んでサポートしている。
「見ての通り、あの件で目を少し悪くしまして。もともとナイーブな目でしたから、日常生活にさほど変わりはありませんが……仕事に関しては、彼女たちに手伝ってもらっているんです」
「あらためて……遠秋津菜砂です。彼女は灘月夜。二人とも聖アンヌ学園の二年で、今は宿木さんの元で探偵のお手伝いをさせてもらっています」
　赤毛のおっとりした感じの子が菜砂で、カチューシャをつけたロングヘアの子が月夜。二人の名前は、結から聞いて知っていた。『リブラ女子学院』の事件に巻き込まれた女子高生だ。
「あんたが中学生で、ランクが私より上だからって、偉そうにはさせないんだからね」月夜は宿木のうしろに隠れながら云った。「私たちに感謝しなさいよ。あんたを助けたのは私たちなんだから」
「彼女はこう云っていますが、別に感謝はいりませんよ」宿木は笑って云う。「むしろ謝らなければならないくらいです。我々がもっと早くシリウス天文台に到着していれば、事件を防げたかもしれない」
　シリウス天文台——
　その言葉に胸が痛くなる。霧切の脳裏には、未だにあの爆発の瞬間が、写真のように鮮明に残っている。膨張する炎の塊と、四散する建物の残骸。そして爆風に煽られて、崖の向こうへ落ちていく結の姿——
「君がここにいる理由。それを説明しましょう」宿木はサングラスの縁を押し上げて云った。「我々は新仙帝が死んだという情報を得て、彼の遺産が眠るとされるシリウス天文台へ向かいました。その遺産を手に入れれば、組織の中枢へ近づく足掛かりになると思ったからです」
「あ、勘違いしないでくださいね」菜砂が口を挟む。「宿木さんは犯罪被害者救済委員会を撲滅する活動をしているんです」
「ともあれ——現場に到着すると、信じられないような光景が広がっていました。シリウス天文台はすでにそこにはなく、それらしい残骸が散らばっているだけでした」
　宿木たちはそこで、雪の上に血痕があるのを見つけた。それをたどってみると、谷間の崖へと続いている。
　崖の底には、無数の瓦礫が山となって積みあがっていた。中にはまだ、細く煙を上げているものもあったという。
「遺産と呼べるようなものは何も見つからず、諦めて帰ろうとしたところ——瓦礫の中に倒れている君を

見つけました」宿木は霧切を指差して云った。「低体温症に、両手の重度の火傷――正直なところ、もうダメかと思いました。けれど君はこうして無事に命を取り留めた。これは奇跡と云っていいかもしれませんね。私はその手の言葉を信じてはいませんけれど」
「結お姉さまは？」
　霧切は尋ねた。
　それがこの病室での第一声だった。
「彼女についてですが……」
　宿木はそう云ってうつむくと、長い時間をかけて言葉を探していた。
　その沈黙はもはや、答えだった。
　霧切には、そのあとの言葉が容易に推測できた。
「――彼女は手遅れでした」
「そう……」
　霧切は白いカーテンを見つめる。
　取り乱したり、泣き喚いたりはしない。
　そのことが、菜砂たちにとっては意外だったようだ。
「ねえ、あんた。彼女が死んで申し訳ないって気持ちはないわけ？　もしかして、哀しいって気持ちさえないの？」月夜が捲し立てる。「それでも人間なの？　それでも探偵なの？」
　彼女は喋っているうちに感極まったのか、最後の方は涙声になっていた。
「やめなさい」
　宿木が彼女を制する。
「でも……でもっ……」
　月夜は結局、一人で泣きじゃくっていた。それを菜砂が慰める。
　――それでも探偵なの？
　霧切は自問する。
　自分はもう……探偵としては、死んだのかもしれない。
　もともと、誰かを守るだとか、誰かを助けるだとか、そういうつもりで探偵をやっていたわけではない。生まれた時から探偵だった。それだけだ。
　けれど結との日々で、無力さを思い知らされるばかりだった。探偵として生まれたことを誇りに思っていたつもりで、実際には驕（おご）っていただけなのかもしれない。
　結局、誰も守れないし、誰も助けられない。

一番近くにいた人さえ、死なせてしまった。

「犯罪被害者救済委員会との戦いはまだ終わっていません」宿木が云った。「新仙帝はいなくなりましたが、彼の遺志は未だに組織に受け継がれています。それどころか、『堕天』した探偵たちが、新仙の死と同時に、世界中に散り散りになってしまいました。彼らは遺産と聞いて飛びつくような安い野心など持っていません。その代わり――次のカリスマが現れるのを、舌なめずりしながら隠れて待つような、狡猾(こうかつ)さを備えています。号令がかかれば、いつでもその本性をむき出しにして暴れ回るでしょう。だから――」

こんな時に云うことではないけれど、と宿木は前置きして、続けた。

「彼らを狩る仕事を一緒にしてほしいんです。我々には君の力が必要です」

宿木は静かに、諭すような声で云った。

けれど霧切はただ、首を横に振るだけだった。

今さら自分に何ができるというのか。

霧切響子はもう死んだのだ。

あの日、彼女と一緒に。

2

退院する頃にはもう、桜は散っていた。

霧切にとって、その春は白いカーテンと、孤独で終わろうとしていた。

退院してもまだしばらくは、手の包帯は取れそうにない。神経が傷つかずに済んだのは幸運だったと医者は云っていた。けれど霧切は、ボロ布のようになった自分の手を見て、とても幸運だとは思えなかった。

病院を出たその日。霧切はバスに乗った。結と一緒に何度も乗ったバスだ。

行き先は探偵図書館。

窓辺に肘をついて、流れる景色を見ながら、シリウス天文台での事件を振り返る。霧切の中では、事件はまだ終わってはいなかった。

問題はクロスボウの存在だ。

夕覇院が襲撃されたのは弓矢によるものだが、シリウス天文台の何処かにクロスボウが存在したのであれば、推理をやり直す必要がある。矢を射ることができたのは結だけ、という前提が成り立たなくなるからだ。

確かにクロスボウは、本館の何処を探しても見つからなかった。けれど先入観に囚われずに、きちんと

記憶を検め、冷静に論理をまっとうすれば、正しい答えにたどり着けたはずだった。
　ではクロスボウは何処に隠されていたのか？
　おそらく——地下通路だ。
　地下通路から本館へと上がる階段の一番下。床に設置された埋設灯の硝子板が、何故か氷でできていた。その氷の下に、クロスボウは隠されていたと考えられる。
　しかもただ置かれていたのではなく、殺傷性のある罠として設置されていたのではないか。
　たとえばこうだ。番えた矢の先端を、階段の上へ向けた状態で、クロスボウを固定する。訪問客が訪れた時点では、氷の板が目隠しになって、床下にあるクロスボウの存在を確認できない。
　けれど氷の板はいずれ溶ける。自然に溶けたのか、照明の熱が使われたか……少なくとも半日で蓋がなくなる程度に調節されていただろう。
　そして弓矢の罠が発動するのは、誰かが本館の跳ね上げ戸を開けて、階段を下りようとした時だ。
　振り返ってみれば、左目に矢の刺さった夕覇院は、跳ね上げ戸の近くに倒れていた。跳ね上げ戸の上に置いておいたペットボトルも倒れていた。ただしそれは、夕覇院が火をつけて回った際に倒したものかもしれない。
　いずれにしても彼は、跳ね上げ戸を開けたのだ。
　室内側からは開けられない戸を、どうして彼が開けることができたのか。それは氷柱から黒い箱を取り出し、電子キーとなるカードを手に入れたからだ。
　あの黒いカードは手錠を外す他に、跳ね上げ戸のロックを外すこともできたのではないか。
　彼は遺産を手に入れたことで、帰り道を急いだ。窓から出ることもできたはずだが、足跡をたどられることを嫌がったのかもしれない。彼は跳ね上げ戸が開くことに気づき、地下通路を抜けて、Ｂ棟から出ようと考える。
　しかし戸を開けて、階段を下りようとした時、下から矢が飛んできた。引き金とワイヤーを使った単純なトラップだろう。夕覇院は何者かの計画通り、矢によって倒れる。
　ではその罠を仕掛けたのは誰なのか？
　矢を受けた夕覇院本人は除外していい。
　雪村、それとも門美？
　どちらかが黒幕だった可能性もなくはない。けれど彼らが被害者として殺害されているのも事実だ。
　黒いカードをカギにしたトラップであるということは、罠を仕掛けた人物は組織側の人間ということになる。だとすれば、部屋が九十度以上に傾くことも知っていたはずだし、それなら密室トリックで殺害されるのをかわすこともできたはずだ。しかし彼らはトリックの餌食になっている。ゆえに彼らは黒幕ではない。

残るは五月雨結——

けれど彼女もクロスボウを仕掛けた犯人ではない。何故なら、彼女は私にドライバーを差し出し、あの氷の蓋を開けようとするのを手伝っているからだ。クロスボウがそこにあることを知っていたら、その行為は致命的になる。

結はクロスボウの存在を知らなかった。

だから——少なくとも彼女は『黒の挑戦』の犯人ではない。

けれど夕覇院に矢を放ったのが、彼女ではないと断言できるだろうか？　彼女はクロスボウの存在を知らなかったからこそ、リボンを使った弓で、夕覇院を撃ったと想像することはできる。たとえば遺産にたどり着こうとしていた夕覇院を牽制(けんせい)する目的で、矢を射たのが、たまたま刺さってしまったとか。

いや、それは考えにくい。

問題となるのは矢の存在だ。もし結が夕覇院を射たのだとしたら、矢をあらかじめ隠し持ってきたことになる。そしてその矢は、そのあと夕覇院によってクロスボウに番えられ、今度は結が背中を撃たれている。夕覇院は地下通路にクロスボウがあることを知り、武器として持ち出したのだろう。

結が持ってきた矢が、地下通路に隠されていたクロスボウの規格に、都合よく当てはまったというのだろうか。クロスボウの矢はメーカーによって長さも重さも違う。弾丸が違えば銃は撃てないのと同じで、矢が違えばまともに射ることはできない。

夕覇院に刺さっていた矢は、そもそも地下通路のクロスボウにセットされていたものとみるのが自然だ。

つまり——結は矢を撃ってはいない。

夕覇院は黒いカードを手に入れたあと、跳ね上げ戸から出ようとしたところ、罠にかかって、撃たれたのだ。

以上の推論から、夕覇院を襲ったクロスボウを仕掛けた人物は、霧切自身を含めて、あの場所に集まった五人の中には存在しないと考えられる。

やはり第三者が存在したのか？

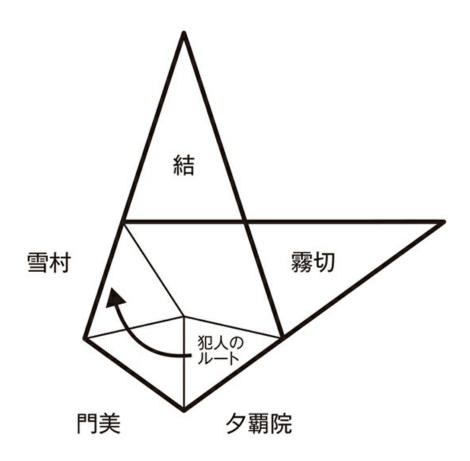
少なからず五人以外の何者かが、この事件に積極的に関与しているのは間違いない。そしてその人物は、設置型の罠を仕掛けている点からみても、現場にはいなかった可能性が高い。さらに云えば、組織の人間であることは間違いないだろう。

それが誰なのか、今ならわかる。

——新仙帝。

入院している間に、霧切のもとに祖父の不比等から電話がかかってきた。途絶えていた定期連絡が再開されたのだ。
　不比等は新仙帝を殺害した容疑者として、警察に勾留されていたという。
　その電話で、新仙の死が確かなものであることを知った。そして彼の死の場面に、五月雨結がいたことも知らされた。
『二人がどんな話をしていたかはわからん。問い質している時間もなかったからな。まあろくでもないことだろうと想像はつく。五月雨くんがそのことを響子にも伝えていないのだとしたら……おそらくは響子、お前に関する話だろう』
　霧切は取り残されたような気分になった。世界は自分を置き去りにして回っていた。結は一人で先へ行ってしまった。どうして相談してくれなかったのだろう。どんな理由があるにせよ、話してほしかった。
　バスから見える風景は、次第に閑静な高級住宅街になっていく。不思議とひと気のない町並みだった。
『次は探偵図書館前――探偵図書館前――』
　バスのアナウンスが告げる。
『霧切ちゃん、降車ボタン押させてあげるよ』
「別に押したいなんて云っていないわ」
『それならわたしが押すけどいいの？』
「どうぞ」
『……やっぱり一緒に押そう。せーので』
「いいから早くして」
『ふふ、冗談冗談』
　霧切は窓辺のスイッチを押した。
　まもなく、バスが止まる。霧切はバスを降りて、探偵図書館の門を目指した。
　塀に沿って歩きながら、再び事件について思い返す。
　新仙帝が裏で暗躍していたのだとしたら、事件の様相は大きく変わってくる。
　事件が起きた時点で、新仙は死んでいるため、実行犯にはなり得ない。シリウス天文台には他に実行犯がいたはずだ。
　新仙帝は黒幕というより、やはり『呪い』だろうか。極限までに肥大した執着心が、犯行計画を動かしたのだ。死してなお強く、不気味に――
　おそらく新仙は、結に『黒の挑戦』の犯人役を持ち掛けたのだろう。結には妹の誘拐事件の件で、復

讐すべき相手がいる。いずれ彼らがそれを利用する日が来るだろうと、霧切は予想していた。けれどそれに備える術がなかった。
『君には——他人の心は解き明かせない。どんなに事件の推理ができても、人の気持ちはわからないんだ。それが君の弱点』
　その言葉を思い出すと、手の傷よりも、ズキズキと胸が痛む。
　結は自分の心を解き明かしてほしかったのだろうか。
　気持ちをわかってほしかったのだろうか。
　彼女が結局、『黒の挑戦』に乗ったのかどうかはわからない。
　けれど今では、彼女は今回の殺人事件の犯人ではなかったと断言できる。
　その根拠は睡眠薬だ。
　彼女は霧切と同じ水筒で紅茶を飲んでいる。その水筒には睡眠薬が入れられていた。当初、結はそれを飲んだふりをしてやり過ごしたのだと思われたが、彼女が夕覇院を襲撃していないというロジックが成立した今、彼女もまたそれを知らずに飲んで、気絶させられていたのだと考えられる。
　誰が睡眠薬を混入させたのか？
　チャンスは誰にでもあった。交代で氷を削っている間、ホールに集めた食糧が見過ごされる場面は何度もあった。
　結論から云えば、夕覇院に違いない。

結
雪村
霧切
犯人の
ルート
門美
夕霸院

彼は二日目の昼の間に、門美を殺害する算段を立てていた。睡眠薬はそのために仕込まれたものだ。彼は氷を削る作業を休んでいる最中に、飲料水として用意されたペットボトルや水筒に睡眠薬を入れたのだ。霧切と結は、その日はそれらの飲料水には手をつけていなかった。
　そして夕覇院はその夜、隣り合う二つの部屋——門美と夕覇院の部屋を同時に上方へと傾けて、窓を行き来する。密室トリックについては、推理した通りだ。このトリックを成功させるには、被害者は昏睡していなければならない。
　こうして夕覇院は門美を殺害した。
　ここまでは以前の推理と同じ。
　では一日目の夜、雪村殺害についてはどうだったのか。
　部屋が隣り合っている同士でなければ、密室が作れないという前提に立てば——結が犯人ではないとした場合、残るは門美しか犯人になり得ない。
　しかし彼が一日目にペットボトルの睡眠薬を飲んでいたのは間違いない。その夜は昏睡していたと考えられる。
　一日目の夜に雪村を殺害したのは門美ではない。
　もちろん結でもない。
　だとすれば前提が間違っているのだ。
　例の密室トリックが成立するのは、犯人と被害者の部屋が隣り合っている場合のみ——霧切は当初そう思い込んでいた。
　けれど本当にそうだろうか？
　たとえば部屋を三つ同時に傾けたらどうだろう。
　犯人の標的は、二つ隣の部屋にいる。通常であれば、犯人は鎖の制約により標的の部屋にたどり着くことさえできない。けれど犯人と標的の部屋の間にある、第三の部屋を同時に傾けてしまえば——密室を出入りするための道が空中に出来上がるのだ。
　一日目の夜、この中間の部屋には門美がいた。けれど彼は睡眠薬を飲んでいたため、部屋が傾けられても気づかない。
　夕覇院はこの方法で、雪村を殺害したのだ。
　いくら現場へのショートカットとはいえ、手錠の鎖はぎりぎり届くくらいの距離だったかもしれない。けれどそのための毒ナイフだ。相手の部屋の窓にさえ到達できれば、あとはナイフを被害者目がけて落とすだけ。
　夕覇院以外に犯人はあり得ない。

それが論理的な解答だ。
　それなのに——
　どうして結が犯人だと思い込んでしまったのだろう。
　もしかしたら今回のシリウス天文台の殺人事件は、結が『黒の挑戦』を受けようが受けまいが、彼女が犯人であるかのように見立てられる構造になっていたのではないだろうか。
　結が犯人役を名乗り出れば、計画通り『黒の挑戦』が動き出す。
　もし犯人役を断った場合——もしくは犯人役を受けておきながら実行を躊躇したり、中止したりした場合——それでも当初の計画通りに事が運ぶように、あらかじめ事件を動かすための駒を投入しておく。それが夕覇院だ。もっとも、駒自身に操られている認識があったかどうかは定かではない。
　これが新仙帝の遺した『呪い』だ。
　彼は何故、わざわざこんな手の込んだことをしたのだろう。
　霧切は亡霊に問いかける。
　私を破滅させたかった？
　探偵として最大の過ちを犯すという屈辱を与えたかった？
　それなら——思い通りになったでしょう？
　大切な人を犯人にしてしまった。
　そして……殺してしまった。
　推理の軌道修正はいつでもできたはずだ。それができなかったのは……相手が結だったからだ。
　彼女と歩んだ道。
　彼女と過ごした時間。
　彼女と行きたい場所。
　彼女の好きなもの。
　彼女の笑顔。
　彼女が犯人のはずはない。
　感情が論理を上回っていた。
　だから——探偵としてそれを否定しなければならなかった。否定するのが当然だった。そう思い悩んでいる時点で、すでに推理の平衡感覚は失われていたのかもしれない。結果的に、たどり着いた答えが歪んでいることに気づけなかった。『彼女は犯人ではない』という仮説は、感情的にそう思っているだけだと、切り捨ててしまったのだ。
　探偵であろうとしたがために、何もかも台無しにしてしまった。

こんなことなら、最初から彼女のことなんか知らなければよかった。
　知ろうとなんかしなければよかった。
　他人の心なんて——
　結お姉さま。
　どうして否定してくれなかったの？

３

　霧切は探偵図書館の門を抜け、洋館風の建物に入った。古い木と本の香りがして、少し懐かしい気分になる。
　カウンターに登録カードを差し出して、更新を申請する。五十代くらいのおじさんがカードを受け取り、緩慢な動作で奥のパソコンを操作し始めた。
「ああ、更新がありますね。書き換えますか？」
　霧切は肯く。
　五分ほどして、新しく書き換えられたカードを職員が持ってきた。

　霧切響子　DSCナンバー『９１０』

　カードには『0』が刻まれていた。
　けれど霧切の表情は何一つ変わらなかった。何も嬉しくないし、喜んでくれる人もいない。ただこれで、希望ヶ峰学園のスカウトの目には留まりやすくはなっただろう。この数字に、それ以上の価値などない。
　けれど今となってはもう、父に会って投げかける言葉も見つけられそうになかった。このまま会いに行っても、慰めてもらいたくて来たのだと勘違いされそうだ。そんな未来を想像すると……少しうんざりする。
「私宛てのメッセージはありませんか？」
　霧切は職員に声をかける。別に何も期待はしていない。けれど……もしかしたら、と思った。
「ああ、ありますね」
　職員はゆっくりと椅子から立ち上がり、カウンターの奥にある棚をごそごそと探り始めた。霧切はうろうろとカウンターの周りを歩いて時間を潰した。それから十分近く経って、ようやく職員が戻ってきた。
「メモが一枚ね。はい、どうぞ」

職員は紙切れを差し出す。
　そこには見慣れた文字で、こう書かれていた。

『わたしの誕生日』

　結の文字だ。間違いない。それを見ただけで、胸の奥がざわつく。
　けれどそれ以上のことは何も書かれていない。
　結の誕生日は八月三十一日。
　彼女は次の誕生日をとても楽しみにしていた。一緒に海に行くんだって、張り切っていたから、よく覚えている。
　ＤＳＣナンバー『８３１』の棚を調べてみる。
『８３１』の探偵は一人しかいなかった。手に取って、ファイルを開く。プロフィール欄には故人を示すスタンプが押され、没年が記載されていた。まったく見知らぬ探偵だ。
　パラパラとファイルをめくっていると、ページの間から白い封筒が出てきた。
　封筒の表には、やはり見慣れた文字。

『見つかっちゃった？』

　まるで彼女の声が聞こえてくるかのようだ。
　霧切は封筒を手に取ると、ファイルを戻した。
　誰もいない閲覧室に移動して、深呼吸する。それから埃っぽい窓明かりの下で、封筒を開けた。
　中には数枚の便箋が畳まれていた。
　見慣れた文字の向こうに、彼女の笑顔が浮かぶ。

『霧切ちゃんへ
　君がこれを読んでいるということは、
　何もかも終わったということだね。
　わたしと君の最期の事件、どうだった？
　君が無傷で帰れていたらいいのだけど。

わたしがどうして君の前からいなくなったのか、
君は疑問に思ってるかもしれない。
でも詳しいことは云えないんだ。
得意の推理で解き明かしてみて。
その答えの先に、きっとわたしがいるよ。

君は以前、こう云っていたね。
探偵であるということは、
生きているということと同じ。
わたしはそれを聞いて、
君はなんて重たいものを背負っているんだろうって思った。

それでも君は平気な顔をして、
弱音なんか吐かずに真っ直ぐに前を向いていて……
探偵の君がとても凛々しく見えた。
年下なのにね。
いつしかわたしは、君のためにできることはないかって、考えるようになっていた。

ねえ、霧切ちゃん。
君のその重荷を、
わたしは少しでも分かち合えたかな？
それとも余計に、
重たくさせちゃったかな？

もしかしたら君は今、
探偵をやめようなんて思ってるかもしれない。
きっと背負ってるものが重たくなりすぎたんだね。
それなら少し休んで振り返ってごらん。
君を支えてくれる人が、そこにはきっといるから。

そろそろお別れの時間。
ごめんね、霧切ちゃん。
わたしのせいで迷惑ばかりかけちゃって。
最後の一行に書く言葉は、最初から決まってた。
さよならは最後から二番目。
ここまで云えばわかるでしょ？　——今までありがとう、霧切ちゃん。

五月雨結』

霧切は便箋を畳み、封筒に戻した。それをポケットに入れて、探偵図書館を出る。
古びた門を抜け、いつか結と通った道を、一人で歩く。春の終わりの風が、緑の匂いを運んでくる。
霧切は病室で宿木が云っていたことを思い出していた。

「我々がシリウス天文台にたどり着いたのは十八日の朝——夕霸院の死亡推定時刻から計算すると、建物が爆発してから半日以上過ぎていることになります。つまり霧切さん、君は少なくとも一晩の間、谷底で雪の中に倒れていたことになります」
「……そう」
「それでも凍死せずに助かったのは、五月雨さんのおかげですよ」
「結お姉さまが？」
「君を見つけた時、五月雨さんが君の身体を守るように覆いかぶさっていたんです」

ねえ、霧切ちゃん。
君のその重荷を、
わたしは少しでも分かち合えたかな？

霧切は塀沿いの道を歩いて、バス停まで戻った。
いつものように人通りのない静かな道。
霧切は誰もいないバス停に立ち、道の先を眺めているうちに、溢れ出す涙を我慢しきれなくなっていた。
感情は探偵にとって不必要なはずなのに。

今まで巧くやれていたのに。
頬を伝ってぼろぼろと涙が零れる。
どれだけ拭っても抑えきれない。
包帯が涙で濡れる。
霧切はとうとうその場に膝をついて、声を上げて泣き出していた。
「ごめんなさい……結お姉さま……」
霧切は泣きじゃくりながら、結の名前を何度も呼ぶ。
呼んだら助けに来てくれるんでしょう？
必ず助けに来てくれるって……
結お姉さま。
結お姉さま……

4

梅雨入りの頃に、霧切の手を覆っていた包帯がようやく外れた。火傷自体はほとんど回復したが、見た目は元通りにはならなかった。形成手術を繰り返していけば、今よりは良くなりますと医者は云っていた。けれどこの手の傷を消していくことは、自分の過ちから目を逸らすことのように思えて、安易に肯くことはできなかった。
包帯が外れたことで、ようやく自分の手で三つ編みを編めるようになった。けれど必ず右側は、編まずにそのままにしておいた。彼女の云っていた「いつか」はたぶんずっと来ないだろうけれど——ちょっとしたおまじないみたいなものだ。
ある雨の日、霧切は結の墓を訪ねた。電車とバスを乗り継ぎ、五時間かけてたどり着いた。山の中腹にあって、眼下に小さな町が見えた。あそこが結の生まれ育った町だろうか。
結の墓は、墓場の隅に、申し訳程度に立っていた。まだ新しい花が置いてあり、彼女の死を悼(いた)む人が他にもいることに、少し安心した。
霧切は墓石の前に花を置いて、手を合わせた。
「これからも見守っていてね」
そう云って立ち上がると、両手に黒い手袋をはめる。
そして携帯電話で、宿木を呼び出した。
「例の件、私にも手伝わせて。世界中に『堕天』した探偵たちを一人残らず排除しましょう」

５

　それから数年後――
　霧切は希望ヶ峰学園の教室の窓から、外を眺めていた。柔らかい風に遊ぶ髪を、手袋をしたままの指先で耳にかける。
　三つ編みは左だけ。おまじないみたいなものだ。そういう非科学的で非合理なものは、もちろん信じていない。けれど――守られている気がする。
　霧切たちの活動の甲斐もあってか、『堕天』した探偵たちも今ではほとんど姿を消し、まるで春が訪れたかのように、世界は落ち着いている。けれどこれで戦いが終わったとは思えない。この平和の裏で、息を潜めて機を窺っている死神たちの足音が、霧切の耳には、はっきりと聞こえていた。
　携帯電話が震える。新しい依頼のメールが届いていた。
　霧切は教室を出て、メールに記載されていた番号に電話をかける。依頼主は隣の町に住む富豪で、自分の屋敷で起きた殺人事件を解決してほしいとのことだった。
「ええ、はい……」
　携帯電話で会話しながら、廊下の角を曲がる。
　すると角の先から男子生徒が現れて、出合い頭に霧切とぶつかった。
　二人ともその場に尻餅をつく。
「ご、ごめん！」
　男子生徒が慌てた様子で声を上げる。
「こちらこそ、悪かったわ。電話をしていて――」
　その時、窓硝子を破って外から黒い球が廊下に飛び込んできた。
　それはものすごい速さで霧切たちの頭上を横切り、轟音を立てて廊下の壁にめり込んだ。まるで大砲でも撃ち込まれたかのようだ。
　よく見るとそれは、競技用の砲丸だった。
「さくらちゃんがハンドボールと間違えて砲丸投げちゃった！」割れた窓の向こうに、霧切のクラスメートが顔を出す。「大丈夫だった？」
「うん」
「ええ」
　霧切は立ち上がって、あらためて壁にめり込んだ砲丸を見つめる。もし彼にぶつからずに普通に歩い

ていたら、直撃していたかもしれない。電話の最中で注意が散漫になっていたし、避けることもできなかっただろう。
「あ、あの……霧切さん、これ。落としもの」
　彼は床に落ちていたカードを拾って、霧切に手渡した。それは探偵図書館の登録カードだった。転んだ拍子に、パスケースから飛び出したらしい。
「ありがとう」
「それって、探偵の——」
「あなたには関係ないわ」
　そう云って彼の横をすり抜けて、廊下を進む。
　たとえクラスメイトだろうと他人と関係を築くつもりはない。他人に踏み込みすぎれば、判断を誤る要因になる。情を抱けば、なおさらだ。
　そのまま立ち去ろうとする霧切に、彼が声をかける。
「霧切さん！　これから探偵の仕事？」
　霧切はその声を無視して、歩き続ける。
「もしかして隣町の殺人事件？」
　その言葉に、霧切は思わず足を止めて振り返る。
「ボク、その犯人を目撃しちゃったかもしれないんだ……」
　こんな偶然があるだろうか。
　霧切は腕組みして首を傾げる。
　彼は一体何者なの？
　確か『超高校級の幸運』として入ってきた男子生徒——名前は苗木(なえぎ) 誠(まこと)。
「いいわ。話を聞かせて、苗木君」

あとがき

　本書のシリーズが始まったのは七年前。

　ご存じの通り彼女は、　にとってはあくまで『よその子』——たとえるなら、ある日教室にやってきた転校生でした。

　人を寄せつけない雰囲気に、陰のある顔つき。かつて『ミステリアス』とあだ名されていたという彼女は、噂通り素性を悟らせない人物でした。彼女をよく知るという小高和　さんから、いろいろと話を聞き出そうとしてみたり、彼女の言動を観察してみたり……そうして七年もの間、教室の片隅から彼女のことを眺めてきましたが、結局のところ、窓辺の席にたたずむ彼女が、遠い目で何を見つめていたのか、　はその半分も知ることができなかったのではないかと思います。

　それでもこうして、シリーズ七　目に至り、完結を迎えられたのは、ゲーム本編の頃から彼女を応援し続けてくださったファンの　様の後押しによるものに違いありません。あらためて感謝申し上げます。ありがとうございました。

　物語の結末は、シリーズ開始当初の段階でほとんど決まっていました。それを途中で捻じ曲げる誘惑には何度も駆られましたが、それは彼女たちの生き様を否定するようで、はばかられました。たとえその選択が間違っていても、選択に臨む誠実さだけは失うことはなかったと、自負しています。彼女同様に。

　七年といえば、片思いが思い出に変わるのにちょうどいいくらいの時間じゃないかと思います。願わくは、　様の心の中に、これまでの物語が淡い思い出として、いつまでも残り続けることを　ります。

　最後に、シリーズの　行に携わってくださった関係者の方々、そして本書を手に取っていただいた読者の　様にお礼申し上げます。

ありがとうございました。

北山猛邦

星海社FICTIONS
キ1-07
ダンガンロンパ霧切
7
北山猛邦
Kitayama Takekuni
星海社
シリーズ10周年に贈る『ダンガンロンパ霧切』最終巻！
宿敵「犯罪被害者救済委員会」最強の刺客、新仙帝が仕掛けた最後の事件。
試されるのは五月雨結との絆——!?
霧切一族の血脈と五月雨の後悔が交わるとき、探偵の宿命が少女達を襲う!
原作ゲーム「ダンガンロンパ」のシナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の 霧切響子の過去——。
これぞ“本格×ダンガンロンパ”。
これにて大団円！
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『「クロック城」殺人事件』（講談社ノベルス）で第24回メフィスト賞を受賞しデビューする。
代表作として、デビュー作に端を発する『「瑠璃城」殺人事件』（講談社ノベルス）などの一連の〈城シリーズ〉や、
『踊るジョーカー』（東京創元社）などの〈名探偵音野順の事件簿シリーズ〉、
『猫柳十一弦の後悔』（講談社ノベルス）などの〈猫柳十一弦シリーズ〉がある。
小松崎 類
Komatsuzaki Rui
デザイナー・イラストレーター。Too Kyo Games（トゥーキョーゲームス）合同会社所属。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。

星海社 FICTIONS
キ1-07
ダンガンロンパ霧切 7
北山猛邦
Kitayama Takekuni
シリーズ10周年に贈る『ダンガンロンパ霧切』最終巻！
宿敵「犯罪被害者救済委員会」最強の刺客、新仙帝が仕掛けた最後の事件。
試されるのは五月雨結との絆――!?
霧切一族の血脈と五月雨の後悔が交わるとき、探偵の宿命が少女達を襲う!
原作ゲーム『ダンガンロンパ』のシナリオライター・小高和剛からの直々の指名を受け、
「物理の北山」こと本格ミステリーの旗手・北山猛邦が描く
超高校級の 霧切響子の過去――。
これぞ“本格×ダンガンロンパ”。
これにて大団円！
北山猛邦
Kitayama Takekuni
2002年、『『クロック城』殺人事件』(講談社ノベルス)で第24回メフィスト賞を受賞しデビュー。
代表作として、デビュー作に端を発する『『瑠璃城』殺人事件』(講談社ノベルス)などの一連の〈城
『踊るジョーカー』(東京創元社)などの名探偵音野順の事件簿シリーズ、
『猫柳十一弦の後悔』(講談社ノベルス)などの〈猫柳十一弦シリーズ〉がある。
小松崎 類
Komatsuzaki Rui
デザイナー・イラストレーター。Too Kyo Games(トゥーキョーゲームス)合同会社所属。
『ダンガンロンパ』シリーズのキャラクターデザインを担当。
艶にあふれた曲線と着彩で魅力的なキャラクターを描き出す気鋭のイラストレーター。
2020年『ダンガンロンパ』シリーズ10周年!!
ダンガンロンパ/ゼロ (上)(下) 小高和剛
ダンガンロンパ霧切 1〜7 北山猛邦
ダンガンロンパ十神 (上)(中)(下) 佐藤友哉
キ1-07

「わたしと君の最期の事件、どうだった？」
北山猛邦
Kitayama Takekuni
Illustration
小松崎類
Komatsuzaki Rui
星海社FICTIONS
キ1-07
”本格×ダンガン”!!
衝撃の完結編を
見逃すな！
最後の敵は自分自身!?
「物理トリックの北山」の真骨頂、これが本格ミステリーだ

ダンガンロンパ霧切 7

2020年10月1日発行（01）

者　北山猛邦

発行者　太田

発行所　　式会　星海
112-0013
東　都文　区音羽1-17-14
音羽 Kビル4
htt s://www.seikaisha. o.

発売元　　式会　　談
112-8001
東　都文　区音羽2-12-21
htt s://www.ko ansha. o.